

ス

第二十七條 鐵道係員旅客又ハ荷送人若ハ荷受人ト通謀シ運賃ノ一部若ハ全部ヲ免レシメタルトキハ三年以下ノ重禁錮ニ處シ五百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二十八條 鐵道係員道路踏切ノ開通ヲ怠リ又ハ故ナク車輛其ノ他ノ器具ヲ踏切ニ留置シ因テ往來ヲ妨害シタルトキハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三章 旅客及公衆

第二十九條 運賃ヲ免ルルノ目的ヲ以テ左ノ所爲ヲ爲シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

一 有效ノ乗車券ナクシテ乗車シタルトキ

二 乗車券ニ指示シタルモノヨリ優等ノ車ニ乘リタルトキ

三 乗車券ニ指示シタル停車場ニ於テ下車セサルトキ

第三十條 運送品ノ種類若ハ性質ヲ詐稱シ又ハ運賃ヲ免ルルノ目的ヲ以テ詐偽ノ所爲ヲ爲シタル者ハ三月以下ノ重禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 鐵道運送ニ關スル法令ニ背キ火藥類其ノ他爆發質危險品ヲ託送シ又ハ車中ニ携帶シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條 列車警報機ヲ濫用シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十三條 旅客左ノ所爲ヲ爲シタルトキハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

一 列車運轉中乗降シタルトキ

二 列車運轉中車輛ノ側面ニ在ル車扉ヲ開キタルトキ

三 列車中旅客乗用ニ供セサル箇所ニ乘リタルトキ

第三十四條 制止ヲ背セスシテ左ノ所爲ヲ爲シタル者ハ科料ニ處ス

一 停車場其ノ他鐵道地内吸煙禁止ノ場所及吸煙禁止ノ車内ニ於テ吸煙シタルトキ

二 婦人ノ爲ニ設ケタル待合室及車室等ニ男子立入リタルトキ

第三十五條 車内、停車場其ノ他鐵道地内ニ於テ妄狀ヲ現ハシ其ノ他不良ノ行狀ヲ爲シタル者ハ科料ニ處ス

第三十六條 車輛、停車場其ノ他鐵道地内ノ標識揭示ヲ改竄、毀棄、撤去シ又ハ燈火ヲ滅シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

信號機ヲ改竄、毀棄、撤去シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三十七條 停車場其ノ他鐵道地内ニ妄ニ立入リタル者ハ科料ニ處ス

第三十八條 暴行脅迫ヲ以テ鐵道係員ノ職務ノ執行ヲ妨害シタル者ハ一年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三十九條 車内、停車場其ノ他鐵道地内ニ於テ發砲シタル者ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 列車ニ向テ瓦石類ヲ投擲シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 第四條ノ規定ニ違反シ傳染病患者ヲ乗車セシメタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス傳染病

患者其ノ病症ヲ隱蔽シテ乗車シタルトキ亦同シ

前項ノ場合ニ於テ途中下車セシタルトキト雖既ニ支拂ヒタル運賃ハ之ヲ還付セズ

第四十二條 左ノ場合ニ於テ鐵道係員ハ旅客及公眾ヲ車外又ハ鐵道地外ニ退去セシムルコトヲ得

一 有效ノ乗車券ヲ所持セス又ハ検査ヲ拒ミ運賃ノ支拂ヲ肯セサルトキ

二 第三十三條第三號ノ罪ヲ犯シ鐵道係員ノ制止ヲ肯セサルトキ又ハ第三十四條ノ罪ヲ犯シタルトキ

三 第三十五條、第二十七條ノ罪ヲ犯シタルトキ

四 其ノ他車内ニ於ケル秩序ヲ紊ルノ所爲アリタルトキ

前項ノ場合ニ於テ既ニ支拂ヒタル運賃ハ之ヲ還付セズ

第四十三條 前諸條ノ犯罪及鐵道保安ニ關スル犯罪ニシテ罰金ノ刑ニ該ルヘキ輕罪若ハ逮捕罪ノ現行犯アリタルトキ被告人カ其ノ住所氏名ヲ分明ニ告知セス又ハ逃亡ノ虞アルトキハ鐵道係員ハ司法警察官ニ之ヲ引致スルコトヲ得

附則

第四十四條 本法ハ私設鐵道法ニ依ラザル私設鐵道ニハ之ヲ適用セズ

第四十五條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

鐵道略則、鐵道犯罪罰例、明治十六年七月第二十三號布告ハ之ヲ廢止ス

○私立鐵道法明治三十三年三月法律第六十四號

沿革略記 明治二十年五月勅令第十二號ヲ以テ私設鐵道條例ヲ定ム ●三十三年三月法律第六十四號ヲ以テ私設鐵道法ヲ制定シ前條例ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル私設鐵道法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

私設鐵道法

第一條 本法ハ軌道條例其ノ他特別ノ法令ニ規定スルモノヲ除クノ外一般運送ノ用ニ供スル私設鐵道ニ之ヲ適用ス

私設鐵道株式會社カ運送營業ノ爲ニ支線ヲ敷設スルトキハ現ニ一般運送ノ用ニ供セサル場合ト雖

本法ヲ適用ス

第二條 私設鐵道株式會社ヲ發起セムトスル者ハ左ノ書類圖面ヲ具シ主務大臣ニ假免許ヲ申請ス

- 一 起業目録見書
- 二 假定款
- 三 起業カ公共ノ利益タルコトヲ證スル調書

- 四 線路豫測圖及説明書
- 五 敷設費用ノ概算書
- 六 運送營業上ノ收支概算書及説明書
- 起業目論見書ニハ發起人各自署名捺印スルコトヲ要ス
- 第三條 主務大臣ハ前條書類圖面ノ外審査ニ必要ト認ムル書類圖面ノ呈出ヲ命スルコトヲ得
- 第四條 主務大臣ハ假免許ノ申請ヲ審査シ起業ノ大體ニ於テ不都合ナシト認ムルトキハ假免許狀ヲ下付スヘシ
- 第五條 假免許ニハ本免許申請ノ期限ヲ附ス
前項期限内ニ本免許ノ申請ヲ爲ササルトキハ假免許ハ其ノ效ヲ失フ但シ正常ノ事由アリテ延期ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス
- 第六條 主務大臣ハ公益上必要ト認ムルトキハ申請事項ヲ變更セシメ又ハ假免許ニ條件ヲ附スルコトヲ得
- 假免許ニ附シタル條件ニ違反シタルトキハ假免許ハ其ノ效ヲ失フ
- 第七條 發起人假免許狀ノ下付ヲ受ケタルトキハ定款ヲ作り起業目論見書ヲ公告シテ株主ヲ募集スルコトヲ得
- 定款ハ假定款ニ準シ之ヲ作ルコトヲ要ス
- 第一項ノ公告ニハ本法ニ依リ假免許狀ヲ受ケタル旨及假免許ノ年月日ト各株式申込人ニ假免許狀

- 定款ヲ展閱セシムル旨トヲ記載スルコトヲ要ス
- 第八條 發起人總員ハ少クトモ總株式ノ十分ノ二ヲ引受クルコトヲ要ス
- 第九條 株式ハ金錢ヲ以テスルノ外之ヲ引受クルコトヲ得ス
株金ノ第一回拂込金額ハ株金ノ十分ノ一迄下ルコトヲ得
- 第十條 發起人カ株式ノ總數ヲ引受ケタルトキ又ハ創立總會終結シタルトキハ取締役ハ左ノ書類圖面ヲ具シ主務大臣ニ本免許ヲ申請スヘシ
- 一 定款
- 二 工事ノ方法書
- 三 線路豫測圖
- 四 工費豫算書
- 前項ノ申請ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ
- 一 起業目論見書ノ謄本
- 二 假免許狀ノ謄本
- 三 發起人ニ於テ株式ノ總數ヲ引受ケタルトキハ検査役カ裁判所ニ爲シタル報告書ノ謄本及裁判所カ検査役ノ報告ヲ聽キ爲シタル決定書ノ謄本
- 四 株主ヲ募集シタルトキハ株式申込證ノ謄本、發起人、取締役、監査役又ハ検査役ヨリ創立總會ニ爲シタル報告ノ要領及創立總會ノ議事及決議ノ要領

第十一條 鐵道延長ノ假免許及本免許ノ申請ハ定款ノ變更ト同一ノ方法ニ依リ株主總會ノ決議ヲ經ルニ非ツレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

前項本免許ノ申請ハ定款變更ノ決議認可ノ申請ト其ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第十二條 創立總會ニ於テ設立ノ廢止ノ決議ヲ爲シタルトキハ主務大臣ニ假免許狀ヲ返納スヘシ

第十三條 主務大臣ハ第十條ノ書類圖面ヲ審査シ妥當ト認ムルトキハ本免許狀ヲ下付スヘシ

本免許ニハ工事竣功ノ期限ヲ附ス工事竣功ノ期限ハ工區ヲ分チテ之ヲ附スルコトヲ得

公益上必要ト認ムルトキハ主務大臣ハ本免許ニ條件ヲ附スルコトヲ得

前項ノ規定ハ許可又ハ認可ノ場合ニ之レヲ準用ス

第十四條 會社ノ設立ノ登記ニハ商法ニ規定スル事項ノ外本免許ノ年月日ヲ記載スルコトヲ要ス

設立ノ登記ノ期間ハ本免許ヲ受ケタル日ヨリ之ヲ起算ス

第十五條 本法及商法ニ依リ登記ヲ爲シタルトキハ主務大臣ニ届出ツヘシ

第十六條 本免許ヲ受ケタル後六箇月内ニ設立ノ登記ヲ爲ササルトキハ免許ハ其ノ效ヲ失フ

第十七條 會社ハ主任技術者ヲ置キ技術ニ關スル事項ヲ擔任セシムヘシ

主任技術者ヲ不適任ト認ムルトキハ主務大臣ハ其ノ解任ヲ命スルコトヲ得

第十八條 主務大臣ハ監督上必要ト認ムルトキハ所部ノ官吏ニ命シ會社ノ取締役會議又ハ株主總會ニ監督セシムルコトヲ得

第十九條 主務大臣ハ監督上必要ト認ムルトキハ所部ノ官吏ニ命シ會社ノ會計及財産ノ實況ヲ検査

セシムルコトヲ得

検査官吏ハ會社ノ金庫、財産現在高、帳簿及總テノ書類ヲ検査シ取締役其ノ他ノ役員又ハ使用人ニ

説明ヲ求ムルコトヲ得

第二十條 主務大臣ハ會社ノ會計ニ關スル規則ヲ設クルコトヲ得

第二十一條 定款變更ノ決議ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其ノ效ヲ生セス

定款ハ本免許ニ附セラレタル條件ニ違反スルコトヲ得ス

第二十二條 定款變更ニ因リ登記事項ニ變更ヲ生シ登記ヲ爲ストキハ定款變更認可ノ年月日ヲ併セテ記載スルコトヲ要ス

第二十三條 會社ハ株金全額拂込前ト雖主務大臣ノ認可ヲ受ケ線路ノ延長又ハ改良ノ費用ニ充ツル

爲其ノ資本ヲ増加スルコトヲ得

第二十四條 會社ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ他ノ業務ヲ營ムコトヲ得ス

第二十五條 會社ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ他ノ會社ノ株式ヲ取得シ又ハ質權ノ目的トシテ之ヲ受クルコトヲ得ス

第二十六條 會社ハ株主總會ノ決議ヲ經主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ鐵道ノ貸借又ハ營業ノ

管理委託ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ決議ハ定款變更ト同一ノ方法ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

營業ノ管理委託ヲ受ケタル會社ハ其ノ管理ニ付監督官廳ニ對シ其ノ責任ス

第二十七條 會社ノ取締役其ノ他ノ役員又ハ使用人ハ監督官廳ノ呼出ニ應シ説明ヲ爲スノ義務ヲ負フ

第二十八條 會社ハ鐵道臺帳ヲ調製シ之ヲ備置クコトヲ要ス
鐵道臺帳ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十九條 會社カ社債ヲ募集セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ
社債募集ノ公告ニハ商法ニ規定スル事項ノ外其ノ認可ノ年月日ヲ併セテ記載スルコトヲ要ス
社債ハ總株金四分ノ一以上ノ拂込アリタル後ニ非サレハ之ヲ募集スルコトヲ得ス

第三十條 會社ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ鐵道及之ニ屬スル物件ヲ抵當トシテ負債ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ負債ハ定款變更ト同一方法ノ決議ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 前二條ノ債務ノ額ハ合セテ總株金拂込額ヲ超ユルコトヲ得ス

第三十二條 會社ハ毎營業年度中ニ支拂フヘキ社債及負債ノ元利金ヲ控除シタル後ニ非サレハ利益ノ配當ヲ爲スコトヲ得ス

第三十三條 鐵道及之ニ屬スル物件ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得ス

第三十四條 鐵道ニ屬スル物件ノ貸渡又ハ讓渡ハ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ認可ヲ受クヘシ

第三十五條 會社ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ合併ヲ爲スコトヲ得ス

合併後存續スル會社又ハ合併ニ因リ設立シタル會社ハ合併ニ因リ消滅シタル會社ノ免許ニ屬スル

權利及義務ヲ承繼ス但シ主務大臣ニ於テ之ヲ變更スルノ條件ヲ附シタルトキハ此ノ限ニ在ラス
會社合併ノ登記ニハ商法ニ規定スル事項ノ外合併ノ認可ヲ受ケタル年月日ヲ併セテ記載スルコトヲ要ス

第三十六條 工事方法ノ變更及假設ノ工事ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三十七條 工費豫算ノ變更ハ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ認可ヲ受クヘシ

第三十八條 鐵道ノ建設、設計等ニ關スル命令ノ制定、變更ニ因リ工事方法ハ變更ヲ受ク

第三十九條 會社ハ設立登記ノ日ヨリ六箇月内ニ鐵道ノ敷設ニ着手シ本免許ニ附シタル期限内ニ之ヲ竣功スヘシ

前項ノ着手期限ハ鐵道延長ノ場合ニ在リテハ其ノ本免許狀下付ノ日ヨリ之ヲ起算ス
天災其ノ他避クヘカラサル事變ノ爲期限内ニ敷設ニ着手シ又ハ竣功スルコト能ハサルトキハ會社ハ期限ノ伸長ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ申請ハ天災、事變ノ止ミタル日ヨリ一箇月内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

自己ノ過失ニ歸セサル正當ノ事由ニ因リ期限内ニ敷設ニ着手シ又ハ竣功シ難キトキハ期限經過前ニ延期ヲ申請スヘシ延期ノ期間ハ通シテ原期間ノ半ヲ超ユルコトヲ得ス

法令ノ結果ニ因リ工事方法ニ變更ヲ生シ又ハ主務大臣ノ命令ニ依リ若ハ其ノ認可ヲ受ケ工事方法ヲ變更シタルトキハ更ニ期限ノ指定ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ申請ハ法令ノ結果ニ因ルモノハ其ノ施行ノ日ヨリ一箇月内ニ、主務大臣ノ命令ニ依ルモノハ其ノ命令ヲ受ケタル日ヨリ一箇月内ニ又認可ヲ受クヘキモノハ其ノ認可ノ申請ト同時ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第四十條 軌間ハ特許ヲ得タルモノヲ除クノ外三呎六吋トス

第四十一條 左ニ掲クルモノヲ以テ鐵道用地トス

- 一 線路用地
- 二 停車場、信號所及車庫、貨物庫等ノ建設ニ要スル土地
- 三 鐵道構内ニ職務上常住ヲ要スル鐵道員ノ舍宅及運輸保線ニ従事スル鐵道員ノ駐在所等ノ建設ニ要スル土地
- 四 鐵道ニ要スル車輛、器具ヲ修理製作スル工場及其ノ資材器具ヲ貯藏スル倉庫ノ建設ニ要スル

線路ニ沿ヒタル土地

線路用地ノ幅員ハ築堤、切取、架橋等工事ノ必要ニ應ジ工事方法書ニ依リ之ヲ定ム

第四十二條 道路、橋梁、河川、溝渠ニ關スル工事ノ施設ハ所管官廳ノ認可ヲ受クヘシ

第四十三條 線路ノ道路ヲ權斷スル場所ニハ橋梁ヲ架設シ又ハ地下道若ハ階切道ヲ設クヘシ其ノ他危險防止ノ爲必要ナル箇所ニハ牆、柵、門戶、堤塘、溝渠ヲ設ク又ハ番人ヲ配付スル等充分ノ設備ヲ爲スコトヲ要ス

第四十四條 主務大臣ハ監査員ヲ派遣シ工事ヲ監視セシムルコトヲ得

工事カ工事方法書又ハ法令若ハ法令ニ基キテ發スル命令ニ違ヒタルトキハ主務大臣ハ其ノ改築ヲ命ジ又ハ之ヲ停止スルコトヲ得

第四十五條 會社ハ主務大臣ニ申請シ其ノ許可ヲ得タル後ニ非サレハ運輸ヲ開始スルコトヲ得ス

第四十六條 運輸開始ノ申請アリタルトキハ主務大臣ハ監査員ヲ派遣シ鐵道ノ設備ヲ監査セシメ運輸ヲ開始スルニ適當ト認ムルトキハ其ノ許可ヲ與フヘシ若ニ不適當ト認ムルトキハ其ノ改良ヲ命ジ其ノ竣功ノ後更ニ運輸開始ノ申請ヲ爲サシムヘシ

第四十七條 前二條ノ規定ハ新設又ハ變更シタル建築物ヲ運輸ノ用ニ供スル場合ニ準用ス

第四十八條 主務大臣ハ監査員ヲ派遣シ鐵道ノ設備又ハ運輸保線ノ方法ヲ監査セシメ不適當ト認ムルトキハ何時ニテモ必要ナル施設ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ危險ナリト認ムルトキハ其ノ施設ヲ終ル迄運輸又ハ使用ヲ停止スルコトヲ得

第四十九條 第四十四條第二項、第四十八條ノ規定ニ依リ改築又ハ必要ナル施設ヲ命セラレタルトキハ會社ハ之ヲ終リタル後主務大臣ニ申請シテ監査ヲ受クヘシ

第五十條 監査員ハ監査上必要ト認ムルトキハ取締役其ノ他會社ノ役員又ハ使用人ニ説明ヲ求メ及書類圖面ヲ檢閲スルコトヲ得

第五十一條 主務大臣ハ鐵道ノ設備カ運輸ノ必要ニ適セサルモノト認ムルトキハ之ニ適スヘキ設備ヲ命スルコトヲ得

第五十二條 主務大臣ハ公衆ノ安全ノ爲官設鐵道ニ實施スル事物ヲ會社ニ命シテ施設セシメ其ノ他

官設鐵道ニ實施スル規則ヲ私設鐵道ニ適用スルコトヲ得

第五十三條 府又ハ政府ノ許可ヲ受ケタル者ニ於テ會社ノ鐵道ニ接續シ若ハ之ヲ橫斷シテ鐵道ヲ敷設シ又ハ會社ノ鐵道ニ接近シ若ハ之ヲ橫斷シテ道路、橋梁、溝渠若ハ運河ヲ造設スルトキハ會社ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

前項ノ場合ニ於テ公益上必要ト認ムルトキハ主務大臣ハ會社ニ命シ接續、橫斷ノ場所ニ於ケル設備ヲ共用ニ供セシメ又ハ之ヲ變更セシムルコトヲ得

第五十四條 前條ノ場合ニ於テ設備ノ共用又ハ變更ニ要スル費用ノ負擔ニ付雙方ノ協議調ハサルトキハ申請ニ因リ主務大臣之ヲ裁定ス

前項ノ裁定ハ終局トス

第五十五條 農工商業者カ其ノ產物、商品運送ノ爲敷設スル鐵道ヲ會社ノ鐵道ニ接續セシムルコトヲ求メタルトキハ會社ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

前項ノ場合ニ於テ雙方ノ協議調ハサルトキハ申請ニ因リ主務大臣之ヲ裁定ス

前項ノ裁定ハ終局トス

第五十六條 會社ハ運輸ニ關スル規定ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更スルトキ亦同シ

第五十七條 會社ハ旅客及荷物ノ運賃ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更スルトキ亦同シ

主務大臣ハ公益上必要ト認ムルトキハ運賃ノ變更ヲ命スルコトヲ得

運賃増加ノ公告ニハ其ノ認可ノ年月日ヲ記載スルコトヲ要ス

第五十八條 下等旅客運賃額ハ線路ノ距離一哩ニ付金二錢ノ割合ヲ超過スルコトヲ得ス但シ二哩未

滿ノ哩數ニ對シテハ其ノ一人ノ運賃額ヲ金四錢迄ニ定ムルコトヲ得

本法ノ規定ニ依リ運賃ヲ半減スルトキ又ハ哩數ニ應シテ運賃額ヲ定ムルトキ生スル厘位ノ金額ハ

之ヲ錢位ニ切上クルコトヲ得

第五十九條 會社ハ運賃ノ割引ニ付テハ豫メ一定ノ準則ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更

スルトキ亦同シ

準則ニ依ラサル運賃ノ割引ハ各場合ニ付認可ヲ受クヘシ

第六十條 主務大臣ハ運賃ノ算法、荷物ノ等級、運賃表ノ様式及公告ノ方法等ニ關シ規定ヲ設クルコ

トヲ得

第六十一條 會社ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非ザレハ鐵道運送ニ對シ何等ノ名義ヲ問ハス運賃以

外ノ料金ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十二條 會社ハ列車ノ發着時間及度數ヲ定メ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ認可ヲ受クヘシ之ヲ

變更スルトキ亦同シ

主務大臣ハ公益上必要ト認ムルトキハ列車ノ種類、發着時間及度數ヲ定メ其ノ施行ヲ會社ニ命ス

ルコトヲ得

第六十三條 主務大臣ハ會社ニ他ノ鐵道トノ連絡運輸又ハ直通運輸ヲ命スルコトヲ得

第六十四條 二箇以上ノ私設鐵道ヲ連絡運輸又ハ直通運輸ヲ爲ス場合ニ於テ設備ノ變更、交互運輸

ノ手續、運賃ノ割合其ノ他費用ノ負擔ニ付會社間ニ協議調ハサルトキハ申請ニ因リ主務大臣ナラ
裁定ス

前項ノ裁定ハ終局トス

官設鐵道ト私設鐵道ト連絡運輸又ハ直通運輸ヲ爲ス場合ニ於テ協議調ハサルトキハ主務大臣之ヲ
定ム

第六十五條 會社ハ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ事故ノ届出ヲ爲スヘシ

主務大臣ハ監査員ヲ派遣シ事故ノ審査ヲ行ハシムルコトヲ得

事故審査ノ爲必要ト認ムルトキハ會社ニ命シ現狀ヲ存置セシムルコトヲ得

監査員ハ取締役其ノ他ノ役員使用人及關係人ヲ呼出、訊問シ其ノ他事故ノ審査ニ必要ナル審理手
續ヲ爲スコトヲ得

第六十六條 會社ハ營業年度毎ニ營業報告書ヲ調製シ定時總會後一週間内ニ主務大臣ニ差出スヘシ

第六十七條 會社ハ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ鐵道統計ヲ調製シ之ヲ差出スヘシ

第六十八條 鐵道事務ニ關シ往復スル吏員ニシテ監督官廳ヨリ發スル乗車證ヲ携帯スルモノハ無料
ニテ乗車セシムヘシ

第六十九條 公務ヲ以テ往復スル陸海軍軍人、軍屬及警察官吏又ハ軍馬、銃砲、彈藥、糧食、被服、陣
具、工鋸、兵器具、天幕等ニシテ公用タルコトヲ證スル通券アルモノハ半價ヲ以テ輸送スヘシ

第七十條 囚徒、監守官吏ハ半價ヲ以テ乘車セシムヘシ

第七十一條 會社ハ法令ノ定ムル所ニ依リ平時、戰時ニ於テ鐵道ヲ軍用ニ供スルノ義務ヲ負フ

第七十二條 政府ハ本免許狀下付ノ日ヨリ滿二十五箇年ノ後鐵道及附屬物件ヲ買上クルノ權ヲ保有
ス

合併其ノ他ノ方法ニ依リ會社カ他會社ノ鐵道ヲ引受ケタルトキハ其ノ鐵道ニ對スル前項ノ期限ハ
舊會社ニ本免許狀ヲ下付シタル日ヨリ之ヲ起算ス

第七十三條 前條ニ依リ鐵道及附屬物件ヲ買上クルトキハ前五箇年間ノ株券價格ヲ平均シテ買上價
格ヲ定ム

前項ノ價格カ會社ニ於テ前五箇年間ニ株主ニ支拂ヒタル純益金ノ配當平均額ノ二十倍ノ金額ヲ超
ユルトキハ該金額ヲ以テ買上價格ト爲スヘシ

第七十四條 鐵道及附屬物件ノ狀態不完全ナルトキハ其ノ補修ニ要スル費額ヲ前條ノ金額ヨリ控除
シタルモノヲ以テ買上價格ト爲スヘシ

前項補修ニ要スル費額ニ付協議調ハサルトキハ鑑定人ノ意見ヲ聽キ政府之ヲ定ム
鑑定人ノ選定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七十五條 前三條ノ規定ハ法令又ハ免許、許可若ハ認可ニ附シタル條件ノ効力ヲ妨クス

第七十六條 會社カ第三十九條ノ期限内ニ鐵道ノ敷設ニ著手セス又ハ之ヲ竣功セサルトキハ免許ハ
其ノ效ヲ失フ

第七十七條 會社カ第四十五條ノ規定ニ違反シテ運輸ヲ開始シ若ハ第四十七條ノ規定ニ違反シテ建

設物ヲ運輸ノ用ニ供シ又ハ第四十八條第二項ノ停止ノ命令ニ違反シタルトキハ其ノ違反ノ行為ニ
因リ得タル收入金ヲ沒收ス收入金ト區別シ難キ他ノ收入アルトキハ併セテ之ヲ沒收ス

第七十八條 會社カ法令ノ規定又ハ免許許可若ハ認可ニ附シタル條件ニ依リ命セラレタル施設ヲ
爲ササルトキハ政府ニ於テ之ヲ施行シ會社ヲシテ其ノ費用ヲ辦償セシムルコトヲ得

第七十九條 第七十七條ノ沒收金及第七十八條ノ費用ハ監督官廳ニ於テ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之
ヲ徵收ス但シ其ノ先取特權ハ公課ニ次キ之ヲ行フ

第八十條 會社カ法令ノ規定又ハ免許許可若ハ認可ニ附シタル條件ニ違反シ又ハ法令ニ基キ發
スル命令ヲ遵守セス其ノ他公益ヲ害スヘキ行為ヲ爲シタルトキハ主務大臣ハ左ノ處分ヲ爲スコト
ヲ得

一 取締役其ノ他ノ役員ヲ解任スルコト

二 官設鐵道又ハ他ノ會社ヲシテ會社ノ計算ヲ以テ運輸ヲ爲サシムルコト

三 免許ノ一部又ハ全部ヲ取消スコト

前項ノ規定ニ依リ解任セラレタル取締役其ノ他ノ役員ハ再任セララルコトヲ得ス

第八十一條 免許ノ失効又ハ取消ノ場合ニ於テ主務大臣ハ其ノ鐵道及附屬物件ヲ公賣ニ付シ買受人
ヲシテ之ヲ竣功セシムルコトヲ得

買受人ハ原免許ニ屬スル權利及義務ヲ承繼ス但シ主務大臣ハ更ニ著手又ハ竣功ノ期限ヲ指定スル
コトヲ得

二回ノ公賣ヲ行フモ買受人ナキトキハ鐵道及附屬物件ヲ個個ノ物件トシテ之ヲ處分セシム
公賣ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八十二條 鐵道延長免許ノ失効又ハ取消ニ因リ前條ノ公賣ヲ爲ス場合ニ於テ鐵道ノ連絡上必要ア
ル下キハ本線ノ免許ノ一部又ハ全部ヲ取消シ併セテ其ノ鐵道及ヒ附屬物件ヲ公賣ニ付スルコトヲ
得

第八十三條 會社ハ免許ノ全部失効又ハ全部取消ニ因リテ解散ス其ノ本免許ノ申請ヲ却下セラレタ
ルトキ亦同シ

第八十四條 假免許ヲ受ケシテ會社設立ノ行為ヲ爲シタル者又ハ免許ヲ受ケシテ工事ニ着手シ
タル者ハ百圓以上二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十五條 事故審査ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ現狀存置ノ命令ニ違反シ又ハ呼出、訊問ニ
應セス若ハ虛偽ノ陳述ヲナシタル者ハ五百圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十六條 第四十五條ノ規定ニ違反シテ運輸ヲ開始シ若ハ第四十七條ノ規定ニ違反シテ建設物ヲ
運輸ノ用ニ供シ又ハ第四十四條第二項第四十八條第二項ノ規定ニ依リ停止ノ命令ニ違反シタルト
キハ取締役ヲ百圓以上二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十七條 第十九條第二項第二十七條第五十條ノ場合ニ於テ呼出ニ應セス又ハ説明ヲ拒ミ若ハ虛
偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ五百圓以上五百圓ノ過料ニ處ス

第八十八條 左ノ場合ニ於テハ發起人取締役ヲ五百圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス

- 一 本法ニ定メタル登記事項ノ登記ヲ怠リタルトキ
 - 二 第七條、第二十九條第二項、第五十七條第三項ノ公告中ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ
 - 三 鐵道臺帳ノ調製備置ヲ怠リ之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ
 - 四 本法ニ定メタル營業報告、統計書、事項其他ノ届出及ヒ法令ニ基キテ監督官廳ノ命シタル報告届出ノ呈出ヲ怠リ又ハ故意ニ不正ノ報告届出ヲ爲シタルトキ
 - 五 法令ノ規定若ハ法令ニ基キテ發シタル命令又ハ免許、許可若ハ認可ニ附シタル條件ニ基キテ發シタル命令ニ違反シタルトキ
- 第八十九條 左ノ場合ニ於テハ取締役ヲ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス
- 一 本法ノ規定ニ依リ認可ヲ受ク可キ事項ニ關シ之ヲ受ケスシテ施行シタルトキ
 - 二 第二十五條ノ規定ニ違反シ株式ヲ取得シ又ハ質權ノ目的、シテ之ヲ受ケタルトキ
 - 三 第三十二條ノ規定ニ違反シテ配當ヲ爲シタルトキ
 - 四 本法ニ定メタル主務大臣ノ裁定ヲ遵守セザルトキ
- 第九十條 過料ノ徵收ニ關シテハ非訟事件手續法ヲ適用ス
- 補則
- 第九十一條 一個人又ハ一會社ニ於テ個人ノ専用ニ供スル爲敷設スル鐵道ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九十二條 第十六條ニ定メタル期間ハ舊商法ノ規定ニ從ヒ會社ノ設立ヲ爲ス場合ニハ免許ヲ受ケタル日ヨリ一箇年トス

第九十三條 第二十五條ノ規定ハ本法施行前ニ取得シ又ハ質權ノ目的トシテ受ケタル株式ニ付テハ之ヲ適用セス

第九十四條 第三十一條ノ規定ハ本法施行前ニ生シタル債務ニ付テハ之ヲ適用セス

第九十五條 第三十三條ノ規定ハ本法施行前ニ設定シタル質權ノ效力ヲ妨ケス

第九十六條 第七十三條第二項、第七十四條ノ規定ハ本法施行前ニ免許ヲ受ケタル鐵道ニ付テハ會社ト協議ヲ經タル上ニ非アレハ之ヲ適用セス

第九十七條 私設鐵道株式會社ニハ本法施行ノ日ヨリ本法ニ特別ノ規定アルモノヲ除クノ外商法及其ノ附屬法令中株式會社ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十八條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

私設鐵道條例及明治二十八年法律第四號ハ之ヲ廢止ス

○

○軌道條例 明治二十三年八月
法律第七十一號
朕軌道條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軌道條例

第一條 一般運輸交通ノ便ニ供スル馬車鐵道及其他之ニ準スヘキ軌道ハ起業者ニ於テ内務大臣ノ特許ヲ受ケ之ヲ公共道路上ニ布設スルコトヲ得

第二條 馬車鐵道及其他之ニ準スヘキ軌道布設ノ爲起業者ノ負擔ヲ以テ在來ノ道路ヲ取擴メ又ハ更正シ若ハ新ニ軌道敷ヲ設クルノ必要アルトキハ之ニ要スル土地ハ起業者ニ於テ土地收用法ノ規定ニ依リ内閣ノ認定ヲ經テ之ヲ收用スルコトヲ得

第三條 在來ノ道路ヲ取擴メ又ハ更正シタル部分及新設シタル軌道敷ハ俱ニ道路敷ニ編入ス

○電信法 明治三十三年三月 法律第五十九號

沿革略記

明治三年六月傳信機進テ全國へ敷設スヘキノ處尙キ東京ヨリ長崎迄ノ間民部省ニ令シテ架線セシム ●五年四月工部省布達ヲ以テ西京大阪間電信賃銀率ヲ定ム是ヨリ以降明治十八年ニ至ル間所々ノ賃銀率ヲ布達スト雖モ十八年七月以降不用ニ屬スルヲ以テ此ニ對セシ ●六年八月第三號布達ヲ以テ電信取換規則ヲ定ム ●七年七月工部省第十八號布達ヲ以テ電信私線ヲ官設ノ線ニ接續スルヲ許ス ●同年八月工部省第廿一號布達ヲ以テ私線規則ヲ定ム ●七年九月第十八號布達ヲ以テ電信條例ヲ定ム ●十一年三月工部省第四號布達ヲ以テ海外電機通信ハ萬國電信公法ニ從ヒ取扱ハシム ●十二年五月工部省第九號布達ヲ以テ六年第三號布達取換規則ヲ改正ス ●十三年三月第九號ヲ以テ電信萬國公法改正ヲ布告ス ●十六年二月第五號布達ヲ以テ水底電信線路ニ於テ投標採買等ノ禁ヲ犯ス者ノ罰則ヲ定ム ●十八年五月第八號布達ヲ以テ七年第九十八號布達十二年工部省第九號布達ヲ廢シ更ニ電信條例ヲ定ム ●同年同月第七號布達ヲ以テ之レガ取扱規則ヲ定メ字數等一ノ通信文ヲシテ里程ノ遠近ニ拘ハラズ國內ヲ通シテ第一ノ電報料ヲ出サシメ電信切手ヲ貼付スルコトヲナス ●三十三年法律第五十九號ヲ以テ電信法ヲ定メ電信條例ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル電信法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

電信法

第一條 電信及電話ハ政府之ヲ管掌ス

第二條 左ニ掲グル電信又ハ電話ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ私設スルコトヲ得

一 一邸宅内若ハ一構内ニ於テ専用ニ供スル爲施設スルモノ

二 鐵道業其ノ他電信電話ノ専用ヲ必要トスル事業ノ爲施設スルモノ

三 公共團體事務執行ノ爲メ一市區町村内若ハ鄰接市區町村間ニ於テ公署相互間又ハ一郡市區内ニ於テ公署ト第一監督官廳トノ間ニ施設スルモノ

四 電報送受ノ目的ヲ以テ一人ノ専用ニ供スル爲電信官署トノ間ニ施設スルモノ

五 一市區町村内若ハ鄰接市區町村間ニ於テ又ハ電信電話ノ連絡ナク且第四號ニ依ルヲ不適當トスル市區町村間ニ於テ一人又ハ一營業ノ専用ニ供スル爲施設スルモノ

第三條 主務大臣ハ命令ノ定ムル所ニ依リ前條ニ依リ施設シタル電信又ハ電話ヲ公衆通信又ハ軍事上必要ナル通信ノ用ニ供セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ主務大臣ハ吏員ヲ派遣シテ其ノ取扱ヲ爲サシムルコトヲ得

第四條 主務大臣ハ公安ノ爲必要ト認ムルトキハ區域ヲ定メ電信又ハ電話ニ依ル通信ヲ停止若ハ制限スルコトヲ得

第五條 電信又ハ電話ニ依ル通信ニシテ公安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ主務大臣ノ指定シタル電信官署又ハ電話官署ニ於テ之ヲ停止スルコトヲ得

第六條 職務執行中ノ電信又ハ電話ノ工夫配達人及配達用車馬等ハ道路ニ障礙テクテ通行シ難キ場

合ニ於テ墻壁又ハ柵欄ナキ宅地田畑其ノ他ノ場所ヲ通行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ政府ハ被害者ノ請求ニ因リ其ノ損害ノ賠償ヲ爲スヘシ

第七條 職務執行中ノ電信又ハ電話ノ工夫配達人及配達用舟車馬等事故ニ遭シタル場合ニ於テ電信又ハ電話ノ工夫配達人若ハ吏員ヨリ助力ヲ求メラレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス此ノ場合ニ於テハ政府ハ助力者ノ請求ニ因リ相當ノ報酬ヲ爲スヘシ

第八條 職務執行中ノ電信又ハ電話ノ工夫配達人及配達用舟車馬等ニ對シテハ渡津、運河、道路、橋梁其ノ他ノ場所ニ於ケル通行錢ヲ請求スルコトヲ得ス

前項ノ工夫及配達人ハ何時ニテモ渡津ノ出船ヲ求ムルコトヲ得

第九條 政府ハ電信又ハ電話ノ用ニ供スル爲メ鐵道用地及停車場建物ノ一部ヲ使用シ必要アルトキハ建物ノ建築又ハ改築ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ土地建物ノ使用料及建築改築ノ費用ハ請求ニ因リ政府之ヲ支給ス

第十條 政府カ鐵道用地内ニ電信線又ハ電話線ヲ施設シタルトキハ使用料ヲ支給セス

第十一條 電信若ハ電話專用ノ物件又ハ現ニ其ノ用ニ供スル物件ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第十二條 電信又ハ電話取扱ニ關シ電信官署又ハ電話官署ニ對シテ無能力者ノ爲シタル行爲ハ能力者ノ爲シタルモノト看做ス

第十三條 電報ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外其ノ宛所ニ配達ス

第十四條 電報ハ命令ヲ以テ定ムル場合ニ限リ發信人ノ請求ニ因リ其ノ送達ヲ停止スルコトヲ得

第十五條 宛所ニ配達シ又ハ受信人ニ交付シ得サル電報ハ之ヲ公示ス其ノ公示ノ日ヨリ三十日間ニ交付ノ請求ナキトキハ之ヲ棄却ス

第十六條 電信官署ニ於テ必要ト認ムルトキハ發信人ニ對シ其ノ電報ニ用非タル祕辭隱語ノ説明ヲ求ムルコトヲ得發信人若其ノ説明ヲ拒ミタルトキハ其ノ電報ノ取扱ヲ拒絕ス

第十七條 電信又ハ電話ニ關スル料金及電信又ハ電話ニ依ル通信ノ取扱ニ必要ナル制限ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 電信又ハ電話ニ關スル既納及過納ノ料金ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外之ヲ還付セ

第十九條 發信人ニ於テ前納スヘキ電信ニ關スル料金ニ不足アルトキハ發信人ヨリ其ノ不足額ノ二倍ノ料金ヲ徴收ス

第二十條 電信又ハ電話ニ關スル料金納付ノ義務ハ其ノ納付スヘキ日ヨリ六箇月内ニ納付ノ告知ヲ受ケサルニ因リテ消滅ス

第二十一條 電信又ハ電話ニ關スル料金ノ不納金額ハ電信官署又ハ電話官署ニ於テ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ徴收ス

前項ノ不納金額ニ付電信官署又ハ電話官署ハ國稅ニ次キ先取特權ヲ有ス

報告ニ關スルモノハ命令ノ定ムル所ニ依リ無料ト爲スコトヲ得

第二十三條 電信又ハ電話ニ關スル料金ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外郵便切手ヲ以テ納付ス
ヘシ

第二十四條 電信又ハ電話ノ取扱ニ關シテハ政府ハ損害賠償ノ責ニ任セス

第二十五條 本法ニ依ル損害賠償又ハ報酬ノ請求權ハ主務大臣ノ指定シタル電信官署又ハ電話官署
ニ對シ其ノ事實アリタル日ヨリ三箇月間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス

第二十六條 電信官署若ハ電話官署ノ賠償又ハ報酬ニ關スル決定ニ對シ不服アル者ハ其ノ通知ヲ受
クタル日ヨリ三箇月以内ニ民事訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十七條 權利ナクシテ電信若ハ電話ヲ私設シタル者又ハ權利ヲ失ヒタル後主務官署ノ指定シタ
ル期限内ニ私設ノ電信若ハ電話ヲ撤去セサル者ハ五百圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ電信線又ハ
電話線及電信又ハ電話ノ機器ヲ沒收ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ電話又ハ電話ヲ他人ノ用ニ供シ因テ金錢物品ヲ收得シタルトキハ之ヲ沒收
ス既ニ消費又ハ讓渡シタルトキハ其ノ金額又ハ代價ヲ追徴ス

第一項ノ電信又ハ電話ヲ使用シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第三條第一項ニ依ル場合ヲ除クノ外私設ノ電信若ハ電話ヲ他人ノ用ニ供シタル者又ハ
其ノ私設者ニアラスシテ之ヲ使用シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス
前項ノ場合ニ於テ金錢物品ヲ收得シタルトキハ之ヲ沒收ス既ニ消費又ハ讓渡シタルトキハ其ノ金

額又ハ代價ヲ追徴ス

第二十九條 第三條第一項ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ電信若ハ電話ノ供用ヲ拒ミ又ハ第九條

第一項ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ用地、建物ノ使用ヲ拒ミ若ハ建物ノ建築改築ヲ爲ササル
者ハ五百圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 第六條ノ場合ニ於テ通行ヲ拒ミ又ハ第七條ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ助力ヲ拒ミ
又ハ第八條ノ場合ニ於テ通行錢ヲ強要シ若ハ正當ノ理由ナクシテ渡津ノ出船ヲ拒ミタル者ハ科料
ニ處ス

第三十一條 電信官署又ハ電話官署ノ取扱中ニ係ル通信ノ祕密ヲ侵シタル者ハ一月以上一年以下ノ
重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

電信又ハ電話ノ事務ニ從事スル者前項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ
本條ノ罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第三十二條 不正ノ手段ヲ以テ電信又ハ電話ニ關スル料金ヲ免レ又ハ免レムトシタル者ハ百圓以下
ノ罰金ニ處ス

電信又ハ電話ノ事務ニ從事スル者前項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ

第三十三條 自己若ハ他人ニ利益ヲ與ヘ又ハ他人ニ損害ヲ加フル目的ヲ以テ虚偽ノ電報ヲ發シタル
者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
前項ノ場合ニ於テ電信爲替ニ要スヘキ電報ニ係ルトキハ輕懲役ニ處ス

電信事務ニ従事スル者前二項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ

第三十四條 電信又ハ電話ノ事務ニ従事スル者電信官署又ハ電話官署ノ取扱中ニ係ル電信又ハ電話ノ用紙ニ貼用シタル郵便切手ヲ剝脱シタルトキハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ未タ消印ヲ爲ササルモノニ關シテハ刑法竊盜ノ罪ニ照シテ處斷ス

第三十五條 電信官署ノ取扱中ニ係ル電報ヲ正當ノ事由ナクシテ開披、毀損、隱匿若ハ放棄シタル者又ハ受取人ニ非サル者ニ交付シ若ハ情ヲ知リテ之ヲ受取リタル者又ハ其ノ傳送配達ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

電信事務ニ従事スル者前項ノ所爲アリタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ

第三十六條 電信若ハ電話ノ事務ニ従事スル者正當ノ事由ナクシテ其ノ通信ノ取扱ヲ拒絕シ又ハ其ノ傳送ヲ遅延セシメタルトキハ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 電信線又ハ電話線其ノ他電信又ハ電話ノ機器建造物ヲ毀損シ若ハ通信ヲ障礙シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
過失ニ因リ通信ヲ障礙シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十八條 電信線若ハ電話線ノ建築修理又ハ線路ノ巡視測量ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三十九條 電信、電話ノ線條若ハ其ノ支持物ニ物品ヲ懸ケ若ハ擲テ又ハ之ニ動物若ハ舟筏ヲ繋キ又ハ之ヲ汚穢シタル者ハ科料ニ處ス

電信又ハ電話線路ノ測量標ヲ毀棄汚穢シタル者亦同シ

第四十條 主務官署ノ指定シタル水底電信線路若ハ水底電話線路ノ區域内ニ於テ船舶ヲ繋留シ又ハ漁業採藻ヲ爲シ若ハ土砂ヲ掘鑿シ又ハ水底電信線若ハ水底電話線ノ號標ニ舟筏ヲ繋キ又ハ其ノ號標ヲ毀棄シタル者ハ五十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
水底電信線若ハ水底電信線ノ布設若ハ修理ノ爲其ノ位置ヲ示スヘキ浮標又ハ其ノ布設若ハ修理ニ従事スル船舶ヨリ主務官署ノ指定シタル距離以内ニ於テ前項ノ所爲ヲ爲シ若ハ航行シタル者亦同シ

第四十一條 第三十二條ヲ除クノ外前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四十二條 法人ノ業務ニ關シ其ノ代表者又ハ雇人其ノ他ノ從業者前數條ノ罪ヲ犯シタルトキハ其ノ罰則ヲ法人ニ適用ス但シ罰金科料以外ノ刑ニ處スヘキ場合ニ於テハ法人ヲ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

法人ヲ處罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス
法人ヲ處罰スルノ裁判確定シタル日ヨリ罰金ニ關シテハ一月以内科料ニ關シテハ十日以内ニ之ヲ納完セザルトキハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒテ其ノ執行ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ノ命令ヲ以テ執行力ヲ有スル債務名義ト同一ノ效力アルモノトス
前項ニ依リ執行ヲ爲スニハ執行前裁判ノ送達ヲ爲スコトヲ要セス

第四十三條 公衆通信又ハ第三條第一項ニ依リ現ニ軍事通信ノ用ニ供スル私設ノ電信又ハ電話ニ關シテハ第九條ヲ除クノ外本法中政府ノ施設ニ係ル電信又ハ電話ニ關スル規定ヲ準用ス

第四十四條 電信又ハ電話ニ非スト雖通報信號ヲ爲スモノニ關シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

第四十五條 帝國外國間ニ於ケル電信ニ關シ別ニ法令條約又ハ特許ノ條款ニ明文アルモノハ各其ノ定ムル所ニ依ル

附則

第四十六條 本法ハ明治三十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

電信條例ハ之ヲ廢止ス

第四十七條 本法施行前電信條例ニ依リ電信又ハ電話私設ノ許可ヲ得タル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ更ニ許可ノ申請ヲ爲スコトヲ要ス

○

○軍用電信法明治二十七年六月法律第五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍用電信法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍用電信法

第一條 軍用電信ハ電氣機械ヲ以テ軍事ニ關スル通信ヲ爲スモノトス

第二條 軍用電信ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣之ヲ管理ス

第三條 軍用電信ヲ分チテ左ノ二種トス

一 固定軍用電信

二 遊動軍用電信

第四條 固定軍用電信ハ要塞、衛戍、軍港、要港、海岸望樓、監視哨所其ノ他局地ノ防禦ニ必要ナル地

點及其ノ各地間通信ノ爲メ之ヲ建設スルモノトス

固定軍用電信ヲ建設スルトキハ明治二十三年法律第五十八號電信線電話線建設條例ヲ準用ス

第五條 遊動軍用電信ハ事變又ハ演習ニ際シ臨時其ノ必要アル各地ニ建設スルモノトス

遊動軍用電信ヲ建設スル爲メ民有ノ營造物ヲ徵用シ之ニ必要ノ工事ヲ施スコトヲ得其ノ徵用及損

害償賂ノ手續並徵用ニ關スル罰例ハ徵發令ヲ準用ス

第六條 軍用電信ハ最寄私設ノ電信取扱所ニ連接シ又ハ私設電線ノ柱木ニ添架スルコトヲ得

第七條 固定軍用電信ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ公衆通信ノ用ニ供スルコトヲ得

第八條 刑法第六十四條及明治十八年第八號布告電信條例第五十八條乃至第六十三條及第七十

一條ハ之ヲ軍用電信ニ適用ス

第九條 軍用電信ノ事務ニ從事スル者軍用電信ニ關シ「電信條例第五十八條乃至第六十三條」ノ罪ヲ

犯シタルトキハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ又通信ノ旨趣ヲ漏泄シタルトキハ四月以上四年以下ノ重

禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十條 軍用電信ニ關シ「電信條例第五十八條及第六十二條」ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ

刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

○固定軍用電信ヲ公衆通信ノ用ニ供ス明治三十二年四月勅令第八十七號

朕固定軍用電信ヲ公衆通信ノ用ニ供スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公衆通信ノ用ニ供スル固定軍用電信ハ遞信大臣之ヲ告示ス

固定軍用電信ニ依ル公衆ノ通信取扱ニ關スル規則ハ遞信大臣之ヲ定ム

○

○鐵道所屬電信電話線公衆ノ通信取扱規則明治二十一年十一月

勅令第百七十八號

朕鐵道所屬電信電話線公衆ノ通信取扱規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道所屬電信電話線公衆ノ通信取扱規則

第一條 遞信大臣ニ於テ鐵道所屬ノ電信電話線ヲ以テ公衆ノ通信ヲ爲サシムルコトヲ必要ト認ムルトキハ當該官廳又ハ其所有者ヲシテ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第二條 前條ノ取扱ヲ爲ストキハ總テ電信條例及電信取扱規則ニ依ルヘシ但鐵道事務ニ係ル電報ハ官報其他ノ電報ニ先タテ之ヲ傳送スヘシ

第三條 第一條ニ據リ公衆ノ通信ヲ爲サシメタルトキハ遞信省ハ當該官廳又ハ其所有者ニ對シ手取料ヲ交付ス其金額ノ割合ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

○

○電信線電話線建設條例明治二十三年八月

法律第五十八號

朕電信線電話線建設條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

電信線電話線建設條例

第一條 遞信省ニ於テ公衆通信ノ用ニ供スル電信線電話線ヲ建設スル爲民有ノ土地又ハ營造物ノ使用ヲ要スルトキハ所有者 及其他ノ權利者之ヲ拒ムコトヲ得ス

官有ノ土地又ハ營造物ハ其所管廳ニ通知シテ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 公衆通信ノ用ニ供スル電信線電話線ノ建設ニ從事スル者其建築修理及線路測量ノ爲必要ナルトキハ他人ノ所有地ニ入ルコトヲ得

其邸宅構内ニ入ルヲ要スルトキハ所有者又ハ其他ノ權利者ニ通知スヘシ

前二項ノ場合ニ於テハ主務者タルノ證書ヲ携帯スヘシ

第三條 遞信省ハ公衆通信ノ用ニ供スル電信線電話線ノ建設又ハ通信ニ障礙アル瓦斯支管水道支管下水支管電燈線電力線及私設電信線電話線ヲ所有者又ハ其他ノ權利者ニ命シテ移轉セシムルコトヲ得

ヲ得

其建設通信ニ障礙アル竹木其他ノ植物ハ已ムヲ得サルモノニ限リ之ヲ伐除シ若クハ所有者又ハ其他ノ權利者ニ命シテ之ヲ伐除又ハ移植セシムルコトヲ得

第四條 遞信省ニ於テ公衆通信ノ用ニ供スル電信線路電話線路ノ測量ヲ爲シタルトキハ電柱ノ建設ヲ要スル場所ニ測標ヲ設置スルコトヲ得

第五條 公衆通信ノ用ニ供スル電信線路電話線路ヲ移轉スル必要アル者ノ請求ニ由リ遞信省ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ其移轉費用ハ請求者之ヲ負擔スルモノトス

第六條 遞信省ニ於テ民有地ニ電信線電話線ノ柱木ヲ建設シタルトキハ一本毎ニ一箇年四錢ノ手當金ヲ給與ス但所有者又ハ其他ノ權利者ニ於テ手當金ヲ望ムサルトキハ此限ニテナス

第七條 左ニ掲ケルモノハ其要求ニ對シ遞信省之ヲ補償スヘシ

一 建築修理及線路測量ノ爲生シタル損害

二 瓦斯支管水道支管下水支管電燈線電力線及私設電信線電話線ヲ移轉シタル費用

三 伐除シタル竹木其他植物ノ代償又ハ移植ノ費用

第八條 第七條ノ補償金額ハ雙方協議之ヲ定メ若シ其議相協ハサルトキハ市町村長(未タ市制町村制ヲ實施セザル地方ハ區長)ヲシテ之ヲ評定セシム

市町村長ノ評定ニ服セザル者ハ其評定ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ一箇月以内ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

○開港ノ期 明治三十三年七月 勅令第三百三十九號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ開港々則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

開港々則

第一條 左ニ記載スル外國通商ヲ許シタル諸港ノ經界ハ左ノ如ク之ヲ定ム(三十三年勅令第三百六十號及三十三年勅令第三百五十二號ヲ以テ修正加ス)

横濱ノ港界ハ二十二天(マシダリン、ナラフ)ヨリ燈船マテ夫ヨリ正北ニ向ヒ鶴見川口ノ東岸マテ引キタル一線内ニ含マル

神戸ノ港界ハ瀨ノ濱ノ端角ヨリ正南ニ引キタル一線ト和田岬ヨリ北東ニ引キタル他ノ一線トノ二線ヲ經界トナシタル面積内

三十一年 逓信省令第十六號ヲ以テ本則ノ施行期則ヲ定

新潟ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシ二海哩半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧内ニ含マル

奥港ノ港界ハ椎沼村ヨリ北五十里村外堺マテ引キタル一線ト加茂湖東岸港町ヨリ同湖北西岸加

茂村マテ引キタル一線トノ内ニ含マル

大阪ノ港界ハ武庫川口目標(ツリト、ポイント)ヨリ南微西ニ向ヒ引キタル一線ト大和川口ヨリ

引キタル一線ト武庫川口目標(ツリト、ポイント)ヨリ六海哩大和川口ヨリ五海哩ノ所ニ於テ相

接スル其二線内ニ含マル

長崎ノ港界ハ小瀬戸浦ノ南東端ヨリ鼠島ノ外端ヲ經テ長刀岩マテ夫ヨリ東微南ニ引キタル線以

内

函館ノ港界ハ阿野間崎ヨリ南方沖合半海哩ノ所ヨリ上磯村有川口ノ東岸マテ引キタル一線内ニ

含マル

清水ノ港界ハ真崎ヨリ正北ニ引キタル一線以内

武豊ノ港界ハ布土村ヨリ正東ニ引キタル一線以内

四日市ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ二海哩半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧内

絲崎ノ港界ハ糸崎ヨリカサノ山ノ嶺ニ引キタル一線以内

下ノ關ノ港界ハ彦島弟子待ノ鼻ヨリ沙巖流島ノ南東端マテ夫ヨリ北東微北ニ向ヒ引キタル一線及

彦島海士浦ノ鼻ヨリ北東ニ引キタル一線以内

門司ノ港界ハ白木崎ヨリ北西四鐘ノ所ヨリ門司崎ニ引キタル一線ト正南ニ引キタル他ノ一線ト

二線ヲ經界トナシタル面積内ニ引キタル一線及小戸鼻ヨリ殘島ノ南端ニ引キタル一線以内ニ
 博多ノ港界ハ殘島ノ北端ヨリ滿切ニ引キタル一線及小戸鼻ヨリ殘島ノ南端ニ引キタル一線以内ニ
 唐津ノ港界ハ高島ノ北端ヨリ正東及正西ニ引キタル二線以内ニ
 口ノ津ノ港界ハ宮崎鼻ヨリ正南ニ引キタル一線ト白間崎ヨリ正東ニ引キタル他ノ一線トノ二線
 ヲ經界トナシタル面積内ニ
 三角ノ港界ハ瀬戸ノ鼻ヨリ大矢野島ノ鼻ヨリ戸馳島野崎マテ同島兎鼻ヨリ
 千束島六四郎鼻マテ夫ヨリ大矢野島塔々崎マテ引キタル四線以内
 嚴原ノ港界ハ虎崎ヨリ耶良崎(一名嚴釋伽鼻)ニ引キタル一線以内
 佐須奈ノ港界ハ立揚崎ヨリトヤタ崎ニ引キタル一線以内
 鹿見ノ港界ハ長崎島ヨリ塔崎ニ引キタル一線以内
 那覇ノ港界ハ先原崎ヨリ千ノ瀬ノ北端ニ引キタル一線及安里川口ヨリ千ノ瀬ノ北端ニ引キタル
 一線以内
 濱田ノ港界ハ黒崎ヨリ馬島ノ西端ニ引キタル一線ト馬島ノ北端(千疊敷鼻)ヨリ入道鼻ニ引キタル
 一線以内
 境ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ一海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧内及外ノ江ノ西端ヨリ正北ニ
 引キタル一線以東
 宮津ノ港界ハ片島鼻ヨリ日置崎ニ引キタル一線以内

敦賀ノ港界ハ赤崎ヨリ蛭子崎ニ引キタル一線以内

七尾^南ノ港界ハ能登島松ヶ崎ヨリ南東ニ引キタル一線以西及屏風崎峽以東

伏木ノ港界ハ燈臺ヲ中心トシテ一海里半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧内

小樽ノ港界ハ平磯岬ヨリオヤシ岬ニ引キタル一線以内

釧路ノ港界ハ燈臺ヨリ正西二海里ニ引キタル一線以北及該線ノ西端ヨリ正北ニ引キタル一線以

東

室蘭ノ港界ハエシル岬ヨリ大黒島ヲ經テホテイシ崎ニ引キタル一線以内

第二條 各船舶ハ入港スルニ當リ其國旗及信號符字ヲ掲クヘシ定期郵便船ハ會社旗ヲ以テ信號符字

ニ代用スルコトヲ得

右國旗及信號符字又ハ會社旗ハ船舶ノ著港ヲ港長ニ届出タル後ニアラサレハ之ヲ引下スヘカラス

著港届ハ日曜日及大祭日ヲ除クノ外著港後二十四時間内ニ之ヲ差出スヘシ但シ着港届ヲ差出シタ

ル後ニアラサレハ如何ナル船舶タリトモ税關手續ノ便利ヲ與ヘサルモノトス

第三條 各船長ハ其著港ニ際シ自由交通ノ許可ヲ受クルマテハ其船舶ト他ノ船舶或ハ陸地トノ間ニ

於ケル一切ノ交通ヲ差止ムヘシ

第四條 港長ノ端艇ハ港ノ入口近傍ニ出向キ居リ港長ハ各船舶ノ入港スルニ當リ其泊船所ヲ示定ス

ヘシ而シテ各船舶ハ止ムコトヲ得ザル場合ヲ除クノ外特許ナクシテ其泊船所ヲ去ルヘカラス但シ

港長ニ於テ必要ト認ムルトキハ船舶ヲシテ其泊船所ヲ移サシムルコトヲ得

第五條 港長ハ其職務ノ間常ニ制服ヲ着ケ其端縫ニハ別紙雜形ノ如キ旗ヲ掲クヘシ
港長ハ何時タリトモ船舶ノ運動繫船ノ適否及碇泊所ニ關スル指揮カ果シテ實行セラレ居ルヤ否ヲ
検査スルコトヲ得

第六條 如何ナル船舶モ公ケノ航路ニ投錨シ若クハ其他航海ノ自由ヲ障碍スヘカラス
「デブ、ブームス」ヲ接キ出シタル船舶ニシテ其「デブ、ブームス」カ航海ノ自由ヲ障碍スルトキハ港
長ノ請求ニ從ヒ之ヲ取込ムヘシ

第七條 港界内ニ碇泊シ又ハ運航スル各船舶ハ日没ト日出ノ間ニハ海上衝突豫防ニ關スル法令ニ規
定シタル各種ノ船燈ヲ掲クヘシ

第八條 暴風雨ノ來ラムトスルトキ或ハ警報信號ヲ掲ケタルトキハ各船舶ニ於テ直ニ一箇又ハ一箇
以上ノ豫備錨ヲ投下スルノ準備ヲ爲スヘシ尤モ嵐船ハ此外別ニ蒸氣ヲ發生セシムヘシ

第九條 常用ニ超過シ爆發物又ハ容易ニ燃焼スヘキ物料ヲ積載シタル一切ノ船舶ハ港界外ニ來リ其
處ニテ港長ノ指揮ヲ待ツヘシ斯ク指揮ヲ待ツ間右船舶ハ日出ト日没ノ間ニハBノ信號日没ト日出
ノ間ニハ紅燈ヲ前橋ノ頂上ニ掲クヘシ

各船舶ハ港長ヲ指定シタル場所ニアラサレハ前記ノ物料ヲ積入レ又ハ荷卸スヘカラス
港長ハ港界内ニ於テ前項ノ場所ヲ指定シ難シト認ムルトキハ港界外ニ於テ適當ノ場所ヲ指定スル
コトヲ得(三十二年勅令第四百三號
ヲ以テ本項及次項追加)
前項ニ依リ指定シタル場所ハ港界内ニ在ルモノト看做ス

第十條 休業中又ハ修繕中ノ船舶及總テ「ヤット」、倉庫船、貨船及端艇等ハ特ニ港長ノ指定シタル泊
船所ニ碇泊スヘシ

第十一條 船舶カ港界内ニ於テ火ヲ失シタルトキハ救援ノ來ルマテ船鐘ヲ打鳴スヘシ且ツ日出ト日
没ノ間ニハNMノ信號ヲ掲ケ日没ト日出ノ間ニハ斷ニス紅燈ヲ上下スヘシ

警察官ノ救援ヲ要スルトキハ日出ト日没ノ間ニハGノ信號ヲ掲ケ日没ト日出ノ間ニハ藍火若ハ閃
火ヲ示スヘシ

前記ノ如キ信號ニ用ユル場合ノ外港長ハ允許ヲ得ルニアラサレハ港界内ニ於テ銃砲及煙火等ヲ發
スルコトヲ得ス

第十二條 帝國政府ニ於テ流行病若クハ傳染病(虎烈刺、天然痘、黃熱、
猩紅熱、コレラ、)アル地ト布告シタル地ヨリ來著シ
又ハ航海中船中ニ該病アリタル船舶ハ港界外ニ來リ日出ト日没ノ間ニハ黃旗ヲ日没ト日出ノ間ニ
ハ紅白二燈ヲ上下ニ連ネ前橋ノ頂上ニ掲クヘシ又前記ノ船舶ハ當該衛生官吏ノ臨檢ヲ受クヘシ

衛生官吏臨檢ノ爲メ其船舶ニ近寄リタルトキハ適當ノ豫防ヲ施シ得ル爲メニ航海中現ニ該病發生
ノ有無及該病ノ性質如何ヲ該官吏ニ通知スヘシ
右船舶ハ自由交通ヲ允許ヲ受クルマテ黃旗若クハ前記ノ燈火ヲ引下スヘカラス且ツ當該衛生官吏
ノ允許ヲ得ルニアラサレハ何ハタツトモ上陸セシメ又ハ一切他ノ船舶ト交通スルヲ許サス
前數項ノ規定ハ港界内ニ碇泊スル船舶中ニ於テ前記ノ流行病及傳染病ノ内何病ヲモ發生シタル
ト推定之ニ適用ス其時前記ノ規定ハ該船舶ト交通スルヲ許サス

右船舶ハ港長ヨリ其旨命令ニ接スルトキハ其泊船所ヲ移轉スヘシ

牛羊等傳染病アル地ヨリ來著シ又ハ航海中該病ヲ發生シタル船舶ハ當該衛生官吏ノ允許ヲ得ルニアラサレハ牛羊等又ハ其死體、皮革又ハ骨ヲ陸揚シ又ハ他船ニ積換ユルコトヲ許サス

第十三條 港界内ニ於テ死體、荷足、灰燼、塵芥等ヲ海中ニ投棄スヘカラス、又ハ石炭、荷足其他之ニ類スル物料ヲ積卸スルトキハ其海中ニ脱落スルヲ防ク爲メ必要ノ豫防ヲ爲ス

何船舶ニテモ港ニ寄アル一切ノ物料ヲ海中ニ投棄シ又ハ怠慢ニ依リ脱落セシメタルトキハ港長ヨリ其旨命令ニ接セバ該船舶ニ於テ之ヲ取除クヘシ若シ取除カサルニ於テハ港長ハ該船舶ノ費用ヲ以テ之ヲ取除カシムルコトヲ得

第十四條 船舶出港セントスルトキハ其旨港務局ニ届出ヲ且ツ出帆旗ヲ引揚クヘシ

第十五條 一港内又ハ其附近ノ公ケノ航路ノ妨害トナルヘキ總テノ難破物又ハ其他ノ物件ハ港長ノ指定セル時間内ニ其所有主ニ於テ之ヲ取除クヘシ若シ港長ノ指定セル時間内ニ此命令ヲ遵行セザルニ於テハ港長ハ所有主ノ費用ヲ以テ之ヲ取除カシメ又ハ破壊セシムルコトヲ得

第十六條 港務局ハ定期郵便汽船ヲ爲メニ適切ニシテ且ツ充分ナル浮標ノ繫船器若干ヲ備ヘ置キ之ヲ使用スル所ノ船舶ヲシテ成規ノ使用料ヲ拂ハシムヘシ

第十七條 燈船、信號用浮標又ハ立標ニハ鐘、網其他ノ船具ヲ繫ケヘカラス

船舶若シ燈船、浮標、立標、埠頭及其他ノ造營物ニ乗掛ケ又ハ之ヲ毀損シタルトキハ其修繕又ハ再設ノ爲メニ必要ノ費用ハ該船舶ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第十八條 本則ノ規定ヲ犯シタルトキハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 船舶ニ科スル罰金、使用料又ハ費用ニ付テハ船長モ亦其責ヲ負フモノトス

第二十條 本則ニ依リ船舶ニ科シタル罰金、使用料又ハ費用ヲ完納スルカ或ハ之ニ對シ港長ノ満足スヘキ擔保物ヲ港長ニ差出スニアラサレハ其船舶ノ出港ヲ許サス

第二十一條 本則ニ於テ港長ト稱スルハ助役及代理者ヲモ包含シ船長ト稱スルハ其名稱ノ何タルヲ問ハス船舶ヲ指揮監督スル者ノ義ニシテ港ト稱スルハ本則第一條中ニ列記セル諸港ノ一ヲ指メ

第二十二條 各港ニ於テ其一部分ヲ軍艦ノ碇泊所トシテ取除ケ置クヘシ

第二十三條 本則ノ規定中軍艦ニ適用セラルヘキモノハ第四條、六條、十二條、二十一條ノ規定及第十三條第一項及二項ノ規定ニ限ル

第二十四條 本則施行ノ時期及場所ハ遞信大臣之ヲ告示ス
本則實施ニ關スル細則ハ遞信大臣之ヲ發布ス
(別紙略之)

○開港及開港ニ於テ輸出スヘキ貨物ノ指定
明治三十二年七月
勅令第三百四十二號

朕開港及開港ニ於テ輸出スヘキ貨物ノ指定ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 從來ノ開港ノ外左ノ諸港ヲ開港ス
(三十二年勅令第四百六十號)
ヲ以テ爾後國籍附テ加フ

- 駿河國清水
- 尾張國武豐
- 伊勢國四日市
- 備後國絲崎
- 長門國下ノ關
- 豐前國門司
- 筑前國博多
- 肥前國唐津
- 肥前國口ノ津
- 肥後國三角
- 對馬國嚴原
- 對馬國佐須奈
- 對馬國鹿見
- 琉球國那覇
- 石見國濱田

三十二年大蔵
省令第三十七
號ヲ以テ第二
條ニ依ル物品
ヲ指定ス

伯耆國境
丹後國宮津
越前國敦賀
能登國七尾
越中國伏木
後志國小樽
釧路國釧路
膽振國室蘭

第二條 窒窒港ニ於テハ麥、石炭、硫黃其ノ他大蔵大臣ノ指定シタル物品ノ輸出ニ限リ之ヲ爲スコト
ヲ得

第三條 第一條ノ各港ニ於テ滿二年毎ノ輸出入貨物ノ價格五萬圓ニ達セザルトキハ之ヲ閉鎖ス
前項閉鎖ノ時期ハ三箇月前大蔵大臣之ヲ公告スヘシ

附則

本令ハ關稅法施行ノ日ヨリ施行ス

○ 危害品船積法則 明治六年八月
第二百九十二號布告

危害ヲ生スヘキ物品ヲ漫リニ船積致シ候テハ他ノ物品ヲ傷害シ甚シキハ全船ヲ失ヒ人命ヲ損シ不容
易儀ニ付左ノ條件之法則ヲ定メ當明治六年十月一日ヨリ令施行候條此旨布告候事

一 火藥硝石硫黃ノ類及ヒ發火シ易キ製藥品其他油脂燻液汚腐敗シ易キ性質ニシテ他物ヲ損害スヘキ
物品船積致候時ハ其品名ヲ表包ノ外部ニ書キ記シ或ハ其送狀ニ記載致シ船主船長又ハ運漕會社危
難聯合會社等ノ承諾ヲ得テ後差出スヘシ若シ其手數無之尋常ノ荷物ト伴リ之ヲ船積致シ或ハ船積
セント謀ル者ハ金五百圓以内ノ罰金ニ處スヘキ事

一 尋常ノ品物トシテ差出シタル荷物ノ内ニ前條ノ如キ危害品可容之ト見受候時ハ船主船長運漕會社
危險聯合會社ハ何時ヲ限ラス何地ヲ論セス直ニ發包シテ之ヲ視查スルノ權利可有之事
但爲視查發包シタル荷物中ニ危害品無之時ハ船主會社等ノ入費ヲ以テ故ノ如ク荷造可致然レ共
其荷物中ニ危害品有之時ハ是等ノ入費都テ荷主ヨリ可拂事

一 此危害品ヲ船積セサル以前運送會社又ハ危險聯合會社ノ倉庫等ニ於テ見出ス時ハ之ヲ安全ノ場所
ニ移シ置キ直ニ其「管轄廳或ハ裁判所」ヘ可届出事
但安全ノ場所ニ之ヲ移スノ費用ハ荷主ヨリ辨償可致事

一 此危害品ヲ既ニ船積シタル後ニ見出シ之ヲ安全ノ場所ニ保チ難キ時ハ船中ニ於テ三人以上ノ保證
人ヲ立テ之ヲ海中ニ投棄シ着港ノ上直ニ其次第書及ヒ荷主ノ姓名ヲ其地ノ「管轄廳或ハ裁判所」ヘ
可届出事
但投棄シタル荷物及ヒ是ヨリ生スル荷主ノ損失ヲ辨償スルニ不及事

一 船長及ヒ運漕會社等荷主ト申合此危害品ヲ尋常ノ荷物トシテ船積シ或ハ船積セント謀ル者ハ金五
百圓以内又之ヲ見出ストイヘトモ官ニ訴ヘ出サル時ハ金二百圓以内ノ罰ニ處スヘキ事

○ 水難救護法 明治三十二年三月 法律第九十五號

沿革略記

明治三年二月不開港規則難船救助心得方ヲ定ム ● 四年四月外國船浪著ノ節取扱方ヲ定ム ● 八年四月第六十
六號布告ヲ以テ内國船難破及漂流物取扱規則ヲ定ム ● 十年八月第五十五號ヲ以テ船難報告並難船報告授受
手續ヲ定ム ● 三十二年三月法律第九十五號ヲ以テ水難救護法ヲ制定シ總テ前令ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル水難救護法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
水難救護法

第一章 遭難船舶

第一條 遭難船舶救護ノ事務ハ最初ニ事件ヲ認知シタル市町村長之ヲ行フ

第二條 遭難船舶アルコトヲ發見シタル者ハ遲滯ナク最近地ノ市町村長又ハ警察官ニ報告スヘ
シ

警察官吏ニ於テ報告ニ接シタルトキハ市町村長ニ通知スヘシ

第三條 遭難船舶アルコトヲ認知シタルトキハ市町村長ハ直ニ現場ニ臨ミ救護ニ必要ナル處分ヲ爲
スヘシ

第四條 警察官吏ハ救護ノ事務ニ關シ市町村長ヲ助ケ市町村長現場ニ在ラザルトキハ之ニ代リ其職
務ヲ執行スヘシ

第五條 救護ハ船長ノ意ニ反シテ之ヲ爲スコトヲ得ス

三十二年三月
會令第三十五
號ヲ以テ本法
施行規則ヲ定

前項ノ規定ハ市町村長ニ於テ船長ノ人命ヲ保護スル手段ヲ不充分ナリト認め又ハ船長ニ惡意アリト認めタル場合ニハ之ヲ適用セス

第六條 市町村長ハ救護ノ爲人ヲ招集シ船舶車馬其ノ他ノ物件ヲ徵用シ又ハ他人ノ所有地ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ招集セラレタル者ハ市町村長ノ指揮ニ從ヒ救護ニ從事スヘシ

第七條 市町村長ハ救護ニ際シ必要ナラスト認めル者妨害ヲ爲シタル者又ハ不正ノ行爲ヲ爲シタル者ヲ退去セシムルコトヲ得

市町村長ハ救護ニ際シ暴行ヲ爲シタル者ノ身體ヲ拘束スルコトヲ得

市町村長前項ノ處分ヲ爲スニ當リ助力ヲ命セラレタル者ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第八條 市町村長ハ救護ニ際シ遭難物件ヲ隠匿シタル者アリト認めルトキハ其物件ヲ搜索シ又ハ之ヲ差押フルコトヲ得

第九條 市町村長ハ遭難船舶其ノ他救上ケタル物件及前條ノ規定ニ依リ差押タル物件ヲ保管スヘシ

前項ノ物件中ニ郵便物アルトキハ市町村長ハ遲滞ナク最近ノ郵便局ニ引渡スヘシ

第十條 船長ハ遭難後遲滞ナク船舶報告書ヲ作り市町村長ニ差出スヘシ但シ船舶國籍證書ノ交付ヲ申請スルコトヲ要セサル船舶又ハ湖川港灣ノミヲ限リ航行スル船舶ノ遭難ニ付テハ此ノ限ニアラ

ス

市町村長ハ報告書ノ事實ヲ審査シ相當ト認めルトキハ船長ノ請求ニ依リ認證ヲ與フヘシ
市町村長ハ報告書ノ事實ヲ審査スル爲船内書類ノ提出ヲ命シ又ハ船員、旅客其ノ他船中ニ在リタル者ヲ呼出シ訊問ヲ爲スコトヲ得

第十一條 市町村長ハ救上ケタル物件左ニ掲クル事項ノ一ニ該當スト認めタルトキハ之ヲ公賣シ其ノ代金ヲ保管スヘシ

一 物件久ニ耐ヘ難キコト又ハ著シク其ノ價格ヲ減スル虞アルコト

二 爆發物、容易ニ燃焼スヘキ物又ハ其ノ他ノ物件ニシテ保管上危險ノ虞アルコト

三 保管ノ費用其ノ物件ノ價格ニ超過シ又ハ其ノ價格ニ比シ不相當ナルコト

前項ノ規定ニ依リ公賣ヲ爲サントスル場合ニ於テ船長其ノ地ニ在ルトキハ市町村長ハ期間ヲ定メ其ノ期限内ニ市町村長ノ相當ト認めル擔保ヲ供シテ物件ノ引渡ヲ請求セサルトキハ公賣ニ付スヘキ旨ヲ船長ニ告知スヘシ

遭難船舶ノ所在地船籍港ナルトキハ前項ノ告知ハ船舶所有者ニ之ヲ爲スヘシ

船長又ハ船舶所有者ニ於テ第二項ノ規定ニ依リ物件ノ引渡ヲ請求シタルトキハ公賣ヲ爲スコトヲ得ス

第十二條 救護ニ關係シタル者ハ市町村長ヨリ救護費用ノ支給ヲ受クルコトヲ得

前項ノ規定ハ左ニ掲クル者ニハ之ヲ適用セス

- 一 救護セラレタル船舶ノ所有者又ハ其ノ船舶ノ船員
- 二 故意、懈怠又ハ過失ニ因リ遭難ヲ惹起シタル者
- 三 第五條ノ規定ニ違反シテ救護シタル者
- 四 救護ニ際シ妨害ヲ爲シ又ハ不正ノ行爲ヲ爲シタル者
- 五 遭難物件ヲ持去リ又ハ其ノ引渡ヲ拒ミタル者

第十三條 左ニ掲クルモノヲ以テ救護費用トス

- 一 救護ニ關係シタル者ノ勞務ノ報酬
- 二 第六條ノ規定ニ依ル土地ノ使用又ハ物件ノ徵用ニ對スル補償
- 三 救上ケタル物件ノ運搬、保管又ハ公賣ニ要シタル費用

第十四條 救護費用ノ支給ヲ受ケントスル者ハ市町村長ノ指定スル期間内ニ其ノ金額ヲ申立ツヘシ
前項ノ手續ヲ爲ササル者ハ救護費用ノ支給ヲ受クルコトヲ得ス

第十五條 救護費用ノ金額ハ命令ノ規定ニ依リ市町村長之ヲ定ム
市町村長ハ救護費用ノ金額ヲ船長ニ告知シ期間ヲ定メテ之ヲ納付セシムヘシ
遭難船舶ノ所在地船籍港ナルトキ又ハ船長在ラザルトキハ前項ノ告知ハ船舶所有者ニ之ヲ爲スヘシ

第十六條 船長又ハ船舶所有者ハ救護費用ヲ納付シテ市町村長ノ保管ニ係ル金錢其ノ他ノ物件ノ引渡ヲ受クヘシ
船長又ハ船舶所有者ニ於テ市町村長ノ相當ト認ムル擔保ヲ供スルトキハ前項ノ金額其ノ他ノ物件ノ全部若ハ一部ノ引渡ヲ受クルコトヲ得

- 左ニ掲クル物件ハ前二項ノ規定ニ拘ラス其ノ引渡ヲ受クルコトヲ得
- 一 船員ノ所持品
- 二 船員及旅客ノ食料
- 三 運送貨ヲ支拂フコトナクシテ船中ニ携帯スル旅客ノ手荷物
- 四 第十七條第二項ニ掲クル物件

市町村長ノ保管スル船舶又ハ積荷ヲ賣却シ抵當ト爲シ又ハ質入セントスルトキハ市町村長ノ認可ヲ受クヘシ此ノ場合ニ於テ市町村長必要アリト認ムルトキハ之ニ立會フヘシ
前項ノ處分ニ因リ取得シタル金錢其ノ他ノ物件ハ市町村長之ヲ保管スヘシ

市町村長ニ於テ第十一條又ハ前項ノ規定ニ依リ金錢ヲ保管スル場合ニ其ノ金額救護費用ノ金額ニ達シタルトキハ直ニ其ノ金額ヲ以テ救護費用ヲ支辨シ其ノ殘額ハ保管ニ係ル他ノ物件ト共ニ船長又ハ船舶所有者ニ引渡スヘシ

第十七條 船長又ハ船舶所有者ニ於テ市町村長ノ定メタル期間内ニ救護費用ヲ納付セザルトキハ市町村長ハ保管ノ物件又ハ擔保トシテ差出シタル物件ヲ公賣シ其ノ代金ヲ保管スヘシ

前項ノ規定ハ市町村長ニ於テ公賣ヲ爲スモ其ノ代金ヲ以テ公賣ノ費用ヲ償フニ足ラスト認メタル物件ニハ之ヲ適用セス

第十八條 市町村長ハ納付ヲ受ケタル金額又ハ其ノ保管ニ係ル金錢ヲ以テ救護費用ヲ支辨スヘシ

第十九條 救護其ノ效ヲ奏セサルトキハ救護費用ハ國庫ヨリ之ヲ支給ス
船長又ハ船舶所有者救護費用ヲ納付セサル場合ニ於テ第十七條ニ定ムル手續ヲ爲シタル後市町村長ノ保管ニ係ル金錢ヲ以テ救護費用ヲ支辨スルニ足ラサルトキハ國庫ヨリ之ヲ補給シ殘餘アルトキハ船長又ハ船舶所有者ニ之ヲ還付ス

第二十條 本章ノ規定ハ市町村長ノ招集ヲ待タズシテ救護ニ從事シタル者ニ亦之ヲ適用ス但シ市町村長ニ於テ救護ニ干與セサルトキハ此ノ限ニアラス

第二十一條 本章中船長ニ關スル規定ハ船長ニ代リテ其ノ職務ヲ行フ者ニ亦之ヲ適用ス

第二十二條 第一條乃至第四條、第五條第一項、第六條乃至第九條、第十二條乃至第十四條、第十五條第一項第二項、第十八條、第十九條第一項、第二十條及第二十一條ノ規定ハ海軍艦船其ノ他官廳ノ所有スル船舶ニ亦之ヲ準用ス

第二十三條 本章ノ規定ハ條約ニ別段ノ定アル場合ニハ之ヲ適用セス

第二章 漂流物及沈没品

第二十四條 漂流物又ハ沈没品ヲ拾得シタル者ハ遲滞ナク之ヲ市町村長ニ引渡スヘシ但シ其ノ物件ノ所有者分明ナル場合ニ於テハ拾得ノ日ヨリ七日以内ニ限リ直ニ其ノ所有者ニ引渡スコトヲ得

(三十三年法律第六十六號)
ヲ以テ三日ヲ七日ニ改ム)

前項但書ノ場合ニ於テハ拾得者ハ所有者ヨリ河川ニ漂流スル材木ニ在リテハ其價格ノ十五分ノ一其ノ他ノ漂流物ニ在リテハ其ノ物件ノ價格ノ十分ノ一、沈没品ニ在リテハ其ノ物件ノ價格ノ三分ノ一ニ相當スル金額以内ノ報酬ヲ受クルコトヲ得(三十三年法律第六十六號)
號ヲ以テ本項中追加)

第二十五條 市町村長ハ引渡ヲ受ケタル物件ヲ保管スヘシ

市町村長ハ前項ノ物件ヲ所有者ニ引渡スヘキコトヲ公告スヘシ但シ其ノ所有者知レタルトキハ公告スヘキ事項ヲ直ニ其ノ所有者ニ告知スヘシ此ノ場合ニ於テハ公告ヲ須非サルコトヲ得

第二十六條 第十一條第一項ノ規定ハ漂流物及沈没品ニ之ヲ準用ス

第二十七條 市町村長ニ於テ第二十五條ノ公告又ハ告知ヲ爲シタル日ヨリ一箇年以内ニ限リ所有者ハ河川ニ漂流スル材木ニ在リテハ其ノ價格ノ十五分ノ一其ノ他ノ漂流物ニ在リテハ其ノ物件ノ價格ノ十分ノ一、沈没品ニ在リテハ其ノ物件ノ價格ノ三分ノ一ニ相當スル金額並公告、保管、公賣又ハ評價ニ要シタル費用ヲ市町村長ニ納付シテ物件ノ引渡ヲ受クルコトヲ得(三十三年法律第六十六號)
ヲ以テ本項及次項中追加)
前項ノ場合ニ於テハ市町村長ハ拾得者ニ河川ニ漂流スル材木ニ在リテハ其ノ價格ノ十五分ノ一其ノ他ノ漂流物ニ在リテハ其ノ物件ノ價格ノ十分ノ一、沈没品ニ在リテハ其ノ物件ノ價格ノ三分ノ一ニ相當スル金額ヲ支給ス

物件ノ價格ハ市町村長之ヲ定ム但シ鑑定人ヲシテ之ヲ評價セシムルコトヲ得

第二十八條 前條ノ期間内ニ所有者物件ノ引渡ヲ請求セサルトキ又ハ物件ノ引渡ヲ請求セサル意思ヲ表示シタルトキハ市町村長ハ期間ヲ定メ其ノ期間内ニ物件ノ引渡ヲ受クヘキコトヲ拾得者ニ告知スヘシ

拾得者ハ前項ノ期間内ニ公告、保管、公賣又ハ評價ニ要シタル費用ヲ市町村長ニ納付シ物件ノ引渡ヲ受クルニ因リテ其ノ所有權ヲ取得ス
拾得者ニ於テ前項ノ期間内ニ物件ノ引渡ヲ受ケサルトキハ市町村長ハ其ノ物件ヲ公賣シ其ノ代金ヨリ前項ノ費用ヲ控除スヘシ此ノ場合ニ於テ殘餘アルトキハ國庫ノ取得トシ不足アルトキハ國庫ヨリ之ヲ補給ス

第二十九條 警察官吏ニ於テ航路、錨地又ハ建造物ニ障害ヲ爲スト認メタル漂流物又ハ沈没品ヲ取除キタル場合ニ於テハ警察官吏ハ其ノ物件ヲ市町村長ニ引渡スヘシ

前項ニ依リ市町村長ニ於テ引渡ヲ受ケタル物件ニ付テハ第十一條第一項及第二十五條第二項ノ規定ヲ適用ス

第三十條 前條ニ依リ公告若ハ告知ヲ爲シタル日ヨリ一箇年以内ニ所有者物件ノ引渡ヲ請求シタルトキハ市町村長ハ所有者ヲシテ取除、保管及公告ニ要シタル費用ヲ納付セシメ之ニ其ノ物件ヲ引渡スヘシ
前項ノ期間内ニ物件ノ引渡ヲ請求スル者ナキトキハ市町村長ハ其ノ物件ヲ公賣シ其ノ代金ヲ以テ取除、保管、公告及公賣ニ要シタル費用ヲ支辨スヘシ此ノ場合ニ於テ殘餘アルトキハ國庫ノ取得トシ不足アルトキハ國庫ヨリ之ヲ補給ス

第三章 罰則

第三十一條 遭難船舶救護ノ場合ニ於テ左ノ各號ニ該當スル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

- 一 正當ノ理由ナクシテ市町村長ノ招集ニ應セス又ハ物件ノ徵用若ハ土地ノ使用ヲ拒ミタル者
- 二 第六條第二項ノ規定ニ違反シタル者

三 第七條第三項ノ規定ニ違反シタル者

第三十二條 遭難船舶救護ノ場合ニ於テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三十三條 第十條第一項ノ手續ヲ爲スコトヲ怠リタル者ハ五 以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 詐僞ノ所爲ヲ以テ遭難報告書ニ認證ヲ受ケタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十五條 刑法第三百八十五條及第三百八十七條ノ規定ハ沈没品ニ亦之ヲ適用ス

第三十五條ノ二 漂流ノ物件ニ對シ現存スル記號ヲ塗抹毀損シ若ハ新ニ附記押捺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス(三十三年法律第六十六號ヲ以テ本條追加)

附則

第三十六條 此ノ法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十七條 明治三年二月二十九日不開港場規則 心得方條目、明治四年四月二十二日外國船漂着ノ節

取扱方、明治八年第六十六號布告及明治十年第五十五號布告ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十八條 此ノ法律施行ノ際明治八年第六十六號布告ニ依リ處分中ノ事件ニ付テハ其ノ處分ヲ終ルマテ該布告ノ規定ヲ適用ス

第三十九條 此ノ法律ニ於ケル市町村長ノ事務ハ東京市、京都市及大坂市ニ於テハ區長之ヲ行ヒ市制町村制ヲ施行セサル地ニ於テハ戶長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フ

三十二年勅令
三百五十七號
ヲ以テ本法ハ
三十二年八月
四日ヨリ施行
ス

○海上衝突豫防法明治二十五年六月

沿章略記

明治五年七月第二十九號布告ヲ以テ船燈規則ヲ制定ス●七年一月第五號布告ヲ以テ前令ヲ改正シ海上衝突豫防規則トナス●九年二月第十一號布告ヲ以テ前令ヲ改定ス●十三年七月第三十五號布告ヲ以テ海上衝突豫防規則ヲ改正ス●十四年五月第三十號布告ヲ以テ前令ノ規則ヲ廢止ス●二十五年六月法律第五號ヲ以テ十三年第三十五號布告ヲ廢シ更ニ海上衝突豫防法ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル海上衝突豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海上衝突豫防法

總則

本法ハ海洋ト海洋接續ノ場所トヲ問ハス凡ソ航洋船ノ運航シ得ヘキ水上ニ於ケル船舶ニ適用ス

本法中汽船ト雖帆ヲ以テ運轉シ汽力ヲ用非サルトキハ帆船ト看做シ汽力ヲ用ウルトキハ帆ヲ用ウルト用ヒサルトノ別ナク汽船ト看做スヘシ

本法中汽船トハ凡ソ機關ノ作用ニ因テ運轉スル船舶ヲ謂フ

本法中船舶航行中トハ碇泊若ハ繫留又ハ坐礁、膠沙ニ非サル場合ヲ謂フ

船燈

本法中船燈ニ關シテ見得トハ晴天ノ暗夜ニ於テ認メ得ルヲ謂フ

第一條 船燈ニ關スル規定ハ天氣ノ如何ニ關セス日没ヨリ日出マテ必ス遵守スヘシ此ノ時間中ハ本法ニ定メタル船燈ノ外之ニ紛レ易キ燈ヲ掲クヘカラス

第二條 汽船ハ航行中必ス左ノ燈ヲ掲クヘシ

- 一 前橋若ハ其ノ前面ニ於テ又ハ前橋ヲ具ヘサルトキハ本船ノ前方ニ於テ船體上二十尺ヨリ低カラサル所ニ若船幅二十尺ヲ超ユルトキハ其船幅ヨリ低カラサル所ニ透明ノ白燈一箇ヲ掲クヘシ然レトモ船體上四十尺以上ノ所ニ掲クルヲ要セス此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光ヲ發シテ鐵盤ノ二十點間ヲ照スヘク製造シ其ノ射光左右舷外ヘ十點間ツ、即チ船ノ正首ヨリ各舷正横後ノ二點マテ及フヘキ樣裝置シ且少クモ五海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノヲ用ウヘシ
 - 二 右舷ニ綠燈ヲ掲クヘシ此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光ヲ發シテ鐵盤ノ十點間ヲ照スヘク製造シ其ノ射光ヲ船ノ正首ヨリ右舷正横後ノ二點マテ及フヘキ樣裝置シ且少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノヲ用ウヘシ
 - 三 左舷ニ紅燈ヲ掲クヘシ此ノ燈ハ常ニ不同ナキ光ヲ發シテ鐵盤ノ十點間ヲ照スヘク製造シ其ノ射光ヲ船ノ正首ヨリ左舷正横後ノ二點マテ及フヘキ樣裝置シ且少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノヲ用ウヘシ
 - 四 本條第二項第三項ノ船燈ニハ其ノ燈ヨリ前ニ少クモ三尺突出シタル隔板ヲ其ノ燈ノ内側ニ裝置シ右舷ノ綠光ハ左舷ニアル船ヨリ、左舷ノ紅光ハ右舷ニアル船ヨリ見得サル樣ニ爲スヘシ
 - 五 汽船航行中ハ本條第一項ニ規定シタル白燈ノ外ニ同種ノ白燈一箇ヲ増掲スルヲ得但シ此場合ニ於テハ其ノ兩燈ヲ龍骨線上前後ニ隔テ其ノ前燈ヲ後燈ヨリ少クモ十五尺下方ニ掲ケ其前後ノ距離ハ上下ノ距離ヨリモ多キヲ要ス
- 第三條 汽船他船ヲ引キテ航行スルトキハ兩舷燈ヲ掲クルノ外ニ白燈二箇ヲ上下ニ少クモ六尺ヲ隔

ヲ連掲スヘシ此ノ白燈ハ第二條第一項ノ白燈ト同一ノ構造ニシテ且同一ノ場所ニ掲クルヲ要ス然
レトモ二艘以上ヲ引キテ航行スルトキハ其ノ引キタル船ノ船尾ト最後ニ引カル、船ノ船尾トノ距
離六百尺以上ノ場合ニ於テハ右二箇ノ白燈ヨリ上方若ハ下方六尺ノ所ニ尙同種ノ白燈一箇ヲ増掲
スヘシ

本條ノ引船ハ引カル、船舶ノ操舵目標トシテ烟突若ハ後櫓ノ後面ヘ小形ノ白燈一個ヲ掲クルヲ得
但シ此ノ白燈ハ本船正横ヨリ前面ニ見得サル様ニ爲スヲ要ス

第四條 事變ノ爲運轉自由ヲ得サル船舶ハ夜間ニアリテハ第二條第一項ニ規定シタル白燈ト同一ノ
高サニ於テ最モ見得易キ所ニ(汽船ナレハ其白船ノ代リニ)二箇ノ紅燈ヲ上下ニ少クモ六尺ヲ隔テ
連掲スヘシ此紅燈ハ周回少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモノタルヲ要ス又晝間ニアリテハ最モ
見得易キ所ニ直徑二尺ノ黒球若ハ黒色ノ形象二箇ヲ上下ニ少クモ六尺ヲ隔テ、連掲スヘシ

海底電信線ノ布設又ハ引揚ニ從事スル船舶ハ夜間ニアリテハ第二條第一項ニ規定シタル白燈ノ位
置ニ於テ(汽船ナレハ其白燈ノ代リニ)三箇ノ燈ヲ上下ニ少クモ六尺ツ、ヲ隔テ連掲スヘシ但シ此
ノ燈三箇ノ内上下ノ二箇ハ紅色中央ノ一箇ハ白色ニシテ周回少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキモ
ノタルヲ要ス又晝間ニアリテハ最モ見得易キ所ニ直徑二尺以上ノ形象三箇ヲ上下ニ少クモ六尺ツ
ハ、ヲ隔テ連掲シ其ノ上下ノ二箇ハ紅色球形ヲ用井中央ノ一箇ハ白色豎菱形ヲ用ウヘシ

本條ノ船舶全ク運行セサルトキハ船燈ヲ掲クヘカラス然レトモ運行スルトキハ必ス之ヲ掲クヘシ
本條規定ノ燈及形象ハ運轉自由ヲ得ズシテ他船ノ航路ヲ避クル能ハサルノ信號ト認ムヘシ

本條ノ信號ハ難船信號ト混同スヘカラス難船信號ハ第三十一條ニ於テ之ヲ規定ス

第五條 航行中ノ帆船及他船ニ引カレテ運行スル船舶ハ第二條第二項第三項ノ船燈ノミヲ掲クヘシ
決シテ同條第一項ノ白燈ヲ掲クヘカラス

第六條 小形船航行中天氣ノ模様ニ因リ綠紅ノ二船燈ヲ掲置キ難キトキハ何時ニテモ使用シ得ヘキ
標點火シテ之ヲ手近ニ備ヘ置キ他船ノ我船ニ近寄ル來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行クトキハ衝
突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ其ノ船燈ヲ他船ヨリ最モ見得易キ様各舷ニ表示スヘシ但シ此
ノ時綠光ハ左舷ヨリ、紅光ハ右舷ヨリ見得ス且成ルヘク各舷正横後ノ二點ヨリ後方ヘ見得サル様
ニ爲スヲ要ス

此ノ綠光ノ各燈ヲ間違ヒナク容易ニ取扱フ爲綠燈ハ綠色、紅燈ハ紅色ニテ外面ヲ塗リ且適當ノ隔
板ヲ備置クヘシ

第七條 總積量四十噸未滿ノ漁船總積量二十噸未滿ノ帆船及榜櫓ヲ以テ運轉スル船航行中ハ必スシ
モ第二條第一項第二項第三項ニ規定シタル燈ヲ掲クルヲ要セス然トモ若之ヲ掲クサルトキハ必
ス左ノ規定ニ依ルヘシ(三十年法律第四十三號ヲ以テ本條改正)

- 一 四十噸未滿ノ汽船
 - 甲 船ノ前部又ハ烟突若ハ其ノ前面ニ於テ舷線上九尺ヨリ低カラス且最モ見得易キ所ニ第二
條第一項ニ規定シタル構造裝置ニシテ少クモ二海里ノ距離ヨリ見得ヘキ白燈一箇ヲ掲クヘシ
 - 乙 第二條第三項第三項ニ規定シタル構造裝置ニシテ少クモ一海里ノ距離ヨリ見得ヘキ綠紅ノ

二 舷燈ヲ掲クルカ又ハ船首ヨリ各舷正横後ノ二點マテ右舷ハ綠色左舷ハ紅色ノ射光ヲ及ス
 ヘク製造シタル兩色燈一箇ヲ掲クヘシ但シ此燈ハ白燈ヨリ少クモ三尺下方ニ掲クルヲ要ス
 二 汽艇ハ第一項甲ノ白燈ヲ舷線上九尺ノ所ヨリ下方ニ掲クルヲ得然レトモ其ノ白燈ハ乙ノ兩
 色燈ヨリ高キヲ要ス

三 二十噸未満ノ帆船ハ帆ヲ用ウルト榜櫂ヲ用ウルトニ拘ハラズ一面ハ綠色一面ハ紅色ノ玻璃
 ヲ用井タル燈籠一個ヲ手近カニ備置キ他船ノ我船ニ近寄リ來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄リ行
 クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ之ヲ表示スヘシ但シ此ノ時綠光ハ左舷ヨリ紅
 光ハ右舷ヨリ見得サル様ニ爲スヲ要ス(三十年法律第四十三號ヲ以テ本號改正)

四 榜櫂ヲ以テ運轉スル船ハ榜櫂ヲ用ウルト帆ヲ用ウルトニ拘ハラズ白色ノ燈籠一箇ヲ手近カ
 ニ備置キ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ臨時之ヲ表示スヘシ(三十年法律第四十三號ヲ以テ本號追加)
 本條ノ諸船ハ第四條第一項及第十一條末項ノ燈ヲ掲クルニ及ハス

第八條 水先船其ノ水先區ニ於テ營業ヲ爲ストキハ他船ニ要スル燈ヲ掲クヘカラス單ニ周回ヨリ見
 得ヘキ白燈一箇ヲ檣頭ニ掲ク且十五分時ヲ超ユサル間隙ヲ以テ閃火一箇又ハ數箇ヲ發スヘシ
 水先船ニハ右ノ外綠紅ノ二舷燈ヲ用意シ置キ他船ノ我船ニ近寄リ來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄リ
 行クトキハ我船ノ進行スル方向ヲ示ス爲メ一時之ヲ表示スヘシ但シ此ノ時綠光ハ左舷ヨリ紅光ハ
 右舷ヨリ見得サル様ニ爲スヲ要ス

水先人ヲ要スル船舶ヘ直付ケスヘキ水先船ハ白燈ヲ檣頭ニ掲クル代リニ臨時之ヲ表示シ又舷燈ヲ

兩舷ニ掲クル代リニ一面ハ綠色、一面ハ紅色ノ玻璃ヲ用井タル燈籠一箇ヲ手近カニ備置キ前項ニ
 從テ之ヲ使用スルヲ得

第九條 水先船其ノ水先區ニ於テ營業ヲ爲サ、ルトキハ其積量ニ應シテ他船ト同一ノ燈ヲ掲クヘシ
(三十年法律第四十三號ヲ以テ本條別除)

第十條 他船ニ追越サレムトスル船舶ハ他船ニ向テ船尾ヨリ白燈ヲ表示シ又ハ閃火ヲ發スヘシ
 本條ニ從テ表示スヘキ白燈ハ豫メ船尾ニ掲置クヲ得然レトモ此ノ燈ハ少クモ一海里ノ距離ヨリ見
 得ヘキモノニシテ常ニ不同ナキ亮明ノ光ヲ發シ鏡盤ノ十二點ヲ照スヘク製造シ船ノ正後ヨリ左右
 へ六點間宛射光ノ及フヘキ椽隔板ヲ裝置シ成ルヘク舷燈ト同一ノ高サニ掲クヘシ

第十一條 長サ百五十尺未満ノ船舶碇泊中ハ前方ノ最モ見得易クシテ船體上ヨリ二十尺ヲ超エサル
 所ニ白燈一箇ヲ掲クヘシ此ノ燈ハ常ニ不同ナキ亮明ノ光ヲ發シ周回少クモ一海里ノ距離ヨリ見得
 へキモノタルヲ要ス

長サ百五十尺以上ノ船舶碇泊中ハ前方ノ最モ見得易クシテ船體上二十尺以上四十尺以下ノ所ニ前
 項ノ白燈一箇ヲ掲ク且船尾若ハ其ノ最寄ニ於テ前方ノ燈ヨリモ少クモ十五尺下方ニ同種ノ白燈一
 箇ヲ掲クヘシ

本條船舶ノ長サハ本船船籍證書面ノ長サニ依ルヘシ
 船路若ハ其ノ最寄ニ於テ乗揚ケタル船舶ハ本條白燈ノ外尙第四條第一項ニ規定シタル紅燈二箇ヲ
 掲クヘシ

第十二條 各船他船ノ注意ヲ喚起スル爲必要ナリトスルトキハ本法ニ規定シタル船燈ノ外尙閃火ヲ發シ或ハ難船信號ト混同セサル爆裂信號ヲ發スルヲ得

第十三條 本法船燈ノ規定ハ二艘以上ノ軍艦又ハ軍艦ニ護送セラ、船舶ニ増掲スル列位燈及信號燈ニ關シ各國政府ニ於テ特ニ制定シタル規則ノ施行ヲ妨ケス又船舶所有主ニ於テ其ノ國政府ノ許可ヲ受ケ登簿公告ノ手續ヲ經テ私用スル識別信號ノ使用ヲ妨ケス
第十四條 汽船並開ニ帆ノミヲ以テ運轉スルモ其ノ烟突ヲ引下ケサルトキハ前方ノ最モ見得易キ所ニ直徑二尺ノ黑球若ハ黑色形象一箇ヲ掲クヘシ

霧中信號

第十五條 航行中ノ船舶ニ關シ本條ニ規定シタル信號ヲ爲スニハ左ノ信號器ヲ用ウヘシ

汽船ハ汽笛若ハ汽角

帆船及他船ニ引カレテ運行スル船舶ハ霧中號角

本條中長聲トハ四秒乃至六秒時間ノ發聲ヲ謂フ

汽船ハ汽力其他之ニ代用スヘキモノニ因リ發聲スル適當ノ汽笛若ハ汽角ヲ音響ノ妨害物ナキ所ニ裝置シ且號鐘及機關ノ作用ニ因リ發聲スル適當ノ霧中號角ヲ備フヘシ又總積量二十噸以上ノ帆船ハ汽船同様ノ號鐘及霧中號角ヲ備フヘシ
霧中降雪其ハ他暴雨中ハ晝夜ノ別ナク左ノ各項ニ規定シタル信號ヲ爲スヘシ

一 汽船航行中ハ二分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ長聲ヲ一發スヘシ

二 汽船航行中運轉ヲ止メテ速力ヲ有タサルトキハ二分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ長聲ヲ二發スヘシ但シ其ノ二發ノ間隔ハ大約一秒時タルヲ要ス

三 帆船航行中ハ一分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ右舷開ナレハ一聲ヲ發シ左舷開ナレハ二聲ヲ連發シ船ノ正横後ニ風ヲ受ケタルトキハ三聲ヲ連發スヘシ

四 船舶碇泊中ハ一分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ大約五秒時間劇シク號鐘ヲ鳴ラシヘシ

五 他船ヲ引キテ運航スル船舶、海底電信線ノ布設若ハ引揚ニ從事スル船舶及航行中運轉自由ヲ得スシテ近寄り來ル他船ノ航路ヲ避ケ能ハサルカ又ハ本法ニ遵テ運轉シ能ハサル船舶ハ本條第一項及第三項ニ規定シタル信號ノ代リニ二分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ三聲ヲ連發シ即チ長聲ヲ一發シタル後直ニ短聲ヲ二發スヘシ又他船ニ引カレテ運航スル船舶モ此ノ信號ヲ爲スハ妨ナシト雖他ノ信號ヲ爲スヘカラス(三十年法律第四十三號ヲ以テ本條改正)
自六號(三十年法律第四十四號)至九號(三十年法律第四十五號)ヲ以テ則除

總積量二十噸未滿ノ帆船ハ必スシモ前數項ニ規定シタル信號ヲ爲スヲ要セス然レトモ其ノ信號ヲ爲ササルトキハ一分時ヨリ多カラサル間隔ヲ以テ適宜他ノ音響信號ヲ爲スヘシ

霧中速力

第十六條 霧中降雪其ハ他暴雨中ハ各船現時ノ狀況ニ注意シ適度ノ速力ヲ以テ進行スヘシ
帆船其ノ正横ヨリ前面ニ方リテ他船ノ霧中信號ヲ聞キ其ノ所在ヲ定メ得サルトキハ成ルヘク機關ノ運轉ヲ止メ全ク衝突ノ虞ナキニ至ルマテ其ノ運航ニ注意スヘシ

航方

衝突ノ危険ハ其ノ現況ニヨリ我船ニ近寄り來ル他船ノ方位ヲ看守シテ之ヲ豫知スルヲ得若其ノ方位儘ニ變更スルヲ認メサルトキハ危険アルモノト知ルヘシ

第十七條 二艘ノ帆船互ニ近寄りテ衝突ノ虞アルトキハ其ノ一船ヨリ左ノ如ク他船ノ航路ヲ避クヘシ

一 一杯ニ開カサル船ハ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

二 左舷ニ一杯ニ開キタル船ハ右舷ニ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

三 一杯ニ開カサル二艘ノ船、風ヲ受ケル舷同シカラサルトキハ左舷ニ風ヲ受ケタル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

四 一杯ニ開カサル二艘ノ船、風ヲ受ケル舷同シキトキハ風上ノ船ヨリ風下ノ船ノ航路ヲ避クヘシ

五 船尾ヨリ風ヲ受ケタル船ハ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十八條 二艘ノ汽船正シク眞向又ハ幾ント眞向ニ行進フテ衝突ノ虞アルトキハ兩船トモ錨路ヲ右舷ニ轉シ互ニ他船ノ左舷ノ方ヲ行過スヘシ

本條ハ兩船正シク眞向又ハ幾ント眞向ニ逢フテ衝突ノ虞アルトキニ限り適用スヘシ兩船各、其ノ錨路ヲ保チテ互ニ替リ行クトキニハ適用スヘカラス

本條ヲ應用スヘキ場合ハ兩船共ニ正シク眞向又ハ幾ント眞向ニ行進ヒタルトキ即チ晝間ニアリテ

ハ我船ノ櫓ト他船ノ櫓ト一直線又ハ幾ント一直線ニ見ユルトキ夜間ニアリテハ互ニ他船ノ兩舷燈ヲ見得ルトキニ限ルヘシ

本條ハ晝間他船ノ我錨路ヲ横切リテ我船ノ前面ニ見ユルトキ又ハ夜間我船ノ紅燈他船ノ紅燈ニ對シ或ハ我船ノ綠燈他船ノ綠燈ニ對スルトキ又ハ我船ノ前面ニ綠燈ヲ見シテ紅燈ヲ見或ハ紅燈ヲ見スシテ綠燈ヲ見ルトキ又ハ綠紅ノ兩燈ヲ我船ノ前面ヨリ他ノ位置ニ見ルトキハ適用スヘカラス

第十九條 二艘ノ汽船互ニ航路ヲ横切リ衝突ノ虞アルトキハ他船ヲ右舷ニ見ル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十條 帆船ト汽船ト互ニ近寄り衝突ノ虞アルトキハ汽船ヨリ帆船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十一條 本法航方ニ依リ二船ノ内一船ヨリ他船ノ航路ヲ避クルトキハ他船ニ於テ其ノ錨路及速力ヲ保ツヘシ

但シ他船ニ於テ天氣密濛又ハ其ノ他ノ事故ニ因リ航路ヲ避クル船ノ處置ノミニテハ衝突ヲ避ケ能ハサル程兩船接近シタルコトヲ認ムルトキハ自ラ亦臨機衝突ヲ避クルニ至當ノ處置ヲ爲スヘシ(三十年法律第四十三號ヲ以テ附加)

第二十二條 本法航方ニ依リ他船ノ航路ヲ避クヘキ船ハ成ルヘク他船ノ前面ヲ横切ルヘカラス

第二十三條 本法航方ニ依リ他船ノ航路ヲ避クヘキ汽船ハ他船ニ近寄りタルトキ時宜ニ應シテ速力ヲ緩メ若ハ運轉ヲ止メ又ハ後退スヘシ

第二十四條 總テ他船ヲ追越ス船ハ本法航方中前數條ノ規定ニ拘ハラズ他船ノ航路ヲ避クヘシ

總テ他船ノ兩舷正横後ノ二點以外即チ夜間ニアリテ舷燈ヲ見難キ位置ヨリ其ノ船ヲ追越サントスル船舶ハ之ヲ追越船ト爲シ其ノ後兩船ノ位置ニ變更ヲ來スモ其ノ追越船ヲ以テ本法ノ航路横切船ト爲サス故ニ其ノ船ハ他船ヲ全ク追越シ了ルマテ他船ノ航路ヲ避クヘキモノトス

晝間他船ヲ追越サントスル船舶ニシテ前項ニ記載シタル方位ノ内外ヲ辨知シ難キモノハ本船ヲ追越船ト看做シテ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十五條 汽船狹隘ノ水道ニ於テ無難ニ通航シ得ルトキハ其ノ中流ノ右側即チ本船ノ右舷ニ當ル方ヲ航行スヘシ

第二十六條 航行中ノ帆船ハ網或ハ繩ヲ用非テ漁業ニ從事スル帆船ノ航路ヲ避クヘシ但シ漁船ト雖獵ニ他船ノ通航スヘキ線路ヲ妨クヘカラス

第二十七條 本法ヲ履行スルニ當リ運航及衝突ニ關シ百般ノ危險ニ注意スルハ勿論若危險切迫シテ本法ヲ履行シ能ハサル特殊ノ場合ニ於テハ其ノ危險ヲ避クル爲臨機ノ處置ヲ爲スコトニ注意スヘシ

航路信號

第二十八條 本條中短聲トハ大約一秒時間ノ發聲ヲ謂フ
航行中ノ汽船他船ニ近寄り航路ヲ變セムトスルトキハ汽笛若ハ汽角ヲ以テ左ノ信號ヲ爲シ他船ニ我船ノ航路ヲ通知スヘシ
短聲一發 我船航路ヲ右舷ニ取ル

短聲二發 我船航路ヲ左舷ニ取ル
短聲三發 我船全速力ニテ後退ス

懈怠ノ責

第二十九條 本法ハ點燈、信號又ハ見張ノ怠リ其ノ他海員ノ常務又ハ臨機ノ處置ニ必要ナル注意ノ怠リヨリ生シタル結果ニ付船、船主、船長海員ヲシテ其ノ責ヲ免レシメサルモノトス
特例

第三十條 本法ハ地方長官ニ於テ規定シタル港、川其ノ他内海ノ運航ニ關スル特別規則ノ施行ヲ妨ケス

難船信號

第三十一條 危難ニ罹リテ他船又ハ陸地ヨリ救助ヲ要スル船舶ハ左ノ信號ヲ同時又ハ別々ニ使用スヘシ

晝間信號

- 一 大約一分時ノ間隙ヲ以テ砲又ハ其ノ他ノ爆裂發火信號ヲ一發ス(三十年法律第四十三號ヲ以テ本號改正)
 - 二 萬國船舶信號書ニ掲載スルNCノ難船信號ヲ表示ス
 - 三 方形旗ノ上又ハ下ニ球若ハ之ニ類似ノモノヲ掲クル遠隔信號ヲ表示ス
 - 四 霧中信號器ヲ以テ間斷ナク音響ヲ發ス(三十年法律第四十三號ヲ以テ第四號ヲ) (削除シ第五號ヲ繰上ケ第四號トナス)
- 夜間信號

- 一 大約一分時ノ間隔ヲ以テ砲又ハ其ノ他ノ爆烈發火信號ヲ一發ス(三十年法律第四十三號ヲ以テ本條改正)
- 二 船上ノ發烟(テロルノ煙)
- 三 青火ヲ發スル榴彈或ハ火箭ヲ一次一發ツ、度々打揚ク(三十年法律第四十三號ヲ以テ本條改正)
- 四 霧中信號器ヲ以テ間斷ナク音響ヲ發ス

附則

- 第三十二條 本法中船舶積量噸數ニ關シ日本形船ハ十石ヲ以テ一噸ニ通算ス
- 第三十三條 本法ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス
- 第三十四條 明治十三年七月第三十五號布告海上衝突豫防規則同十四年五月第三十三號布告同規則追加同十八年八月第二十七號布告同規則改正追加ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

○船舶積量測定規則(明治十七年四月)

十七年第十號
布達ヲ以テ船舶
積量測定方
法ヲ定ム

沿革略記

明治四年十二月大藏省無量送ヲ以テ船舶積量噸數改方法則ヲ定ム○十七年四月第十號布告ヲ以テ船舶積量測定規則ヲ制定ス是現行法ナリ

船舶積量測定規則別紙ノ通制定シ明治十七年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別紙)

船舶積量測定規則

第一條 凡ソ船舶積量噸數ノ積量ハ此規則ニ依リ測定スル者トス

第二條 船舶ノ積量ヲ測定スルハ總テ曲尺ヲ用ヒ尺位ヲ以テ單位トシ其尺度ハ分位ニ止ムヘシ

第三條 西洋形船ノ積量ハ百立方尺ヲ以テ一噸トシ日本形船ノ積量ハ十立方尺ヲ以テ一石トス

第四條 西洋形船ニシテ甲板一層ノ者ハ其甲板ヲ以テ量噸甲板トシ二層ノ者ハ其上層ヲ以テ量噸甲板トシ三層以上ノ者ハ其最下ヨリ第二層ニアル者ヲ以テ量噸甲板トス

第五條 西洋形船ニシテ甲板一層若クハ二層ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トシ又甲板三層以上ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上各甲板間ノ噸數及ヒ最上甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス

第六條 汽船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乗組人常用室及ヒ機關室ノ噸數ヲ除キタル者トス

第七條 帆船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乗組人常用室ノ噸數ヲ除キタル者トス

第八條 機關室トシテ除クヘキ噸數ノ割合ハ左ノ如シ

外車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ二十ヨリ三十マテハ總噸數ノ百分ノ三十七

噸車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ十三ヨリ二十マテハ總噸數ノ百分ノ三十二

第九條 日本形回漕船ハ船梁上下船艙ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トシ又其構造回漕船ニ異ナル者ハ舷端以下ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トス
第十條 船舶ノ噸數及ヒ積石測度ノ方法ハ布達ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

○ 船舶法 明治三十二年三月 法律第四十六號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル船舶法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶法

第一條 左ノ船舶ヲ以テ日本船舶トス

- 一 日本ノ官廳又ハ公署ノ所有ニ屬スル船舶
 - 二 日本臣民ノ所有ニ屬スル船舶
 - 三 日本ニ本店ヲ有スル商會社ニシテ合名會社ニ在リテハ社員ノ全員、合資會社及ヒ株式合資會社ニ在リテハ無限責任社員ノ全員、株式會社ニ在リテハ取締役ノ全員カ日本臣民ナルモノノ所有ニ屬スル船舶
 - 四 日本ニ主タル事務所ヲ有スル法人ニシテ其代表者ノ全員カ日本臣民ナルモノノ所有ニ屬スル船舶
- 舊商法ノ規定ニ從ヒテ設立シタル合資會社ニ在リテハ業務擔當社員ノ全員カ日本臣民ナルモノノ

三十二年延信
省令第二十號
施行細則ヲ定メ

所有ニ屬スル船舶ヲ以テ日本船舶トス

第二條 日本船舶ニ非サレハ日本ノ國旗ヲ掲クルコトヲ得ス

第三條 日本船舶ニ非サレハ不開港場ニ寄港シ又ハ日本各港ノ間ニ於テ物品又ハ旅客ノ運送ヲ爲スコトヲ得ス但法律若クハ條約ニ別段ノ定アルトキ、海難若クハ捕獲ヲ避ケントスルトキ又ハ主務大臣ノ特許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第四條 日本船舶ノ所有者ハ日本ニ船籍港ヲ定メ其船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ船舶ノ積量ノ測度ヲ申請スルコトヲ要ス

船籍港ヲ管轄スル管海官廳ハ他ノ管海官廳ニ船舶ノ積量ノ測度ヲ囑託スルコトヲ得

外國ニ於テ取得シタル船舶ヲ外國各港ノ間ニ於テ航行セシムルトキハ船舶所有者ハ日本ノ領事又ハ貿易事務官ニ其船舶ノ積量ノ測度ヲ申請スルコトヲ得

第五條 日本船舶ノ所有者ハ登記ヲ爲シタル後船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ備ヘタル船舶原簿ニ登録ヲ爲スコトヲ要ス

前項ニ定メタル登録ヲ爲シタルトキハ管海官廳ハ船舶國籍證書ヲ交付スルコトヲ要ス

第六條 日本船舶ハ法令ニ別段ノ定アル場合ヲ除ク外船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ヲ請受ケタル後ニ非サレハ日本ノ國旗ヲ掲ケ又ハ之ヲ航行セシムルコトヲ得ス

第七條 日本船舶ハ法令ノ定ムル所ニ從ヒ日本ノ國旗ヲ掲ケ且其名稱、船籍港、番號、積量、喫水ノ尺度其他ノ事項ヲ標示スルコトヲ要ス

第八條 日本船舶ノ名稱ハ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ

得ス

第九條 船舶所有者が其船舶ヲ修繕シタル場合ニ於テ其積量ニ變更ヲ生シタルモノト認ムルトキハ

遅滞ナク船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ其船舶ノ積量ノ改測ヲ申請スルコトヲ要ス

第四條第二項及ヒ第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十條 登録シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ變更ノ登録ヲ爲スコトヲ要ス

第十一條 船舶國籍證書ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ其書換ヲ申請スルコトヲ要ス船舶國籍證書カ毀損シタルトキ亦同シ

第十二條 船舶國籍證書カ滅失シタルトキハ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ更ニ之ヲ請受クルコトヲ要ス

第十三條 日本船舶カ外國ノ港ニ碇泊スル間ニ於テ船舶國籍證書カ滅失又ハ毀損シタルトキハ船長ハ其地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

日本船舶カ外國ニ航行スル途中ニ於テ前項ノ事由カ生シタルトキハ船長ハ最初ニ到着シタル地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

前二項ノ規定ニ從ヒテ假船舶國籍證書ヲ請受クルコト能ハサルトキハ其後最初ニ到着シタル地ニ於テ之ヲ請受クルコトヲ得

第十四條 日本船舶カ滅失若クハ沈没シタルトキハ解散セラレタルトキ又ハ日本ノ國籍ヲ喪失シタルトキハ船舶所有者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ抹消ノ登録ヲ爲シ且遅滞ナク船舶國籍證書ヲ返還スルコトヲ要ス船舶ノ存否カ六ヶ月間分明ナラサルトキ亦同シ

第十五條 日本ニ於テ船舶ヲ取得シタル者カ其取得地ヲ管轄スル管海官廳ノ管轄区域内ニ船籍港ヲ定メサルトキハ其管海官廳ノ所在地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第十六條 外國ニ於テ船舶ヲ取得シタル者ハ其取得地ニ於テ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第十三條第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十七條 外國ニ於テ交付スル假船舶國籍證書ノ有効期間ハ一年ヲ超ユルコトヲ要ス

日本ニ於テ交付スル假船舶國籍證書ノ有効期間ハ六ヶ月ヲ超ユルコトヲ得ス

前二項ノ期間ヲ超ユルトキト雖モ日ムコトヲ得サル事由アルトキハ船長ハ更ニ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第十八條 船舶カ船籍港ニ到着シタルトキハ假船舶國籍證書ハ有効期間満了前ト雖モ其效力ヲ失フ

第十九條 第十一條乃至第十四條ノ規定ハ假船舶國籍證書ニ之ヲ準用ス

第二十條 前十六條ノ規定ハ總噸數二十噸未満又ハ積石數二百石未満ノ船舶及ヒ端舟其他檢査ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ檢査ヲ以テ運轉スル舟ニハ之ヲ適用セス

第二十一條 前條ニ掲ケタル船舶ノ船籍及ヒ其積量ノ測定ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條 日本船舶ニ非スシテ國籍ヲ詐ル目的ヲ以テ日本ノ國旗ヲ掲ケタルトキハ船長ヲ百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ情狀重キトキハ其船舶ヲ沒收ス但捕獲ヲ避ケントスル目的ヲ以テ日本ノ

國旗ヲ掲ケタルトキハ此限ニ在ラス

日本船舶カ國籍ヲ詐ル目的ヲ以テ日本ノ國旗ニ非サル旗章ヲ掲ケタルトキ亦前項ニ同シ

第二十三條 第三條ノ規定ニ違反シタルトキハ船長ヲ二百圓以上二千圓以下ノ罰金ニ處シ船舶ヲ沒收ス

第二十四條 官吏ヲ欺キ船舶原簿ニ不實ノ登録ヲ爲サシメタル者ハ二月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以上千圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リテ處斷ス

第二十五條 第六條ノ規定ニ違反シタルトキハ船長ヲ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 第七條ノ規定ニ從ヒテ日本ノ國旗ヲ掲ケサルトキハ船長ヲ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十七條 第七條ニ定メタル事項ヲ船舶ニ標示セサルトキ又ハ第八條乃至第十二條若クハ第十四條ノ規定ニ違反シタルトキハ船舶所有者ヲ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第二十二條、第二十三條、第二十五條及ヒ第二十六條ノ規定ハ船長ニ代ハリテ其職務ヲ行フ者ニモ亦之ヲ適用ス

第二十九條 第二十二條、第二十三條、第二十五條及ヒ第二十六條ニ定メタル罪ニ付テハ刑法數人共犯ノ例ヲ適用セス

第三十條 第二十七條ノ場合ニ於テ刑法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ依リ船舶所有者ノ罪ヲ論

スヘカラサルトキハ其法定代理人ヲ罰ス

第三十一條 第二十七條ノ規定ハ船舶管理人又ハ商會社其他ノ法人ノ代表者若クハ清算人ニ之ヲ適用ス

第三十二條 管海官廳ノ事務ハ外國ニ在リテハ日本ノ領事又ハ貿易事務官之ヲ行フ

附則

第三十三條 本法ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三十四條 船舶ノ登記ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治十九年法律第一號登記法中船舶ノ登記ニ關スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第三十五條 商法第五編ノ規定ハ商行爲ヲ爲ス目的ヲ以テセサルモ航海ノ用ニ供スル船舶ニ之ヲ準用ス但官廳又ハ公署ノ所有ニ屬スル船舶ニ付テハ此限ニ在ラス

第三十六條 明治三年正月二十七日布告商船規則、同十二年第五號布告、同年第十九號布告、同十四年第十二號布告其他ノ法令ニシテ本法ノ規定ニ牴觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第三十七條 本法施行ノ際登簿船免狀又ハ船鑑札ヲ受有スル船舶ノ所有者カ本法ノ規定ニ依リ船舶國籍證書ヲ請受クヘキトキハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ登録ヲ爲シ且船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ從ヒテ船舶國籍證書ヲ請受クルマテハ登簿船免狀又ハ船鑑札ハ船舶國籍證書ト同一ノ効力ヲ有ス

第三十八條 本法施行ノ際登簿船假免狀ヲ受有スル船舶ノ所有者カ本法ノ規定ニ依リ船舶國籍證書ヲ請受クヘキ場合ニ於テハ其假免狀ハ有效期間ノ満了ニ至ルマテハ假船舶國籍證書下同ノ效力ヲ有ス但船舶カ船籍港ニ到着シタルトキハ此限ニ在ラス
登簿船假免狀ノ有效期間カ満了シタルトキト雖モ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ船長ハ假船舶國籍證書ヲ請受クルコトヲ得

第三十九條 第十四條ノ規定ハ本法施行前ニ同條ニ掲ケタル事由カ生シタルモ未タ登簿船原簿ノ削除ヲ請ハサル場合ニ之ヲ準用ス但同條ニ定メタル二週間ノ期間ハ船舶所有者カ本法施行前ニ事實ヲ知ラザルトキト雖モ其施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
本法施行前ニ踪跡ヲ失ヒタル船舶ニシテ未タ登簿船原簿ノ削除ヲ請ハサルトキ亦同シ
前三項ノ規定ニ違反シタルトキハ船舶所有者ヲ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條及七第三十一條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス
第四十條 本法施行前ヨリ存否カ分明ナラザル船舶ニシテ未タ舊法ノ期間カ經過セザルモノニ付テハ第十四條ニ定メタル六個月ノ期間ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
第四十一條 本法ノ施行ニ關スル細則ハ主務大臣之ヲ定ム

○船舶検査法 明治二十九年四月
法律第六十七號

三十年現行省令第六號ヲ以テ船舶検査法ヲ施行スルニ付
三十年同省令第十二號ヲ以テ船舶検査規程ヲ定ム

沿革略記 明治十七年十二月第三十號布告ヲ以テ西洋形船舶検査規則ヲ制定ス●二十九年四月法律第六十七號ヲ以テ前令ヲ廢止シ船舶検査法ヲ制定ス之レ現行法ナリ
朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル船舶検査法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶検査法

- 第一條 日本船舶ハ左ニ記載スルモノヲ除クノ外此ノ法律ノ規程ニ依リ検査ヲ受クヘシ(三十二年法律第五十三號ヲ以テ改正)
 - 一 總噸數二十噸未満又ハ積石數二百石未満ノ帆船
 - 二 端舟其ノ他樁樑ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ樁樑ヲ以テ運轉スル舟
 - 三 倉庫船、繫留船
 - 四 平水航路ノミヲ航行スル帆船
- 第二條 (三十二年法律第五十三號ヲ以テ除削)
- 第三條 船舶ノ検査ハ船舶ヲ日本船舶トシテ初メテ航行ノ用ニ供スルトキ其ノ航行期間満了ノトキ及航行期間内特ニ必要アルトキ之ヲ行フ
日本國ノ國籍ヲ取得スル目的ヲ以テ日本ニ於テ製造スル船舶ノ所有者ハ其ノ製造中ト雖一部ノ検査ヲ申請スルコトヲ得(三十二年法律第五十三號ヲ以テ本項追加)
- 第四條 船舶ノ航行期間ハ汽船ニ在テハ三箇月以上一箇年以内帆船ニ在テハ六箇月以上三箇年以内トス
- 第五條 船舶ノ検査ハ其ノ所在地ヲ管轄スル管海官廳之ヲ行フ(三十二年法律第五十三號ヲ以テ次項トモ改正)
遞信大臣ハ必要ト認ムル場合ニ限リ前項ノ規定ニ依ラス特ニ検査官吏ヲ指定シテ船舶ノ検査ヲ行ハシムルコトヲ得

第六條 検査官吏船舶ヲ検査シ遞信大臣ノ定ムル検査規程ニ適合スルモノト認ムルトキハ本船ノ航路定限、旅客定員、汽壓制限及航行期間ヲ定メ管轄官廳ヨリ船舶検査證書ヲ交付スヘシ

第七條 検査ヲ受ケタル船舶ノ所有者又ハ船長ニ於テ船舶検査證書ノ受有前ニ船舶ヲ航行ノ用ニ供セムトスルトキハ検査官吏ハ其ノ請求ニ依リ假證書ヲ交付シテ之ヲ許可スルコトヲ得

第八條 検査官吏ハ何時ニテモ船舶ニ臨視シ若特ニ検査ヲ爲スノ必要アリト認ムルトキハ其ノ航行ヲ停止スルコトヲ得

第九條 船舶ノ検査ニ對シ不服アル者ハ其ノ事由ヲ具シ遞信大臣ニ再検査ヲ申請スルコトヲ得再検査ヲ申請シタル者ハ其ノ決定前船舶ノ原狀ヲ變更スルコトヲ得ス

第十條 遞信大臣ノ特ニ定ムル場合ヲ除クノ外船舶検査證書若ハ假證書ヲ受有セスシテ船舶ヲ航行ノ用ニ供シ又ハ船舶検査證書若ハ假證書ニ記載スル船舶ノ航路定限、航行期間若ハ汽壓制限ヲ超

エテ航行シ又ハ検査官吏ノ臨視ヲ拒ミ若ハ航行停止ノ命ニ違背シ又ハ屬具ノ整備ヲ爲サスシテ船舶ヲ航行ノ用ニ供シタルトキハ船長ヲ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス(三十二年法律第五十三號ヲ以テ各項トモ改正)

詐偽ノ所爲ヲ以テ船舶検査證書若ハ假證書ヲ受ケタル者ノ罰亦前項ニ同シ

船舶検査證書若ハ假證書ニ旅客定員ノ記載ナキ船舶ニ旅客ヲ搭載シ又ハ該證書ニ記載シタル旅客定員ヲ超エテ旅客ヲ搭載シタルトキハ船長ヲ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪併發ノ例ヲ用非ス

前條第二項ノ罰則ハ商會社ニ在テハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員取締役若ハ使用人ニ之ヲ適用ス(三十二年法律第五十三號ヲ以テ本項中追加)

前條第二項及第三項ノ罰則ハ船長ニ代リテ其ノ職務ヲ行フ者ニモ之ヲ適用ス(三十二年法律第五十三號ヲ以テ本項追加)

第十二條 船舶ノ航路定限、航行期間、旅客定員及汽壓制限ニ關スル規程其ノ他此ノ法律ノ施行ニ必要ナル細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

附則

第十三條 此ノ法律ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第十四條 明治十七年第三十號布告西洋形船舶検査規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十五條 明治十七年第三十號布告西洋形船舶検査規則ニ依リ交付シタル船舶検査證書ハ其ノ有効期間滿了マテ效力ヲ有ス

第十六條 此ノ法律施行ノ際現存スル積石數二百石以上ノ帆船ハ遞信大臣ノ定ムル順序ニ依リ漸次検査ヲ受クルマテ船舶検査證書ヲ受有セスシテ航行ノ用ニ供スルコトヲ得(三十二年法律第五十三號ヲ以テ條中改正)

第十七條 左ニ掲クル船舶ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ検査ヲ執行ス(三十二年法律第五十三號ヲ以テ改正)

一 日本臣民ニ於テ借入レ日本各港ノ間又ハ日本ト外國トノ間ニ使用スル外國船舶

二 日本ノ沿岸又ハ湖川港内ノミヲ航行スル外國船舶

三 日本各港ニ於テ旅客又ハ移住民ヲ搭載スル外國船舶

第十八條 地方長官ハ第一條各號ニ掲ケタル船舶ノ検査ニ關シ遞信大臣ノ認可ヲ受ケ必要ナル規程ヲ設クルコトヲ得(三十二年法律第五十三號ヲ以テ本條追加)

○ 船員法 明治三十二年三月 法律第四十七號

朕國議會ノ協賛ヲ經タル船員法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船員法

第一章 總則

第二章 船員手帖

第三章 船長

第四章 海員

第五章 紀律

第六章 罰則

附則

船員法

第一章 總則

第一條 本法ハ日本船舶ノ船員ニ之ヲ適用ス但湖川、港灣ノミヲ航行スル船舶又ハ船舶法第二十條ニ掲ケタル船舶ノ船員ニ付テハ此限ニ在ラス

第二條 本法ニ於テ船員トハ船長及ヒ海員ヲ謂ヒ海員トハ船長以外ノ一切ノ乗組員ヲ謂フ

第二章 船員手帖

第三條 日本ニ於テ船員ト爲ラント欲スル者ハ管海官廳ニ船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要ス

申請人ハ戶籍吏ノ書面其他ノ公正證書ニ依リテ左ノ事項ヲ證スルコトヲ要ス但申請人カ其本籍地又ハ寄留地ニ於テ申請ヲ爲ス場合ニ於テ其地ノ管海官廳カ戶籍吏ノ職務ヲ行フトキハ此限ニ在ラス

一 氏名

二 本籍地

三 身分

四 出生ノ年月日

第四條 未成年者カ船員ト爲ルニハ其法定代理人ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

未成年者カ船員手帖ノ交付ヲ申請スルニハ前條第二項ニ掲ケタル事項ノ外前項ノ許可ヲ得タル旨ヲ證スルコトヲ要ス

第五條 船員ト爲ルコトヲ許サレタル未成年者ハ雇傭契約ニ關シテハ成年者ト同一ノ能力ヲ有ス

第六條 外國ニ於テ船員ト爲リタル者カ日本ニ到着シタルトキハ其到着ノ日ヨリ一个月内ニ船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要ス

第七條 船員手帖ニ記載シタル事項ニシテ第三條第二項ニ掲ケタルモノニ錯誤アリタルトキ又ハ同

條第二項第一號乃至第三號ニ掲ケタルモノニ變更ヲ生シタルトキハ船員ハ其事實ヲ知ラタル日ヨリ一个月内ニ管海官廳ニ船員手帖ノ訂正ヲ申請スルコトヲ要ス

船員カ日本ニ在ラサル間ニ於テ錯誤又ハ變更ノ事實ヲ知リタルトキハ前項ノ期間ハ其船員カ日本ニ到着シタル日ヨリ之ヲ起算ス

第八條 第三條第二項及ヒ第四條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第九條 船員手帖カ滅失シタルトキハ船員ハ遲滞ナク更ニ其交付ヲ申請スルコトヲ要ス

船員手帖が毀損シタルトキハ船員ハ遲滞ナク其書換ヲ申請スルコトヲ要ス

第十條 船員カ日本ニ在ラサル間ニ於テ船員手帖が滅失又ハ毀損シタルトキハ船員カ日本ニ到着シタル後遲滞ナク船員手帖ノ交付又ハ書換ヲ申請スルコトヲ要ス

第十一條 第三條第二項及ヒ第四條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ準用ス但原管海官廳ニ船員手帖ノ交付又ハ書換ヲ申請スルトキハ此限ニ在ラス

第十二條 船員カ廢業ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク管海官廳ニ其船員手帖ヲ返還スルコトヲ要ス船員カ死亡シタルトキハ其船員手帖ヲ保管スル者之ヲ返還スルコトヲ要ス

第三章 船長

第十三條 船長ハ海員ヲ指揮、監督シ及ヒ船中ニ在ル者ニ對シ其職務ヲ行フニ必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十四條 船長ハ管海官廳ノ命令アリタルトキハ商法第五百六十二條第一項ニ掲ケタル書類ヲ提出スルコトヲ要ス

第十五條 船舶カ港灣ヲ出入スルトキ、狹隘ナル水路ヲ通過スルトキ其他危險ノ虞アルトキハ船長ハ甲板ニ在リテ自ラ船舶ヲ指揮スルコトヲ要ス

第十六條 日本ト外國トノ間又ハ外國各港ノ間ヲ航行スル船舶カ外國ノ港ニ入港シ又ハ日本ニ到着シタルトキハ船長ハ二十四時間内ニ其港ノ管海官廳、若シ其港ニ管海官廳ナキトキハ其後最初ニ到着シタル港ノ管海官廳ニ航海日誌ヲ提出シテ其檢閲ヲ受クルコトヲ要ス

前項ノ規定ハ船舶カ入港ノ時ヨリ十二時間内ニ發航スル場合ニ之ヲ適用セス
管海官廳ハ必要ナル書類ノ提出ヲ命シ又ハ船員、旅客其他船中ニ在リタル者ヲ呼出タシテ訊問ヲ爲スコトヲ得

第十七條 左ノ場合ニ於テハ船長ハ最初ニ到着シタル港ノ管海官廳ニ出頭シテ其報告ヲ爲スコトヲ要ス

一、豫定ノ航路ヲ變更シタルトキ

二、人命又ハ船舶ヲ救ヒタルトキ

三、衝突其他ノ海難カ生シタルトキ

四、船舶ガ捕獲セシタルトキ

五、船中ニ於テ死亡シタル者アリタルトキ

船舶カ豫定セザル港ニ寄港シタルトキ又ハ前項第二號乃至第五號ニ掲ケタル事由カ碇泊中ニ生シタルトキハ船長ハ其港ノ管海官廳、若シ其港ニ管海官廳ナキトキハ其後最初ニ到着シタル港ノ管海官廳ニ出頭シテ其報告ヲ爲スコトヲ要ス

前條第三項ノ規定ハ前二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十八條 前條第一項及ヒ第二項ノ場合ニ於テハ船長ハ報告書ヲ作り其認證ヲ申請スルコトヲ得

第十九條 船舶ニ急迫ノ危險アルトキハ船長ハ人命、船舶及ヒ積荷ノ保護ニ必要ナル手段ヲ盡シ且

旅客、海員其他船中ニ在ル者ヲ去ラシメタル後ニ非サレハ其指揮スル船舶ヲ去ルコトヲ得

第二十條 船舶ガ衝突シタルトキハ船長ハ互ニ人命及ヒ船舶ノ保護ニ必要ナル手段ヲ盡シ且船舶ノ

名稱、船籍港、發航港及ヒ到達港ヲ告クルコトヲ要ス但自己ノ指揮スル船舶ニ急迫ノ危險アルトキハ此限ニ在ラス

第二十一條 船長カ航海中救援ヲ求ムル船舶ヲ認メタルトキハ人命ヲ救フコトヲ要ス但自己ノ指揮スル船舶ニ急迫ノ危險アルトキハ此限ニ在ラス

第二十二條 海員カ船中ニ於テ死亡シタルトキハ船長ハ其船中ニ在ル遺產ヲ保管スルコトヲ要ス

第二十三條 外國ニ駐在スル日本ノ公使、領事又ハ貿易事務官カ法令ノ定ムル所ニ依リ日本人民ヲ日本ニ送還スヘキコトヲ命シタルトキハ船長ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ拒ムコトヲ得ス送還費用ノ償還ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十四條 船長ハ其指揮セントスル船舶ニ乗込ム前ニ其船員手帖ヲ管海官廳ニ提出シテ就職ノ認證ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ就職ノ認證ヲ得タル船長カ其職ヲ退キタルトキハ遲滞ナク退職ノ認證ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十五條 船長カ死亡シタルトキ、船舶ヲ去リタルトキ又ハ之ヲ指揮スルコト能ハサルニ至リタル場合ニ於テ他人ヲ選任セサルトキハ運輸ニ從事スル海員ハ其職掌ノ順位ニ從ヒテ船長ノ職務ヲ行フ

第四章 海員

第二十六條 海員ノ雇入若クハ雇止ヲ爲シ又ハ雇入契約ノ更新若クハ變更ヲ爲シタルトキハ管海官

廳ニ海員名簿ヲ提出シテ公認ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十七條 管海官廳カ公認ヲ爲スニハ海員名簿ニ記載シタル事項ヲ當事者雙方ニ讀聞カセタル後之ニ署名、捺印セシムルコトヲ要ス但海員ノ雇止ヲ爲シタル場合ニ於テ正當ノ理由アルトキハ當事者ノ一方カ出頭セサルトキト雖モ公認ヲ爲スコトヲ得

當事者カ印ヲ有セサルトキハ署名スルヲ以テ足ル署名スルコト能ハサルトキハ氏名ヲ代署セシメ捺印スルヲ以テ足ル若シ署名スルコト能ハス且印ヲ有セサルトキハ氏名ヲ代署セシメ捺印スルヲ以テ足ル

前項ノ規定ニ依リ捺印セス又ハ氏名ヲ代署セシメ若クハ捺印シタル場合ニ於テハ海員名簿ニ其事由ヲ附記スルコトヲ要ス

第二十八條 當事者ハ正當ノ理由アル場合ニ限リ代理人ヲシテ公認ヲ受ケシムルコトヲ得

第二十九條 公認アリタルトキハ海員ハ遲滞ナク其船員手帖ヲ管海官廳ニ提出シテ公認ノ認證ヲ申請スルコトヲ要ス

第三十條 海員ノ雇止ニ關シテ爭アルトキハ當事者ノ一方ハ管海官廳ニ其事由ヲ申立テ雇止ノ公認ヲ申請スルコトヲ得

管海官廳カ前項ノ申請ヲ正當ナリト認メタルトキハ當事者雙方ヲ呼出タシ海員名簿及ヒ船員手帖ヲ提出セシメテ雇止ノ公認ヲ爲スコトヲ要ス

當事者ノ一方カ出頭セサルトキハ管海官廳ハ相手方ヲ申立ニ因リテ雇止ノ公認ヲ爲スコトヲ得此

場合ニ於テハ海員名簿及ヒ船員手帖ニ其事由ヲ記載スルコトヲ要ス
前二項ノ場合ニ於テハ管海官廳ハ海員名簿又ハ船員手帖ノ提出ヲ強制スルコトヲ得

第三十一條 船長ハ海員ノ雇入期間中其船員手帖ヲ保管スルコトヲ要ス

第三十二條 海員カ雇入期間中脱船シタルトキハ船長ハ遲滞ナク管海官廳ニ其海員ノ船員手帖ヲ返還スルコトヲ要ス

第三十三條 海員ハ雇止アリタル場合ニ於テハ船長ニ對シ其職務ノ執行又ハ品行ニ關スル證明書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第三十四條 海員名簿カ滅失又ハ毀損シタルトキハ船長ハ更ニ海員名簿ヲ作り之ヲ管海官廳ニ提出シテ公認ヲ申請スルコトヲ要ス

第二十七條及ヒ第二十八條ノ規定ハ海員名簿及ヒ船員手帖カ共ニ滅失又ハ毀損シタル場合ニ之ヲ準用ス但原管海官廳ニ公認ヲ申請スルトキハ此限ニ在ラス

第三十五條 海員カ雇入期間中第九條又ハ第十條ノ規定ニ依リテ船員手帖ノ交付又ハ書換ヲ申請シタル場合ニ於テ其交付又ハ書換アリタルトキハ海員ハ遲滞ナク第二十九條ニ定メタル手續ヲ爲スコトヲ要ス

第五章 紀律

第三十六條 左ノ場合ニ於テハ船長ハ海員ヲ懲戒スルコトヲ得
一 海員カ上長ニ對シテ尊敬又ハ從順ノ道ヲ失ヒタルトキ

二 海員カ其職務ヲ怠ラタルトキ

三 海員カ他ノ海員ノ職務執行ヲ妨ケタルトキ

四 海員カ喧嘩シタルトキ

第三十七條 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ船舶ヲ去ラザルトキ又ハ船長カ指定シタル時マテニ歸船セザルコトヲ禁ズ

第六 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ烟火又ハ焚火シタルトキ

七 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ端裏ヲ使用シタルトキ

八 海員カ食料又ハ飲料ヲ濫費シタルトキ

九 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ酒類ヲ所持スルトキ又ハ吸烟シタルトキ

第十 海員カ酩酊シテ事ヲ爲セサルトキ

第十一 其他海員カ船中ノ秩序ニ反スル行為ヲ爲シタルトキ

第三十七條 懲戒ハ左ノ四種トス

一 監禁

二 上陸禁止

三 加役

第四 減給

第三十八條 監禁ハ三日以下シ船中ノ一室ニ拘留ス

上陸禁止ハ七日以下トス此期間ニハ船舶ノ碇泊日數ノミヲ算入ス

加役ハ七日以下トシ常務時間外ニ於テ役務ニ服セシム但一日二時間ヲ超コルコトヲ得ス

減給ハ給料月額十分ノ一以下トス

第三十九條 前條第一項乃至第三項ノ期間ニハ初日ヲ算入ス

第四十條 懲戒ノ適用ハ行爲ノ輕重ニ從ヒ船長之ヲ定ム但二種以上ノ懲戒ヲ併科スルコトヲ得ス

第四十一條 海員カ兇器、爆發若クハ發火シ易キ物、劇藥其他ノ危險物又ハ酒類ヲ所持スルトキハ船長ニ於テ其物ヲ保管又ハ放棄スルコトヲ得

第四十二條 海員ガ人身又ハ船舶ニ危害ヲ及ホスヘキ行爲ヲ爲サントスルトキハ船長ハ必要ノ期間内其海員ノ身體ヲ拘束スルコトヲ得

第四十三條 船長ハ必要アルトキハ旅客其他船中ニ在ル者ニ對シテモ前二條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第四十四條 海員カ船長ノ指定シタル時ニ於テ船舶ニ乗込マサルトキ又ハ船長ノ許可ヲ得シテ之ヲ去リタルトキハ船長ハ乗船ヲ強制スルコトヲ得

第四十五條 船長ノ命令ニ服從セサル者アル場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ船長ハ海軍ノ艦船、地方官廳又ハ管海官廳ニ援助ヲ求ムルコトヲ得

第六章 罰則

第四十六條 詐僞ノ所爲ヲ以テ船員手帖ノ交付ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ

二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

詐僞ノ所爲ヲ以テ海員名簿ニ公認ヲ受ケ又ハ船員、手帖ニ認證ヲ受ケタル者亦同シ

第四十七條 第七條、第九條、第十條、第十二條、第二十九條、第三十二條又ハ第三十五條ノ規定ニ反シ船員手帖ノ交付、訂正若クハ公認ノ認證ヲ申請シ又ハ船員手帖ヲ返還スルコトヲ怠リタル者ハ

二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十八條 虛僞ノ海員名簿又ハ船員手帖ヲ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓

以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

公認ヲ受ケタル海員名簿又ハ認證ヲ受ケタル船員手帖ヲ増減、變換シテ行使シタル者亦同シ

第四十九條 左ノ場合ニ於テハ船長ヲ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三十圓以上三百圓以

下ノ罰金ニ處ス

一 船長カ正當ノ理由ナクシテ商法第五百六十二條第一項ニ掲ケタル書類ヲ船中ニ備ヘサルニキ又ハ之ヲ毀棄シタルトキ

二 船長カ第十四條ノ規定ニ反シテ書類ヲ提出ヲ拒マタルトキ

三 船長カ商法第五百六十二條第一項第二號乃至第五號ニ掲ケタル書類ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

四 船長カ第十七條第一項又ハ第二項ノ場合ニ於テ虛僞ノ報告ヲ爲シタルトキ

第五十條 左ノ場合ニ於テハ船長ヲ十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 船長カ商法第五百六十一條ノ検査ヲ爲サズシテ發航ヲ爲シタルトキ

二 船長カ船中ヲ安全ニ碇泊セシメ且商法第五百六十三條ノ規定ニ從ヒ其職務ヲ委任セスシテ船中ヲ法ヲ守ルベシトシテ碇泊セシメ且

三 船長カ第十五條ノ規定ニ反シテ甲板ニ在ラサルトキ

四 船長カ必要ヲクシテ豫定ノ航路ヲ變更シタルトキ

第五十一條 船長カ第十六條第一項、第十七條第一項、第二十二條又ハ第三十一條ノ規定ニ違反シタルトキハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十二條 船長カ第十九條ノ規定ニ違反シタルトキハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五十三條 船長カ第二十條ノ規定ニ反シテ人命又ハ船舶ノ保護ニ必要ナル手段ヲ盡ササルトキハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

船長カ第二十二條ノ規定ニ反シテ告知ヲ爲ササルトキハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十四條 船長カ第二十一條ノ規定ニ違反シタルトキハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十五條 船舶ニ急迫ノ危険アル場合ニ於テ海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ其船舶ヲ去リタルトキハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五十六條 第十九條又ハ第二十條ノ場合ニ於テ船長カ人命又ハ船舶ノ保護ニ必要ナル手段ヲ爲スニ當テリ海員カ上長ノ命令ニ服從セサルトキハ十一日以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五十圓以上

三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十七條 船長カ第二十三條第一項ノ規定ニ反シテ送還ノ命令ヲ拒ミタルトキハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十八條 船舶所有者又ハ船長カ第二十六條ノ規定ニ違反シタルトキハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

船中法第三十條及第三十一條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第五十九條 船長カ第三十二條ノ規定ニ反シテ證明書ヲ交付セズ又ハ不正ノ記載ヲ爲スル證明書ヲ交付シタルトキハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス前項ノ罪ニ被訴者ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第六十條 船長カ第三十四條第一項ノ規定ニ違反シタルトキハ五十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十一條 海員カ雇入手續ノ終リタル後正當ノ理由ナクシテ船長ノ指定シタル時ニ於テ船舶ニ乗込マサルトキハ二十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十二條 船長カ第五章ノ規定ニ反シテ海員ヲ爲シ當テリ海員ニ助カフ爲スルキハ十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス其命令ニ服從セサルトキハ十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十三條 船員、旅客其他船中ニ在リタル者カ本法ノ規定ニ依リ管海官廳ヨリ呼出ラ受ケ又ハ管類ノ提出ヲ命セラレタル場合ニ於テ正當ノ理由ナクシテ之ニ應セサルトキハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十四條 海員カ許可ヲ得スシテ二十四時間以上船中ニ在ラサルトキハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

海員カ脱船シタルトキハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
海員カ外國ニ於テ前二項ノ罪ヲ犯シタルトキハ一等ヲ加フ

第六十五條 船長カ正當ノ理由ナクシテ船舶ヲ遺棄シタルトキハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス
船長カ外國ニ於テ正當ノ理由ナクシテ海員ヲ遺棄シタルトキハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第六十六條 海員カ船長ノ許可ヲ得スシテ兇器、爆發又ハ發火シ易キ物、劇藥其他ノ危險物ヲ所持スルトキハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十七條 故ナク船舶若クハ機關ノ要部ヲ毀損シ又ハ重要ナル屬具ヲ毀損若クハ放棄シタル者ハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ船舶ノ運航ヲ妨ケタルトキハ一等ヲ加ヘ船舶ヲ覆没シ又ハ人ヲ死ニ致シタルトキハ重懲役ニ處ス

第六十八條 船舶ノ運航ヲ妨クル目的ヲ以テ前條第一項ノ罪ヲ犯シタル者ハ重懲役ニ處シ因テ船舶ヲ覆没シ又ハ人ヲ死ニ致シタルトキハ刑法第六十九條ノ例ニ依リテ處斷ス

第六十九條 海員カ上長ニ對シテ脅迫ノ罪ヲ犯シタルトキハ刑法各本條ノ例ニ照シ一等ヲ加フ
刑法第二百二十九條ノ規定ハ前項ノ場合ニハ之ヲ適用セス

第七十條 海員カ上長ニ對シテ毆打創傷ノ罪ヲ犯シタルトキハ刑法各本條ノ例ニ照シ一等ヲ加フ

第七十一條 船長カ旅客、海員其他船中ニ在ル者ニ對シテ其職權ヲ濫用シ又ハ虐待ヲ爲シタルトキハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病、死傷ニ致シタルトキハ前條ノ例ニ依リテ處斷ス

第七十二條 海員カ相黨與シテ左ノ行爲ヲ爲シタルトキハ各號ノ區別ニ依リテ處斷シ首魁ハ一等ヲ加フ
一 職務ニ服セス又ハ上長ノ命令ニ服從セザルトキハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

二 脱船シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス
三 第六十九條又ハ第七十條ノ罪ヲ犯シタルトキハ各本條ノ例ニ照シ一等ヲ加フ

第七十三條 船員カ著シク其職務ヲ怠リ因テ船舶ヲ毀損若シクハ覆没シ又ハ人ヲ死傷ニ致シタルトキハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十四條 本章ノ規定中船長ニ適用スヘキモノハ船長ニ代リテ其職務ヲ行フ者ニモ亦之ヲ適用ス
附則

第七十五條 本法ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス
石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ關シテハ勅令ヲ以テ別ニ本法施行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得

第七十六條 明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス但本法施行前ニ同規則ニ定メタル罰則ヲ適用スヘキ行爲アリタルトキハ本法施行ノ後ト雖モ其罰則ヲ適用ス

第七十七條 船員ハ本法施行ノ日ヨリ六個月間ハ船員手帖ヲ交付ヲ申請スルコトヲ要セス

前項ノ期間經過ノ後ハ船員ハ遲滞ナク船員手帖ノ交付ヲ申請スルコトヲ要ス
第七十八條 從來ノ海員名簿ハ本法施行ノ日ヨリ六個月間ハ商法ニ定メタル海員名簿ト同一ノ效力
ヲ有ス

前項ノ期間内ニ公認アリタルトキハ其期間經過ノ後ト雖モ其後始メテ公認アルマテハ從來ノ海員
名簿ハ仍ホ其效力ヲ有ス

第七十九條 本法ノ規定ニ依リ管海官廳カ行フヘキ事務ニ付テハ主務大臣ハ市町村長、市制又ハ町
村制ヲ施行セサル地方ニ在リテハ戶長又ハ之ニ準スヘキ者ヲシテ其事務ヲ行ハシムルコトヲ得
第八十條 本法ノ施行ニ關スル細則ハ主務大臣之ヲ定ム

○石數ヲ以テ表示スル船舶ニ關シ船員法施行明治三十二年六月
勅令第二百四十一號

朕石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ關シ船員法施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ關シテハ明治三十四年七月一日ヨリ船員法ヲ施行ス

○船員手帖ノ交付、訂正又ハ書換等ニ關スル手數料明治三十二年六月
勅令第二百四十三號

朕船員手帖ノ交付、訂正又ハ書換等ニ關スル手數料ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船員手帖ノ交付、訂正又ハ書換其ノ他船員法ノ規定ニ依リ認證、公認又ハ公認ノ認證ヲ申請ス
ル者ハ遞信大臣ノ定ムル所ニ從ヒ手數料ヲ管海官廳ニ納付スルコトヲ得

船員手帖ノ交付又ハ書換ニ關スル手數料ヲ除ク外前項ノ手數料ハ市町村長ニ於テ管海官廳ノ事
務ヲ行フ場合ニ在リテハ市町村ノ收入トス戶長又ハ之ニ準スヘキ者管海官廳ノ事務ヲ行フ場合
ニ在リテ國庫ヨリ其ノ役場ノ經費ヲ支辨セサルトキ亦同シ

○船舶職員法明治二十九年四月
法律第六十八號

沿革略記 明治九年六月第八十二號布告ヲ以テ西洋形船舶長運轉手機關手試取規則ヲ制定ス●十四年十二月第七十五
號布告ヲ以テ九年八月二十二號布告以降ノ改正增補ニ係ル布告ヲ廢シ更ニ西洋形船舶長運轉手機關手免狀規則
ヲ制定ス●二十九年四月法律第六十八號ヲ以テ船舶職員法ヲ制定シ前則ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル船舶職員法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶職員法

第一條 日本船舶ニハ此ノ法律ノ規程ニ依リ船舶職員ヲ乘組マシムヘシ

船舶職員ト稱スルハ船長、一等運轉士、二等運轉士、機關長及一等機關士ヲ謂フ

三十年總信省
令第七號ヲ以
テ海員試驗規
程ヲ定ム
三十年同省令
第八號ヲ以テ
海員免狀取扱
規則ヲ定ム

第二條 海技免狀ヲ有スル者ニアラサレハ船舶職員タルコトヲ得ス

第三條 海技免狀ハ左ノ十二種トス

甲種船長

甲種一等運轉士

甲種二等運轉士

乙種船長

乙種一等運轉士

乙種二等運轉士

丙種船長

丙種運轉士

機關長

一等機關士

二等機關士

三等機關士

第四條 各船舶ニ乗組マシムヘキ船舶職員ノ定員及其ノ免狀ノ種類ハ第一號表ニ依ル

第五條 海技免狀ハ遞信大臣ノ定ムル試験規程ニ依リ試験ヲ受ケ合格シ且海員名簿ニ登錄ヲ受ケタル者ニ授與ス

海軍艦船艦ニ乗組ミ運航若ハ機關運轉ニ從事シ又ハ商船學校全科卒業證書ヲ有シ遞信大臣ニ於テ海員試験規程ニ合格スト認ムル者ニハ試験ヲ用非スシテ相當ノ免狀ヲ授與スルコトヲ得

第六條 左ニ記載スル事項ニ該當スル者ハ海員試験ヲ受クルコトヲ得又船舶職員タルコトヲ得ス

- 一 公權ヲ剝奪セラレ復權セサル者及公權停止中者
- 二 家資分散又ハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者及身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者
- 三 瘋癲白痴者若ハ身體不具ニシテ執職ニ不適當ナル者
- 四 海技免狀ノ行使ヲ禁止セラレタル者及其ノ行使停止中者

第七條 高等ノ免狀ハ下等ノ免狀ニ代用スルコトヲ得

甲種船長ノ免狀ハ他ノ船長及運轉士ノ免狀ニ對シ、甲種一等運轉士ノ免狀ハ他ノ運轉士ノ免狀ニ對シ、甲種二等運轉士ノ免狀ハ乙種各運轉士及丙種運轉士ノ免狀ニ對シ、乙種船長ノ免狀ハ乙種各運轉士ノ免狀ニ對シ、乙種一等運轉士ノ免狀ハ乙種二等運轉士ノ免狀ニ對シ、丙種船長ノ免狀ハ丙種運轉士ノ免狀ニ對シ各高等ノ免狀トス

機關長ノ免狀ハ一等機關士以下ノ免狀ニ對シ、一等機關士ノ免狀ハ二等機關士以下ノ免狀ニ對シ、二等機關士ノ免狀ハ三等機關士ノ免狀ニ對シ各高等ノ免狀トス

第八條 左ニ掲クル者ハ二十圓以上二百五十圓以下ノ罰金ニ處ス

- 一 第四條ニ違背シ相當ノ船舶職員ヲ乗組マシメサル者
- 二 第二條及第四條ニ違背シ相當ノ海技免狀ヲ受有セスシテ船舶職員ト爲リタル者

三 第六條ニ違背シ船舶職員ト爲リタル者
 四 海技免狀ヲ貸付シ之ヲ行使セシメタル者
 五 海技免狀行使ノ假停止者ハ差押ヲ受ケ其ノ職務ヲ執リタル者
 第九條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪併發ノ例ヲ用ル
 前條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當人任アル社員取締役若シハ僱用人ニ之ヲ適用ス

附 則

第十條 此ノ法律ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス
 第十一條 明治十三年第三十八號布告及明治十四年第七十五號布告ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス
 第十二條 明治九年第八十二號布告同年第九十四號布告及明治十四年第七十五號布告ニ依リ授與シタル免狀ハ第二號表ニ依リ各相當ノ免狀ト交換スルニシテ其ノ交換ノ手續及時期ハ遞信大臣之ヲ定ム
 前項ニ掲ケタル各種ノ免狀ハ新免狀ト交換スルマテ之ニ代用スルコトヲ得
 第十三條 此ノ法律ハ施行ノ日ヨリ一箇年ヲ限リ積石數百五十石以上ノ帆船ニハ之ヲ適用セズ
 第十四條 遞信大臣ハ積石數百五十石以上ノ帆船ニ乗組ミ三箇年以來其ノ運航ヲ掌リ且此ノ法律施行ノ際現ニ船長ノ職ヲ執リ年齡三十歲以上ノ者ニハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年ヲ限リ試験ヲ用ルニシテ相當ノ海技免狀ヲ授與スルコトヲ得
 第十五條 遞信大臣ハ第二號表中近海航船ニシテ登簿噸數五百噸未満ノ汽船及沿海航船ニシテ登簿

噸數二百噸以上ノ汽船ニハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年ヲ限リ二等機關士ノ免狀ヲ有スル者ニ機關長ノ職ヲ執ラシメ又一等機關士ヲ乗組マシメサルコトヲ得
 (第二號表略之)

○海員懲戒法 明治二十九年四月
 法律第六十九號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル海員懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 海員懲戒法

第一章 總 則

第一條 海技免狀ヲ受有スル者其ノ職務ヲ行フニ當リ左ノ事項ニ該當スルトキハ海員審判所ノ裁決ヲ以テ懲戒ヲ加フヘシ
 一 正當ノ理由ナクシテ其ノ船舶ヲ放棄シタルトキ
 二 過失懈怠又ハ不當ノ所爲ニ因リ自他ノ船舶ヲ問ハス之ニ損害ヲ加ヘ若ハ之ヲ沈没セシメタルトキ
 三 過失懈怠又ハ不當ノ所爲ニ因リ人ヲ殺傷シタルトキ
 四 海難ニ罹リ其ノ船舶又ハ船客乗組員ヲ救助スルノ方法ヲ盡ササルトキ
 五 海難ニ罹リタル船舶アルコトヲ認メ正當ノ理由ナクシテ其ノ船舶又ハ船客乗組員ヲ救助スル

ノ方法ヲ盡ササルトキ

六 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

七 亂暴粗暴其ノ他ノ失行アリタルトキ

第二條 懲戒ハ左ノ三種トス

一 免狀行使ノ禁止

二 免狀行使ノ停止

三 罷責

第三條 前條懲戒ノ適用ハ所爲ノ輕重ニ從ヒ海員審判所之ヲ定ム

第四條 免狀行使ノ停止ハ一月以上三年以下トス

第五條 海員審判所ハ左ノ原因アルトキハ審判ヲ行ハス

一 確定裁決

二 時效

第一條各號ニ該當スル者ハ廢業ノ故ヲ以テ懲戒ヲ免ルコトヲ得ス

第六條 時效ノ期間ハ審判ヲ受クヘキ事件ノ生シタル日ヨリ五年トス

第七條 海員審判所ノ審判ニ關シ此ノ法律ニ規定ナキモノニ付テハ刑事訴訟法ノ規程ヲ準用ス

第二章 海員審判所ノ組織及管轄

第八條 海員審判所ハ地方海員審判所及高等海員審判所ノ二トス

地方海員審判所ハ船舶司檢所ニ置キ高等海員審判所ハ遞信省ニ置ク

第九條 海員審判所ニハ審判所長、審判官、理事官及書記ヲ置ク

審判所長、審判官、理事官及書記ノ定員並其ノ任用ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 地方海員審判所ノ審判ハ審判所長及審判官ヲ併セテ三人高等海員審判所ノ審判ハ審判所長及審判官ヲ併セテ五人ノ列席會議ヲ以テ之ヲ行フ

第十一條 地方海員審判所ノ管轄區域ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條 審判所ニ付スヘキ事件ノ管轄權ハ其ノ事件ノ生シタル船舶ノ定繫場ヲ管轄スル地方海員審判所ニ屬ス

同一ノ事件ニ付二箇以上ノ地方海員審判所管轄權ヲ有スルトキハ其ノ事件ノ生シタル地ニ最も近キモノノ管轄トス

第十三條 地方海員審判所ノ理事官又ハ被審人ハ其ノ事件ヲ他ノ地方海員審判所ニ移付スルノ申請ヲ爲スコトヲ得

前項ノ申請ヲ爲ス者ハ審判期日前ニ管轄海員審判所ヲ經由シテ高等海員審判所ニ申請書ヲ差出スヘシ

高等海員審判所ハ前項ノ申請アリタル場合ニ於テ審判上便益ナリト認ムルトキハ其ノ決定ヲ以テ他ノ地方海員審判所ニ該事件ヲ移付スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ該事件ハ移付ヲ受ケタル地方海員審判所ノ管轄權ニ屬ス

第十四條 高等海員審判所ハ左ノ場合ニ於テ理事官又ハ被審人ノ申請書ニ依リ何レノ海員審判所ニ

於テ本件ヲ審判スルノ權アルヤヲ決定ス

一 權限アル地方海員審判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ審判權ヲ行フコトヲ得サルトキ

二 二以上ノ地方海員審判所審判權ヲ有シ又ハ有セストノ確定裁決ヲ爲シタルトキ

第三章 審判前ノ手續

第十五條 船舶司檢所司檢官、同司檢官補、警察官吏、市町村長及浦役人ニ於テ此ノ法律ニ依リ審判ニ付スヘキ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ直ニ其ノ事實ヲ詳記シ管轄地方海員審判所ノ理事官ニ報告スヘシ

第十六條 領事官及貿易事務官帝國外ニ於テ前條ノ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ證憑ヲ集取シ管轄地方海員審判所ノ理事官ニ報告スヘシ

第十七條 理事官審判ニ付スヘキ事實アリタルコトヲ認知シタルトキハ證憑ヲ集取シ又必要ニ應ジ管地臨檢スルコトヲ得

第十八條 理事官ハ職權ヲ以テ審判ノ開始ヲ地方海員審判所ニ申立ツヘシ
前項ノ申立ヲ爲ストキハ證憑其ノ他必要ノ書類ヲ添附スヘシ

第四章 地方海員審判所ノ審判

第十九條 地方海員審判所ハ理事官ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ審判ヲ開始スヘキヤ否ヤヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ理事官ノ意見ヲ聽クヘシ

開始決定ハ理事官及被審人ニ之ヲ通知スヘシ

第二十條 地方海員審判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ審判所長ハ審判官ニ其ノ下調ヲ命スヘシ

第二十一條 下調ノ命ヲ受ケタル審判官ハ被審人ヲ呼出シテ之ヲ訊問スルコトヲ得
受命審判官ハ必要ナル證憑ヲ集取スヘシ

第二十二條 被審人若ハ證人正當ノ理由ナクシテ受命審判官ノ呼出ニ應セザルトキハ受命審判官ハ引致狀ヲ發シテ之ヲ引致セシムルコトヲ得
引致狀ハ理事官ノ命令ニ因リ勾引狀執行ノ手續ヲ準用シテ之ヲ執行ス

第二十三條 被審人逃走シ又ハ逃走ノ虞アルトキハ受命審判官ハ免狀行使ノ假停止ヲ爲シ若ハ之ヲ差押スルコトヲ得

第二十四條 被審人又ハ證人疾病其ノ他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スルコト能ハサルコトヲ疏明スルトキハ受命審判官ハ其ノ所在ニ就テ之ヲ訊問シ若ハ他ノ地方海員審判所ニ其ノ訊問ヲ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命審判官下調ヲ終リタルトキハ調査及一切ノ證憑ヲ審判所長ニ差出シ審判所長ハ直ニ之ヲ理事官ニ送付スヘシ
理事官ハ三日以内ニ意見ヲ付シ其ノ書類ヲ審判所長ニ還付スヘシ

第二十六條 地方海員審判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ審判ヲ繼續スルヤ否ヤヲ決定スヘシ

審判ヲ繼續スヘシト決定スルトキハ審判期日ヲ定メ被審人ヲ呼出スヘシ
審判ヲ繼續セスト決定スルトキハ被審人ヲ放免スヘシ

第二十七條 審判ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ地方海員審判所ノ決定ニ依リ其ノ公開ヲ停止ス

第二十八條 第二十一條乃至第二十四條ハ地方海員審判所ノ審判ノ場合ニモ亦之ヲ適用ス

第二十九條 開廷中秩序ノ維持ハ審判長ニ屬ス審判長ハ審判ヲ妨クル者又ハ不當ノ言語ヲ發スル者ヲ退廷セシムルコトヲ得

第三十條 被審人及證人ノ訊問ハ審判長之ヲ爲ス

審判官及理事官ハ審判長ニ告ケ被審人及證人ヲ訊問スルコトヲ得

第三十一條 理事官ハ審判ニ立會ヒ其ノ意見ヲ述ブルコトヲ得

第三十二條 被審人ハ補佐人ヲ用ウルコトヲ得但シ地方海員審判所ノ認許シタル者ニ限ル

第三十三條 地方海員審判所ハ呼出ヲ受ケタル被審人審判期日ニ出頭セザルトキハ闕席裁決ヲ爲ス

ヘシ但シ被審人疾病其ノ他ノ故障ニ依リ審判ヲ行フコト能ハサルトキハ決定ヲ以テ其ノ審判ヲ延期又ハ中止スルコトヲ得

第三十四條 刑事裁判手續中ハ被審人ニ對シ審判ヲ開始スルコトヲ得ス

被審人刑事訴訟ヲ受ケタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ審判ヲ中止スヘシ

第三十五條 理事官及被審人ハ本案ノ裁決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ審判ヲ行フヘカラサルノ申立ヲ爲スコトヲ得

地方海員審判所ハ職權ヲ以テ管轄違又ハ審判ヲ行フヘカラサルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第三十六條 地方海員審判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ裁決ヲ待タス直ニ高等海員審判所ニ控告スルコトヲ得

第三十七條 裁決ニハ其ノ理由及證憑ヲ明示スヘシ

第三十八條 裁決及裁決始末書ノ原本ハ審判ヲ爲シタル地方海員審判所之ヲ保存スヘシ

第五章 高等海員審判所ノ審判

第三十九條 理事官及被審人ハ地方海員審判所ノ裁決ニ對シ高等海員審判所ニ控告スルコトヲ得

第四十條 控告ノ期間ハ裁決言渡アリタル日ヨリ七日トス

闕席裁決ニ對スル控告ノ期間ハ被審人自ラ裁決ノ送達ヲ受ケタル日ヨリ十四日トス

第四十一條 控告ヲ爲スニハ其ノ申立書ヲ原地方海員審判所ニ差出スヘシ

原地方海員審判所ハ直ニ該申立書及一件書類ヲ高等海員審判所ニ送付スヘシ

第四十二條 高等海員審判所ノ審判ニ付テハ地方海員審判所ノ審判ニ關スル規程ヲ適用ス

第四十三條 高等海員審判所ハ控告ヲ理由アリトスルトキハ原裁決ヲ取消シ更ニ裁決ヲ爲スヘシ

控告ヲ理由ナシトスルトキハ裁決ヲ以テ之ヲ棄却スヘシ

第六章 執行處分

第四十四條 懲戒ハ裁決確定ノ後之ヲ執行ス

第四十五條 免狀行使ノ禁止ヲ言渡シタルトキハ其ノ審判ヲ爲シタル海員審判所ニ於テ免狀ヲ取上ケ選信省ニ送付スヘシ

免狀行使ノ停止ヲ言渡シタルトキハ其ノ審判ヲ爲シタル海員審判所ニ於テ免狀ヲ取上ケ期間満了ノ後之ヲ本人ニ還付スヘシ

免狀行使ノ禁止若ハ停止ヲ言渡サレタル者海員審判所ニ免狀ヲ差出ササルトキハ海員審判所ハ其ノ免狀ヲ無効ト爲シ官報ニ告示スヘシ

第七章 罰則

第四十六條 海員審判所又ハ受命審判官ヨリ證人トシテ呼出サレタル者及鑑定又ハ通事ノ爲呼出サレタル者正當ノ理由ナクシテ呼出ニ應ゼス若ハ其ノ義務ヲ盡ササルトキハ二回以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十七條 證人トシテ海員審判所ニ呼出サレタル者偽證ヲ爲シタルトキ及鑑定又ハ通事ノ爲海員審判所ニ呼出サレタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者亦同シ前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ裁決言渡ニ至ラサル前ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

附則

第四十八條 此ノ法律ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第四十九條 海員審判所ノ事務章程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十條 此ノ法律施行ノ際西洋形船舶長運轉手機關手免狀規則第十條ニ依リ審問中ノ事件ハ此ノ法律ニ依リ管轄權ヲ有スル地方海員審判所ノ管轄トス其ノ既ニ審問ノ判定ヲ受ケタルモノハ第五章ノ規程ニ依リ高等海員審判所ニ控訴スルコトヲ得

○水先法

明治九年十二月第五十四號布告ヲ以テ西洋形船舶水先免狀規則ヲ制定ス●十一月第三十七號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス●三十二年三月法律第六十三號ヲ以テ水先法ヲ定ム西洋形船舶水先免狀規則ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル水先法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

水先法

第一條 水先人ハ水先免狀ヲ有スルコトヲ要ス

水先人ニアラサル者ハ水先區ニ於テ船舶ノ水路ヲ嚮導スルコトヲ得ス

第二條 水先免狀ハ左ノ條件ヲ具備スル者ニ授與ス

- 一 帝國臣民ナルコト
- 二 主務大臣ノ定ムル試験規定ニ依リ試験ニ合格シタルコト

三十二年同省令第三十四號ヲ以テ水先法施行細則ヲ定ム

三 水先人名簿ニ登録セラレタルコト
 第三條 左ノ各號ニ該當スル者ハ水先人タルコトヲ得ス
 一 滿二十三年ニ達セザル者及滿六十年以上ノ者
 二 剝奪公權者
 三 家資分取者及破産者
 四 瘋癲白痴者及身體不具又ハ麻弱ニシテ業務ヲ營ムニ不適當ナル者
 五 水先免狀ノ行使ヲ禁止セラレタル者
 第四條 水先人ハ左ノ各號ニ該當スル場合ニ於テハ其ノ業務ヲ營ムコトヲ得ス
 一 公權ヲ行フコトヲ停止セラレタルトキ
 二 水先免狀ノ行使ヲ停止若ハ假停止セラレ又ハ之ヲ差押ヘラレタルトキ
 第五條 水先人其ノ業務ニ従事スルトキハ水先免狀及水先法令書ヲ携帯スヘシ
 水先人ハ當該官吏若ハ公吏ノ命令ニ依リ又ハ水先人ヲ要招シタル船長ノ要求ニ依リ水先免狀又ハ水先法令書ヲ開示スヘシ
 第六條 水先人其ノ業務ニ従事スル爲水先船ニ乗込ミタルトキハ晝間ニ在リテハ水先旗ヲ掲揚シ夜間ニ在リテハ海上衝突豫防法第八條ノ規定ニ依ルヘシ
 第七條 水先人ヲ要招セントスルトキハ船長ハ水先信號ヲ爲スヘシ
 第八條 水先人水先信號ヲ認メタルトキハ直ニ要招ニ應スヘシ

二艘以上ノ船舶ニ於テ同時ニ水先信號ヲ爲シタルトキハ水先人ハ自己ニ最モ近キ船舶ノ要招ニ應スヘシ
 二艘以上ノ船舶ニ於テ同時ニ水先信號ヲ爲シタル場合ニ於テ其ノ中ニ危難ニ罹リタル船舶アルトキハ水先人ハ前項ノ規定ニ拘ラス該船舶ノ要招ニ應スヘシ
 第九條 二人以上ノ水先人同時ニ要招ニ應シタルトキハ其ノ何トシテ水路ヲ嚮導セシムルヘキカハ船長ノ選擇スル所ニ依ル
 第十條 水先人水路ヲ去リタルトキハ水先旗ヲ撤去スヘシ
 第十一條 水先人水路ヲ嚮導スヘキ船舶ニ乗込ミタルトキハ其ノ氏名及水先人タルコトヲ船長ニ告知スヘシ
 第十二條 水先人水路ヲ嚮導スヘキ船舶ニ乗込ミタルトキハ船長ハ水先信號ヲ撤去シ船舶ノ名稱、船舶所有者ノ氏名、船籍港、積量及喫水ヲ水先人ニ告知シ且水先人ノ要求アルトキハ其ノ證明書類ヲ開示スヘシ
 第十三條 水先人ハ同時ニ二艘以上ノ船舶ノ水路ヲ嚮導スルコトヲ得ス但シ船舶ノ運航ノ自由ヲ得ス又ハ水先人ヲ得ル能ハサル爲其ノ船舶ト水路ヲ嚮導スヘキ船舶ト曳綱ヲ以テ聯結セラレタルトキハ此ノ限ニアラス
 第十四條 水先人水路ヲ嚮導シタルトキハ船長ニ對シ水先案内料ヲ請求スル權利ヲ有ス
 前條但書ノ場合ニ於テハ水先人ハ各艘ノ船舶ニ付前項ノ權利ヲ有ス

第十五條 水先案内料ハ命令ヲ以テ定ムル額ヲ超過スルコトヲ得ス

第十六條 水先人ハ水先修業生一名ニ限り水路ヲ嚮導スルハキ船舶ニ之ヲ伴フコトヲ得但シ二名以上ヲ伴フントスルトキハ船長ノ承諾ヲ經ヘシ

第十七條 水先區ハ水先旗ノ様式及水先信號ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 主務大臣ハ水先區ヲ指定シテ水先人ノ員數ヲ制限シ水先人組合ヲ設ケシメ又ハ水先船ノ免狀及服裝ニ關シ必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

水先人組合ハ規約ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十九條 水先人其ノ業務ニ從事スルニ當リ左ノ各號ニ該當スル場合ニ於テハ海員審判所ハ裁決ヲ以テ之ヲ懲戒ス

一 過失、懈怠又ハ不當ノ行爲ニ因リ船舶ニ損害ヲ加ヘ又ハ之ヲ沈没セシメタルトキ

二 過失、怠懈又ハ不當ノ行爲ニ因リ人ヲ死傷ニ致シタルトキ

三 業務ヲ怠リ又ハ業務上ノ義務ニ違反シタルトキ

四 亂醉、粗暴其ノ他ノ失行アリタルトキ

水先人組合ニ屬スル水先人其ノ組合規約中命令ノ規定ニ依リ懲戒ニ付スヘキ事項ニ違反シタルトキ亦前項ニ同シ

第二十條 前條ニ依リ審判ニ付スヘキ事件ノ管轄ハ其ノ水先人ノ住所ヲ管轄スル地方海員審判所ニ屬ス
前項ノ事件海員懲戒法ノ規定ニ依リ審判ニ付スヘキ事件ト關聯スルトキハ前項ノ管轄ハ海員懲戒

法ニ依ル事件ヲ管轄スル地方海員審判所ニ屬ス

第二十一條 水先人ノ懲戒ニ關シ此ノ法律ニ規定ナキモノニ付テハ海員懲戒法ノ規定ヲ準用ス

第二十二條 水先人其ノ業務ヲ怠リ因テ船舶ヲ毀損シ若ハ之ヲ沈没セシメ又ハ人ヲ死傷ニ致シタルトキハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五十圓以上六百圓以下ノ罰金ニ處ス

水先人ニアラサル者水先區ニ於テ水路ヲ嚮導シ因テ船舶ヲ毀損シ若ハ之ヲ沈没セシメ又ハ人ヲ死傷ニ致シタルトキ亦前項ニ同シ

第二十三條 左ノ各號ニ該當スル者ハ二圓以上二百五十圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第四條ノ規定ニ違反シテ水先人ノ業務ヲ營ミタル者及之ヲシテ水路ヲ嚮導セシメタル者

二 第八條第二項第三項又ハ第十三條ノ規定ニ違反シタル者

三 第十五條ノ規定ニ違反シテ水先案内料ヲ授受シタル者

四 水先免狀ヲ貸付シ之ヲ行使セシメタル者

五 詐偽ノ目的ヲ以テ船舶ノ喫水若ハ積量ニ付水先人ニ對シ不實ノ告知ヲ爲シ又ハ喫水ノ標識ヲ變更シタル者

六 水路ノ嚮導ヲ要求セラレタル場合ニ於テ正當ノ理由ナクシテ之ニ應セサル者又ハ之ニ應シタルモ正當ノ理由ナクシテ水路ヲ嚮導セサル者

七 水路ノ嚮導ヲ要求シタル場合ニ於テ正當ノ理由ナクシテ水先人ヲシテ水路ヲ嚮導セシメス又ハ正當ノ理由ナクシテ水先人ヲ水先區外ニ伴ヒタル者

八 水先人ニアラスシテ水先區ニ於テ水路ヲ嚮導シタル者

第二十四條 左ノ各號ニ該當スル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第五條第六條第十條第十一條又ハ第十二條ノ規定ニ違反シタル者

二 水先人ヲ要招スル爲ニアラスシテ水先信號又ハ之ト誤認シ易キ信號ヲ爲シタル者

三 水先人第十六條ノ規定ニ依リ水先修業生ヲ伴ヒタル場合ニ於テ之ヲ拒ミタル者又ハ同條但書ノ規定ニ違反シテ水先修業生ヲ伴ヒタル者

四 第十八條第一項ニ依リ定ムル規定ニ從ヒテ水先船ヲ齎裝セス又ハ水先船免狀ヲ有セスシテ水先船ヲ使用シタル者

五 水先人ニアラスシテ水先旗若ハ之ト誤認シ易キ旗ヲ船舶ニ掲揚シ又ハ海上衝突豫防法第八條ノ照燈及信號ヲ爲シタル者

六 水先人ニアラスシテ第十八條第一項ニ依リ定ムル規定ニ從ヒテ齎裝シタル水先船又ハ之ト誤認シ易キ船舶ヲ使用シタル者

第二十五條 船長水先區ニ於テ水先人ニアラサル者ヲシテ水路ヲ嚮導セシメタルトキハ命令ヲ以テ定メタル當該水先區ノ水先案内料ト同額以上二倍以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 水路ヲ嚮導セシメサレハ航行危險ナル場合ニ於テ水先人ヲ得ル能ハサルカ爲水先人ニアラサル者ヲシテ水路ヲ嚮導セシメタルモノナルトキハ前條及第二十三條第八號ノ規定ヲ適用セス

第二十七條 此ノ法律中船長ニ關スル規定ハ船長ニ代ハリテ其ノ職務ヲ行フ者ニ亦之ヲ適用ス

附則

第三十二年勅令
第三百五十六號
明治十一年八月四日
施行ス

第二十八條 此ノ法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十九條 明治十一年第三十七號布告ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第三十條 明治十一年第三十七號布告ニ依リテ授與シタル水先免狀ハ主務大臣ノ定ムル所ニ從ヒ此ノ法律ニ依リテ授與スル水先免狀ト交換ス

前項ノ交換ヲ了スルマテハ舊水先免狀ハ該免狀ニ記載スル水先區中此ノ法律ニ依リテ定メタル水先區ニ該當スル部分ニ限リ之ヲ代用スルコトヲ得

舊水先免狀ヲ有スル者第三條ノ各號ニ該當スルトキハ前二項ノ規定ヲ適用セス

第三十一條 此ノ法律施行前ヨリ其ノ施行後マテ引續キ水路ヲ嚮導スル場合ニ於テハ水先案内料ハ明治十一年第三十七號布告ニ依リテ之ヲ算定スヘシ

第三十二條 第十九條、第二十條及第二十一條ノ規定ハ左ノ各號ニ該當スル場合ニ於テ亦之ヲ適用ス
一 明治十一年第三十七號布告ニ依リテ審問ヲ要スルモノニシテ此ノ法律ニ依リ懲戒スヘキ行爲此ノ法律施行前ニ發生シ其ノ施行後ニ至リテ發覺シタルトキ

二 前號ノ行爲此ノ法律施行ノ際審問中ナルトキ

第三十三條 此ノ法律施行後五年間ヲ限リ主務大臣ハ第二條第一號ノ規定ニ拘ラス水先免狀ヲ授與スルコトヲ得
前項ニ依リ授與シタル水先免狀ハ前項ノ期間滿了ノ後ト雖其ノ効力ヲ失フコトナシ

○航海獎勵法(明治三十五年三月)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル航海獎勵法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

二十九年度
省令第十五號
施行細則ヲ定

航海獎勵法

- 第一條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員若ハ株主トスル商事會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ帝國ト外國トノ間又ハ外國諸港ノ間ニ於テ貨物、旅客ノ運搬ヲ營業トスル者ニハ此ノ法律ノ規程ニ依リ其ノ船舶ニ對シ航海獎勵金ヲ下付ス
- 第二條 此ノ法律ニ依リ航海獎勵金ヲ受クヘキ船舶ハ總噸數一千噸以上ニシテ一時間十海里以上ノ最速速力ヲ有シ遞信大臣ノ定ムル造船規程ニ合格シタル鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ル
- 第三條 航海獎勵金ヲ受ケムトスル船舶ノ所有者ハ其ノ船舶ニ對シ豫メ遞信大臣ノ認許ヲ受タヘシ
- 第四條 左ノ船舶ハ航海獎勵金ヲ受クルコトヲ得ス
 - 第一 此ノ法律施行以後帝國船籍ニ登録ノ際製造後五箇年ヲ經過シタル外國製造ノ船舶
 - 第二 製造後十五箇年ヲ經過シタル船舶
 - 第三 帝國政府ノ命令ニ依レル航路ニ使用スル船舶
 - 第五條 航海獎勵金ハ總噸數一千噸ニシテ一時間十海里ノ最速速力ヲ有スル船舶ニ對シ總噸數一噸航海里數一千海里ニ付二十五錢ヲ支給シ總噸數五百噸ヲ増ス毎ニ其ノ百分ノ十、最速速力一時間一海里ヲ増ス毎ニ其ノ百分ノ二十ヲ増給ス但シ總噸數六千五百噸以上又ハ最速速力一時間十八海里

以上ノ船舶ニ對シテハ總噸數六千噸又ハ最速速力一時間十七海里ノ船舶ニ對スル割合ニ依リ支給ス航海獎勵金ハ製造後五箇年ヲ經過セサル船舶ニ對シテハ全額ヲ支給シ五箇年ヲ經過シタル船舶ニ對シテハ一年毎ニ其ノ百分ノ五ヲ遞減ス

明治三十二年十月一日以後帝國船籍ニ登録スル外國製造ノ船舶ニハ前二項ノ規定ニ依リ支給スヘキ航海獎勵金ノ半額ヲ支給ス(三十二年非特第九十號ヲ以テ本項追加)

航海獎勵金ヲ算定スルニハ一噸未満一海里未満ノ端數ヲ算入セス

第六條 航海里數ハ各港間ノ最近航路ニ依リ之ヲ算定ス帝國各港ヘ寄港シ外國ヘ發航スル船舶ニ在テハ最終ノ寄港地ヲ起點トシ又外國ヨリ發航シ帝國各港ニ寄港スル船舶ニ在テハ最初ノ寄港地ヲ終點トシテ其ノ航海里數ヲ算定ス

第七條 遞信大臣ハ命令ヲ發シ相當ノ金額ヲ給與シテ第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ヲ公用ノ爲ニ使用スルコトヲ得

船舶所有者前項ノ給與金額ニ對シ不服アルトキハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ出訴ハ使用ヲ停止セス
第八條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ遞信大臣ノ命令ニ依リ左ノ割合以内ニ於テ其ノ費用ヲ以テ航海修業生ヲ該船舶ニ乗組マシメ同大臣ノ定ムル手當ヲ支給スヘシ
總噸數一千噸以上二千五百噸未満 二人

總噸數二千五百噸以上四千噸未滿
總噸數四千噸以上

三人
四人

第九條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ遞信大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ外國人ヲ其ノ本支店ノ事務員若ハ該船舶ノ職員ト爲スコトヲ得ス但シ外國ニ於テ死亡其ノ他止ムヲ得サル事故ニ因リ船舶職員ニ缺員ヲ生シタルトキハ該地官廳ノ公認ヲ經テ之ヲ補フコトヲ得此ノ場合ニ於テハ該船舶ノ所有者又ハ船長ヨリ直ニ遞信大臣ノ許可ヲ請フヘシ

第十條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者航海獎勵金ヲ受ケ航海スル場合ニ於テハ遞信大臣ノ命令ニ從ヒ該船舶ニ郵便吏員ヲ無賃乗船セシメ及該船舶ヲ以テ郵便物、小包郵便物、郵便用品及小包郵便用品ヲ無料ニテ遞送スヘシ

第十一條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ハ航海獎勵金ヲ受ケ航海スル期間並其ノ航海ヲ終リタル日ヨリ三箇年間其ノ船舶ヲ外國人ニ賣渡、貸渡、交換、贈與、質入、書入スルコトヲ得ス但シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル航海獎勵金ヲ償還シタルトキ又ハ天災其ノ他抗拒スヘカラサル強制ニ因リ航行ニ堪ヘサルトキ若ハ遞信大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十二條 遞信大臣ハ此ノ法律ニ依リ船舶所有者ノ義務ニ屬スル事項ニ付テハ直ニ其ノ代人若ハ船長ニ命令ヲ下スコトヲ得

第十三條 詐偽ノ所爲ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル者又ハ第十一條ノ規程ニ違背シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百圓以上千圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯サムトシテ未ダ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リ處斷ス

第十四條 此ノ法律ニ依リ遞信大臣ノ發スル命令又ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪併發ノ例ヲ用非ス

第十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル者ハ其ノ因テ得タル金額ヲ償還セシメ第十一條ノ規程ニ違背シタル者ハ其ノ既ニ受ケタル航海獎勵金ヲ償還セシム

第十七條 船舶所有者若ハ此ノ法律ヲ犯シタルトキハ遞信大臣ハ航海獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得

第十二條ノ場合ニ於テ其ノ代人又ハ船長ノ犯シタルトキ亦同シ

第十八條 前數條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ各條ニ掲クル所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員若ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第十九條 此ノ法律ハ明治二十九年十月一日ヨリ十八箇年間之ヲ施行ス(三十二年法律第九十六號ヲ以テ十八箇年間之ヲノ七字ヲ加フ)

○ 造船獎勵法 明治二十九年三月 法律第十六號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル造船獎勵法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

造船獎勵法

第一條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員若ハ株主トスル商事會社ニシテ遞信大臣ノ定ムル資格ヲ

二十九年度省令第十六號
施行細則ヲ定
二十九年度省令第十七號

備フル造船所ヲ設ケ船舶ヲ製造スル者ニハ此ノ法律ノ規程ニ依リ其ノ製造船舶ニ對シ造船獎勵金ヲ下付ス

第二條 此ノ法律ニ依リ造船獎勵金ヲ受クヘキ船舶ハ鐵製又ハ鋼製ニシテ總噸數七百噸以上ヲ有シ遞信大臣ノ定ムル造船規程ニ從ヒ其ノ監督ヲ受ケ製造シタルモノニ限ル

第三條 造船獎勵金ハ總噸數七百噸以上一千噸未満ノ船舶ニ在テハ船體總噸數一噸ニ付金十二圓、一千噸以上ノ船舶ニ在テハ一噸ニ付金二十圓ヲ支給シ其ノ機關ヲ併セ製造シタル場合ニハ一實馬力ニ付金五圓ヲ増給ス但シ帝國内ノ他ノ工場ニ於テ機關ヲ製造セシメタルトキト雖深メ遞信大臣ノ許可ヲ得タルトキ亦同シ

第四條 造船獎勵金ヲ受クヘキ船舶ノ船體及機關ニハ遞信大臣ノ定ムル規程ニ依ルノ外外國製品ヲ供用スルコトヲ得ス

第五條 詐偽ノ所爲ヲ以テ造船獎勵金ヲ受ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百圓以上千圓以下ノ罰金ヲ附加ス其ノ因テ得タル造船獎勵金ハ之ヲ償還セシム

前項ノ罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リ處斷ス

第六條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第七條 前二條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員若ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第八條 此ノ法律ハ明治二十九年十月一日ヨリ十五箇年間之ヲ施行ス

二十八年陸軍省令第十七號ニ以テ陸地測量條例施行細則ヲ定ム

○ 陸地測量條例 明治二十三年三月 法律第二十三號

沿革略記 明治二十一年七月勅令第五十八號ヲ以テ測量規則ヲ定ム●二十三年三月法律第二十三號ヲ以テ陸地測量條例ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕陸地測量條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸地測量條例

第一條 本條例中測量標ト稱スルモノハ三角點標石、水準標石、規標、標杭、測旗、假杭トス

第二條 陸地測量部ニ於テ宅地ニアラサル民有地ニ測量標ヲ設置スル爲メ敷地ヲ要スルトキハ所有者之ヲ拒ムコトヲ得ス又官有地第三種第一項第五項第六項第七項第八項ノ土地ニ在テハ所管廳ニ通知シテ之ヲ使用スルコトヲ得

官有地第二種第三種第二項第三項第四項第五種ノ土地及ヒ民有宅地内ト雖モ己ムヲ得ザル場合ニ於テハ測旗假杭ニ限リ前項ニ準シテ之ヲ設置スルコトヲ得

第三條 民有地ニ標石ヲ設置スルトキハ其敷地ヲ買上クヘシ但所有者ニ於テ其土地ヲ寄附シ又ハ借地料ヲ要セス永遠貸地トナサンコトヲ望ムトキハ格別トス

第四條 民有地ニ規標及ヒ標杭ヲ設置シタルトキハ宅地ニ在テハ相當ノ借地料ヲ給シ田畑鹽田鐵泉地ニ在テハ一箇年一坪ニ付金三錢其他ニ在テハ同金一錢ノ割ヲ以テ借地料ヲ給ス但所有者ニ於テ其土地ヲ寄附シ又ハ借地料ヲ要セス貸地トナサンコトヲ望ムトキハ格別トス

第五條 測量主任官測量ノ爲メ官有地第二種第三種第二項第三項第四項第四種ノ土地及ヒ民有宅地内若クハ塙垣籬柵内ニ立入ラントスルトキハ先ツ其所管廳又ハ所有者ニ通知スヘシ但官有地第三種第一項第五項第六項第七項第八項ノ土地並宅地ニアラサル民有地及ヒ所有者又ハ管理人ノ所在遠隔スル田畑等ノ垣柵内ニ在テハ直ニ立入ルコトヲ得此場合ニ於テハ主任官タルノ證票ヲ携帶スヘシ

第六條 官有地第三種第一項ノ土地及ヒ宅地ニアラサル民有地内ニ於テ測量施行ノ爲メ障トナル竹木ハ已ムヲ得サルモノニ限リ之ヲ伐除シ又樹上ニ規標ヲ設置スルコトヲ得此場合ニ於テハ相當ノ補償ヲナスヘシ

第七條 測量施行ノ爲メ塙垣籬柵等又ハ植物ヲ毀損シタルトキハ相當ノ補償ヲナスヘシ

第八條 第三條ノ敷地買上料第四條ノ宅地借地料及ヒ第六條第七條ノ補償金額ニ付所有者ト協議調ハサルトキハ市町村長ヲシテ之ヲ評定セシム

市町村長ノ評定ニ服セサル者ハ其評定ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ一箇月以内ニ裁判所ニ出訴スルコト得

第九條 標石ハ諸測量ノ基準點トシテ官民共ニ使用スルコトヲ得

第十條 標石ヲ移轉シ若クハ毀壞シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 規標及ヒ標杭ヲ移轉シ若クハ毀壞シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 測旗及ヒ假杭ヲ移轉シ若クハ毀壞シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十三條 過誤ニ由リ測量標ヲ毀壞シ又ハ之ニ瓦礫其他ノ雜物ヲ擲チ獸類ヲ繫キ繩索ノ類ヲ懸ケ或ハ貼紙シ或ハ戲書シ其他惡戯ヲ爲シタル者ハ五圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十四條 本條例施行ノ細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム

附則

第十五條 本條例中市制町村制ノ實施ニ至ラサル地方ニ在テハ市町村長ノ職務ハ區戸長ヲシテ之ヲ行ハシム

○ 水路測量標條例

明治二十三年五月 法律第三十八號
沿革略記 明治二十一年七月勅令第五十八號ヲ以テ測量標規則ヲ定ム○二十三年五月法律三十八號ヲ以テ水路測量標條例ヲ定ム是レ現行註ナリ

水路測量標條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

水路測量標條例

第一條 本條例中測量標ト稱スルモノハ基點標測標トス

第二條 水路測量官ニ於テ民有地ニ測量標ヲ設置スル爲メ敷地ヲ要スルトキハ所有者ト協議ノ上之ヲ使用スヘシ又官有地第三種第一項第五項第六項第七項第八項ノ土地ニ在テハ所管廳ニ通知シテ之ヲ使用スルコトヲ得

第三條 水路測量官測量ノ爲メ官有地第二種第三種第二項第三項第四項第四種及ヒ民有宅地内若クハ牆垣籬柵内ニ立入ラントスルトキハ先ツ其所管轄又ハ所有者ニ通知スヘシ但官有地第三種第一項第五項第六項第七項第八項ノ土地並宅地ニアラサル民有地及ヒ所有者又ハ管理人ノ所在遠隔スル田畑等ノ垣柵内ニ在テハ直ニ立入ルコトヲ得此場合ニ於テハ測量官タルノ證票ヲ携帶スヘシ

第四條 測量施行ノ爲メ障礙トナル竹木ヲ己ムヲ得ス伐除シ又牆垣籬柵植物等ヲ毀損シタルトキハ所有者ト協議シ相當ノ補償ヲナスヘシ

第五條 其點標ヲ移轉シ若クハ毀壞シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條 測標ヲ移轉シ若クハ毀壞シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 過誤ニ由リ測量標ヲ毀壞シ又ハ之ニ瓦礫其他ノ雜物ヲ擲テ獸類ヲ繫キ繩索ノ類ヲ設ケ或ハ貼紙シ或ハ戲書シ其他惡戯ヲ爲シタル者ハ五圓以上一圓九十五圓以下ノ科料ニ處ス

○ 航路標識條例 明治二十一年十月

朕航路標識條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

航路標識條例

第一條 航路標識ハ航路ノ安寧ヲ保護スル爲メ政府ニ於テ之ヲ設置スルモノトス

二十二年
省令
以テ
航路
標識
條例
ヲ
制定
ス
二十二年
省令
以テ
航路
標識
條例
ヲ
制定
ス
二十二年
省令
以テ
航路
標識
條例
ヲ
制定
ス
二十二年
省令
以テ
航路
標識
條例
ヲ
制定
ス

第二條 土地ノ形狀又ハ情況ニ由リテハ地方税又ハ區町村費ヲ以テ航路標識ヲ設置スルコトヲ得此場合ニ於テハ地方長官ニ於テ遞信大臣ノ許可ヲ受クヘシ

從來私設ノ航路標識ハ免許年限間之ヲ繼續スルコトヲ得

遞信大臣ニ於テ前二項ノ航路標識不完全ニシテ危害アリト認メタルトキハ之ヲ變更又ハ撤去セシムルコトヲ得

政府ニ於テ直接管理ヲ必要トスルトキハ相當ノ價格ヲ以テ第一項第二項ノ航路標識ヲ買上ルコトヲ得

第三條 航路標識ヲ損壞シ又ハ移轉シ又ハ其性質ヲ變更シ又ハ之ヲ蔽遮スヘキ所爲ヲナシ又ハ遞信大臣ノ指定シタル區域内ニ於テ航路標識ノ燈光若クハ警號ト誤認シ易キ所爲ヲナシタル者ハ十一日以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條 航路標識ニ船筏其他ノ物ヲ繫キ又ハ衝突セシメ又ハ禁躋シ又ハ之ヲ汚穢シタル者ハ五圓以上一圓九十五圓以下ノ科料ニ處ス

三十二年農商務省令第三號
以テ施行細則ヲ定ム

○鑛業條例 明治二十三年九月法律第八十七號

沿革略記 明治元年四月鑛山ノ銅ヲ初メ古銅地鑛等大阪鑛會所へ運送セシメ坑業者私ニ賣却キ仕用スルヲ禁ス○同年七月鑛山ノ金銀銅鐵ヲ鑛山局へ買收シ人民需用ノトキハ同局へ開申セシム○二年二月鑛山開採ハ其地ノ人民ニ故障ナケレハ出願ノ上掘出スルヲ許ス且金銀銅其時ノ相場ヲ以テ賣買スルヲ許シ掘出數量ハ各縣縣ヨリ届出シム○同年十一月新貨鑄造ニ由リ鑛山ノ金銀銅ヲ大藏省ニ買收シ悉ニ賣買スルヲ禁ス○四年四月鑛山開採請負ヲ出願シ許可スルモノハ相當ノ稅ヲ納メシム○同年七月前キノ金銀銅勝手賣買ノ禁ヲ解キ且少年ヲ鑛物採出高ヲ開申セシム○五年三月前百號ヲ以テ鑛山心得書ヲ頒布ス○六年七月第二百五十九號布告ヲ以テ鑛其他諸坑業ノ規則ヲ改メ日本坑法ヲ制定ス○二十三年九月法律第八十七號ヲ以テ鑛業條例ヲ制定シ廿五年六月一日ヨリ施行シ同日限リ日本坑法ヲ廢止ス是レ現行法ナリ

朕鑛業條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鑛業條例

第一章 總 則

第一條 鑛業トハ鑛物ノ試掘採掘及之ニ附屬スル事業ヲ謂フ

第二條 鑛物ノ未タ採掘セサルモノハ國ノ所有トス

此ノ條例ニ於テ鑛物トハ金鑛(砂金ヲ除ク)銀鑛、銅鑛、鉛鑛、錫鑛、鋅鑛(砂鋅ヲ除ク)安質母尼鑛、水銀鑛、亞鉛鑛、鐵鑛(砂鐵ヲ除ク)硫化鐵鑛、格魯謨鐵鑛、瀉奄鑛、砒鑛、燐鑛、黑鉛、石炭、亞炭、石油、土瘞膏及硫黃ヲ謂フ(三十三年法律第七十四號ヲ以テ本項中追加)

第三條 帝國臣民又ハ帝國法律ニ從ヒ設立シタル會社ニ非レハ鑛業人トナルコトヲ得ス(三十三年法律第七十四號ヲ以テ改正)

第四條 農商務省鑛山局及鑛山監督署ノ官吏ハ在職中鑛業人トナリ又ハ鑛業ニ關スル組合員又ハ會社ノ株主若ハ役員トナルコトヲ得ス

第五條 此ノ條例ニ依リ鑛業特許取消ノ處分ヲ受ケタル鑛業人ハ同鑛區ニ付一箇年間採掘ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス

第六條 二人以上共同シテ鑛業ヲ爲ストキハ總代一名ヲ選定シ豫メ所轄鑛山監督署ニ届出ツヘシ總代ハ鑛業上ニ關シ政府ニ對シテ共同鑛業人ヲ代表スルモノトス

第七條 共同鑛業人ノ變更採掘權ノ賣買、讓與、書入及廢業届等ニハ總代ノ外少クモ共同鑛業人過半數ノ連署ヲ要ス

第二章 試掘及採掘

第八條 試掘ヲ爲サント欲スル者ハ其ノ願書ニ試掘地ノ圖面ヲ添ヘ所轄鑛山監督署長ニ差出シ其ノ認可ヲ受クヘシ

第九條 試掘ハ認可ノ日ヨリ一箇年ヲ限トス

試掘人前項ノ期限内ニ於テ其ノ事業ヲ竣ヘ難キ事實アルトキハ所轄鑛山監督署長ニ延期ヲ出願スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ハ其ノ事實ヲ調査シ己ムヲ得サルモノト認ムルトキハ一箇年以内ノ延期ヲ認可スルコトヲ得

第十條 試掘ニ依リ採取シタル鑛物ハ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ得テ之ヲ販賣スルコトヲ得

第十一條 前條ニ依リ鑛物ヲ販賣シタルトキハ三十日以内ニ其ノ販賣代價百分ノ一ヲ所轄鑛山監督署ニ納ムヘシ

前項ノ金額ヲ其ノ期限内ニ納メサル者ハ國稅滯納處分法ニ依リ處分ス

第十二條 採掘ノ特許ヲ得ント欲スル者ハ採掘願書ニ鑛區圖ヲ添ヘ農商務大臣宛ニテ所轄鑛山監督署ニ差出スヘシ

採掘願書及鑛區圖ヲ同時ニ差出シ難キトキハ願書ノミヲ差出シ置キ鑛區圖ハ願書ノ日付ヨリ五日以内ニ之ヲ差出スコトヲ得此ノ期限内ニ差出サルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第十三條 採掘ヲ出願スル者ハ出願地ニ其ノ採掘セントスル鑛物ノ存在スルコトヲ證明スヘシ

第十四條 鑛山監督署長ハ鑛物ノ存在ヲ認定スル爲ニ吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト認ムルトキハ採掘出願人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ旅費日當ヲ前納セムヘシ

採掘出願人前項旅費日當納付ノ通知ヲ受ケ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ納メサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第十五條 鑛山監督署ニ於テハ試掘及採掘出願登錄簿ヲ備ヘ置キ出願日時ノ先後ニ依リ之ヲ登錄ス第十六條 試掘又ハ採掘ノ出願同一ノ地ニ付キ二人以上アルトキハ出願日時ノ先後ニ依リ其ノ許否ヲ定ム

出願ノ日時同一ナルトキハ鑛山監督署長ハ其ノ旨ヲ各出願人ニ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ協議ヲ遂ケ出願人ヲ定ムヘシ若シ協議調ハサルトキハ其出願ヲ無効トス

出願ノ日時同一ニシテ試掘ト探掘トニ係ルトキハ先ツ探掘ノ出願ニ付其許否ヲ定ム

第十七條 農商務大臣探掘ノ特許ヲ與フヘキモノト認メタルトキハ鑛業特許證ヲ下付スヘシ

第十八條 試掘若ハ探掘ノ事業公益ヲ害スルト認ムルトキハ試掘ニ就テハ所轄鑛山監督署長、探掘ニ就テハ農商務大臣其ノ出願ヲ許可セス

第十九條 試掘若ハ探掘ノ事業公益ニ害アルトキハ試掘ニ就テハ所轄鑛山監督署長探掘ニ就テハ農商務大臣既ニ與ヘタル認可若ハ特許ヲ取消スコトヲ得

鑛業人前項取消ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但損害ノ賠償ヲ要求スルコトヲ得ス

第二十條 特許ヲ得タル鑛物ノ探掘權ハ賣買、讓與又ハ書入ヲ爲スコトヲ得

探掘權ヲ賣買、讓與スルトキハ雙方連署シ 所轄鑛山監督署ヲ經農商務大臣ニ出願シ鑛業特許證ノ書換ヲ受クヘシ此ノ手續ニ依ラサル賣買、讓與ハ法律上其ノ効ナキモノトス

探掘權ノ書入ハ雙方連署シ所轄鑛山監督署ノ登録ヲ受クヘシ其ノ登録ヲ受ケサルモノハ法律上其ノ効ナキモノトス

第二十一條 他人試掘ノ年限中ハ其ノ試掘地内ニ於テ同一ノ鑛物ニ付探掘ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條 他人ノ認可ヲ得タル試掘地内ニ於テ其ノ試掘人ノ未タ認可ヲ得サル鑛物ノ試掘又ハ探掘ヲ出願セント欲スル者ハ試掘人ノ承諾ヲ經ヘシ

試掘人自ラ試掘又ハ探掘ヲ出願セント欲スルカ若ハ其ノ認可ヲ得タル鑛物ノ試掘ニ妨害アルトキ

ノ外ハ試掘人ハ前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十三條 他人所屬ノ鑛区内ニ於テ其ノ鑛業人ノ未タ試掘ノ認可又ハ探掘ノ特許ヲ得サル鑛物ニ付試掘若ハ探掘ヲ出願セント欲スル者ハ鑛業人ノ承諾ヲ經ヘシ

鑛業人自ラ試掘又ハ探掘ヲ出願セント欲スルカ若ハ其ノ試掘又ハ探掘ノ爲ニ鑛業ニ妨害アルトキ

ノ外ハ鑛業人ハ前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十四條 宮城、離宮、神宮、皇陵、陸海軍所轄城堡、軍港、要港、火藥製造所、火藥庫及彈藥庫ノ周圍

三百間以内ノ場所ハ試掘又ハ探掘若ハ鑛業上使用スルコトヲ得ス但軍港、要港、其ノ鎮守府司令

長官ノ許可ヲ得タル場合ニ於テハ此ノ限ニアラス

第二十五條 鐵道、馬車鐵道、公道、河湖、堤防、沼池、社寺、墓地、公園地及建物ヨリ地表地下トモ其周

圍三十間以内ノ場所ニ於テハ所轄官廳若ハ所有者ノ承諾ヲ經ルニアラサレハ試掘又ハ探掘ヲ爲ス

コトヲ得ス但危險ノ虞ナキモノハ其ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十六條 鑛業人ハ毎年ノ鑛業施業案ヲ調製シ其ノ前年十月三十日限其ノ初年ニ係ルモノハ探掘

特許ノ日ヨリ三箇月以内ニ所轄鑛山監督署長ニ差出シ認可ヲ受クヘシ

前項ノ施業案ニシテ坑内ノ保安ニ害アリ又ハ其ノ鑛區ニ相當スル鑛業ヲ爲サ、ルモノト認メタル

トキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ理由ヲ鑛業人ニ示シ期限ヲ定メ之ヲ改正セシムヘシ

第二十七條 鑛業人ハ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ受ケタル鑛業施業案ニ依ルニアラサレハ探掘ヲ爲

スコトヲ得ス

第二十八條 鑛業人鑛業施業案又ハ其ノ改正案ヲ期限内ニ差出サ、ルトキハ農商務大臣ハ其ノ採掘ノ特許ヲ取消スコトヲ得

第二十九條 鑛業人一箇年以上休業シ又ハ採掘ノ特許ヲ得タル日ヨリ一箇年以内ニ鑛業ニ著手セサルトキハ農商務大臣ハ其ノ特許ヲ取消スコトヲ得

第三十條 前二條ノ場合ニシテ其ノ自己ノ過失ニ由ラサルモノハ特許取消ノ達ヲ受ケタル日ヨリ十日以内ニ其ノ理由ヲ農商務大臣ニ申立テ再願ヲ爲スコトヲ得若シ農商務大臣ニ於テ之ヲ拒ムトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十一條 鑛業人ハ坑内實測圖ニ葉ヲ調製シ一葉ハ所轄鑛山監督署ニ差出シ一葉ハ鑛業事務所ニ備ヘ置クヘシ

前項坑内實測圖ハ事業ノ進歩ニ從ヒ六箇月毎ニ進補スヘシ

鑛業人若シ他人ノ所屬ニ係ル隣接鑛區ノ坑内實測圖ニ付證明ヲ必要ト認ムルトキハ之ヲ所轄鑛山監督署長ニ請求スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ニ於テ右證明ノ爲ニ吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト認ムルトキハ鑛業人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ旅費日當ヲ前納セシムヘシ

第三十二條 鑛業人鑛業特許證ヲ毀損若ハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ所轄鑛山監督署ヲ經其ノ再下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

第三十三條 詐偽又ハ錯誤ニ由リ試掘ノ認可ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ

其ノ認可ヲ取消スヘシ若シ其ノ認可ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ其關係ヲ有スル者ハ認可ノ日ヨリ三箇月以内ニ試掘認可ノ取消ヲ所轄鑛山監督署長ニ訴願スルコトヲ得前項所轄鑛山監督署長ノ判定ニ不服アル者ハ其ノ判定ノ日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十四條 詐偽又ハ錯誤ニ由リ採掘ノ特許ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ特許ヲ取消スヘシ若シ其ノ特許ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ其ノ關係ヲ有スル者ハ特許ノ日ヨリ三十日以内ニ採掘特許ノ取消ヲ農商務大臣ニ訴願スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ不服アル者ハ其ノ裁定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十五條 第二十二條第二項及第二十三條第二項ノ場合ニ於テ理由ナクシテ承諾ヲ拒ミタルトキハ關係人又第二十五條但書ノ場合ニ於テ危險ノ虞ナクシテ承諾ヲ拒ミタルトキハ鑛業人ハ所轄鑛山監督署長ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

第三十六條 前條ノ判定ニ不服アル者ハ其ノ判定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ農商務大臣ノ裁定ヲ請求スルコトヲ得

第三十七條 鑛業人鑛業シタルトキハ其ノ旨ヲ所轄鑛山監督署ニ届出テ鑛業特許證ヲ返納スヘシ

第三十八條 第十九條第二十八條第二十九條第三十四條第四十三條及第七十六條ニ依リ農商務大臣ニ於テ採掘ノ特許ヲ取消シ又ハ第二十七條ニ依リ鑛業ノ届出ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ特許ヲ

得タル礦物ノ採掘權ニ對シ抵當權ヲ有スル債主ハ其ノ抵當權ヲ失フモ、但第十九條及第三十
四條ノ場合ヲ除クノ外債主ニ於テ六十日以内ニ其ノ礦區ヲ採掘ヲ願出ルトキハ出願ノ先後ニ拘
ラス特許ヲ與フヘシ

第三十九條 礦業人ハ毎年一月前年ニ採取シタル礦物ノ量數、製產物、其ノ販賣高、販賣代價、行業日
數及工數ヲ所轄鐵山監督署ニ届出ツヘシ

第四十條 礦業人ハ農商務大臣定ムル所ノ書式ニ依リ帳簿ヲ調製シ製產物ノ量數及販賣代價等ヲ記
載スヘシ

第三章 鐵區

第四十一條 鐵區トハ鐵物ノ採掘ヲ爲ス土地ノ區域ヲ謂フ

鐵區ノ境界ハ直線ヲ以テ之ヲ定メ地表境界線ノ直下ヲ限ラズ其ノ一鐵區ノ面積ハ石炭ハ一萬坪以
上其ノ他ノ鐵物ハ三千坪以上トシ共ニ六十萬坪ヲ超ユルコトヲ得ス

第四十二條 出願ニ係ル鐵區ノ位置形狀、鐵床ノ位置形狀ト相違シ鐵利ヲ損スヘキモノト認メタル
トキハ所轄鐵山監督署長ハ之ヲ出願人ニ通知シ訂正セシムベシ

出願人前項ノ通知ヲ受ケ其ノ通知書到達ノ日ヨリ三十日以内ニ訂正シテ差出ササルトキハ其ノ出
願ヲ無効トス

第四十三條 特許ヲ得タル鐵區ノ位置形狀、鐵床ノ位置形狀ト相違シ鐵利ヲ損スヘキモノト認メタル
トキハ所轄鐵山監督署長ハ農商務大臣承認可別總六十日以内ノ期限ヲ定メ訂正セシムベシ若シ

訂正セサルトキハ農商務大臣ハ既ニ與ヘタル特許ヲ取消スコトヲ得

鐵業人ハ前項特許取消ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所
ニ出訴スルコトヲ得

第四十四條 鐵業人鐵床ノ形狀ニ由リ鐵區ノ境界若ハ位置ノ訂正ヲ要スルトキ、其ノ願書ニ理由書、
訂正鐵區圖及鐵業特許證ヲ添ヘ農商務大臣宛ニテ所轄鐵山監督署ニ差出スヘシ

農商務大臣ニ於テ訂正ヲ必要ト認メタルトキハ更ニ鐵業特許證ヲ下付スヘシ

第四十五條 鐵業人鐵區ノ訂正ヲ出願シタル場合ニ於テ所轄鐵山監督署長吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト
認ムルトキハ鐵業人ヲシテ出張吏員外爲ニ制規ヲ旅費日當ヲ前納セシムヘシ

鐵業人前項旅費日當納付ノ通知ヲ受ケ其ノ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ納メサルトキハ
其出願ヲ無効トス

第四十六條 鐵區ヲ合併シ又ハ分割セシム欲スル者ハ合併又ハ分割鐵區圖及鐵業特許證ヲ添ヘ所轄
鐵山監督署ヲ經テ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ採掘權ヲ抵當ニ取リタル債主アルトキハ其ノ承諾
書ヲ添フヘシ

第四十七條 鐵區ノ分割ハ第四十一條ノ制限ヲ越ユルコトヲ得ス

第四章 土地使用
第四十七條 試掘又ハ採掘ヲ出願スル爲他人ノ土地ヲ測量スルコトヲ必要トスルトキハ所轄鐵山監
督署ノ認可ヲ受クベシ此ノ場合ニ於テ其ノ土地ノ所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス若シ

測量ノ爲ニ損害ヲ生シタルトキハ其ノ測量ヲ請求シタル者ニ於テ之ヲ賠償スヘシ
 測量請求者他人ノ所有地ニ入ルトキハ豫メ其ノ土地所有者ニ通知シ且測量認可證ヲ携帶スヘシ
 第四十八條 左ノ場合ニ於テ鑛業上他人ノ土地ヲ使用スルコトヲ必要トシ鑛業人其ノ貸渡ヲ請求シ
 タルトキハ其ノ土地ノ所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

- 一 坑口ヲ開穿スル爲
- 一 鑛物及土石ノ堆積場ヲ設置スル爲
- 一 坑道、道路、鐵道、馬車鐵道、運河、溝渠及溜池ヲ開設スル爲
- 一 鑛業上必要ノ製鍊場其ノ他ノ建物、電線、鐵索及鐵管ヲ建設スル爲(三十三年法律第七十四號ヲ以テ本號改正)

第四十九條 左ノ場合ニ於テハ土地所有者又ハ關係人ハ土地貸渡ノ請求ヲ拒ムコトヲ得

- 一 貸渡請求ノ土地第二十五條ニ記載シタル場所ニ係ルトキ
 - 一 土地借受人ニ於テ第五十條ノ保證金ヲ差出サ、ルトキ
- 第五十條 土地借受人ハ貸渡ヲ受ケタル土地ニ對シ其ノ土地貸渡人ニ相當ノ借地料ヲ仕拂フヘシ
 土地貸渡人ハ借地料ノ保證金トシテ土地借受人ニ豫メ土地臺帳ニ記載シタル地價以內ノ金額ヲ差
 出サシムルコトヲ得
 其質入トナリタル土地ニ對スル借地料及保證金ハ質取主ニ於テ之ヲ受領スルモノトス
 土地使用ニ依リ所有者又ハ關係人ニ損害ヲ與フルトキハ鑛業人ハ之ニ對シ相當ノ賠償ヲ爲スヘ
 土地借受人土地ノ使用ヲ終リ其ノ使用中ノ借地料ヲ完納シタルトキハ土地貸渡人又ハ質取主ハ十

地引換ニ保證金ヲ返還スヘシ

第五十一條 土地借受人貸渡ヲ受ケタル土地ノ使用ヲ終リタルトキハ土地貸渡人ノ要求ニ應ジ其ノ
 土地ヲ原形ニ復シ返還スヘシ若シ原形ニ復シ難キトキハ土地借受人ニ於テ其ノ損害ヲ賠償スヘシ

第五十二條 土地借受人借地料ノ仕拂ヲ延滞シタルトキハ土地貸渡人ハ其ノ延滞借地料ニ相當スル
 金額ヲ保證金中ヨリ差引キ土地ヲ取戻スコトヲ得

前項土地ヲ取戻スニ當リ地上ニ建物等アルトキハ六十日以上ノ期限ヲ定メテ土地借受人ニ其ノ取除
 ヲ請求スヘシ若シ土地借受人ノ所在不分明ナルトキハ其ノ地方ノ新聞紙ヲ以テ其ノ旨ヲ公告スヘシ
 土地借受人右期限内ニ取除ヲナサ、ルトキハ其ノ建物等ハ土地貸渡人ノ所有ニ歸スヘシ

第五十三條 鑛業人ノ請求ニ依リ土地ヲ分割シテ貸渡シ又ハ貸渡シタルカ爲殘地ノ利用ヲ害スルト
 キハ鑛業人ニ對シ其ノ土地全部ノ買取若ハ借受ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ之ヲ
 拒ムコトヲ得ス

第五十四條 鑛業人ニ於テ貸渡ヲ受ケタル土地ヲ三箇年以上使用スル目的アルカ又ハ三箇年以上之
 ヲ使用スルトキハ土地貸渡人ハ鑛業人ニ其ノ土地ヲ買取ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ鑛業
 人ハ其ノ買取ヲ拒ムコトヲ得ス

第五十五條 土地ノ所有者及關係人ト測量請求人又ハ鑛業人トノ間ニ於テ土地貸渡、借地料、保證金
 損害賠償金又ハ土地賣買代價ニ付協議調ハサルトキハ所轄鑛山監督署長ニ其ノ判定ヲ請求スルコ
 トヲ得

所轄鑛山監督署長ノ判定ニ不服アルトキハ其ノ判定ノ違ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ土地貸渡ニ就テハ農商務大臣ニ其ノ裁定ヲ請求シ借地料、保證金、損害賠償金若ハ土地賣買代金ヲ就テハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得ス

第五十六條 所轄鑛山監督署長ノ判定又ハ農商務大臣ノ裁定請求ノ爲ニ要スル費用ハ民事訴訟入費

ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第五十七條 鑛業人ハ土地所有者又ハ關係人ニ於テ所轄鑛山監督署長ノ判定シタル借地料、保證金、損害賠償金又ハ賣買代金ニ不服アルモ其ノ金額ヲ土地所有者又ハ關係人ニ渡シ若シ之ヲ受ケツル

トキハ其ノ金額ヲ供託所ニ預ケ置キ土地ヲ使用スルコトヲ得

第五章 鑛業警察

第五十八條 鑛業ニ關スル警察事務ニシテ左ニ掲クルモノハ農商務大臣之ヲ監督シ鑛山監督署長之ヲ行フ

一 坑内及鑛業ニ關スル建築物ノ保安

一 鑛夫ノ生命及衛生上ノ保護

一 地表ノ安全及公益ノ保護

一 鑛業上ニ危險ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ所轄鑛山監督署長ハ鑛業人ニ其ノ豫防ヲ命シ又ハ鑛業ヲ停止スヘシ

所轄鑛山監督署長ニ於テ鑛業ヲ停止セントスルトキハ其ノ猶豫シ難キ場合ヲ除クノ外ハ農商務大臣ノ認可ヲ經ヘシ

第六十條 前條第二項ノ場合ニ於テ鑛業人直ニ其ノ豫防ニ着手セザルトキハ所轄鑛山監督署長ハ鑛業人ノ使用スル役員及鑛夫ヲ指揮シ其ノ豫防ヲ執行スル中本條ノ規定ニ依リテハ所轄鑛山監督署長ハ此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ其ノ使用スル役員及鑛夫ヲ豫防ノ用ニ供シ且一切ノ費用ヲ負擔スルノ義務アルモノトス

第六十一條 第五十九條ニ依リ鑛業ヲ停止シタル後其ノ事故止ミタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ直ニ鑛業ノ停止ヲ解キ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ

第六十二條 農商務大臣ニ於テ此ノ條例ニ依リ採掘ノ特許ヲ取消シタルトキ又ハ鑛業人廢業シタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ六十日以上ノ期限ヲ定メ鑛業ヲ爲建設シタル家屋及其ノ他ノ建物等ヲ除去セシムヘシ若シ右期限内ニ除去セザルトキハ其ノ建物トハ土地所有者ノ所有ニ歸ス但所轄鑛山監督署長ニ於テ坑内保安ヲ爲ニ必要ト認ムル坑内及坑口ノ構造物ハ之ヲ除去スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ鑛業人不在不明ナルトキハ第五十二條第二項ノ手續ニ依ルヘシ

第六十三條 農商務大臣ハ此ノ條例ノ範圍内ニ於テ省令ヲ以テ鑛業警察規則ヲ定ムルコトヲ得

第六章 鑛夫

第六十四條 鑛夫トハ鑛物ノ採掘及之ニ附屬スル業務ニ從事スル男女ノ職工ヲ謂フ

鑛業人ハ其ノ使役スル鑛夫ノ使役規則ヲ定メ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ受ケルコトヲ得

第六十五條 鑛業人ト鑛夫トノ間ニ特別ノ約定ナキ場合ニ於テ雙方モ于四日以前ニ通知スルトキ

ハ雇役ノ解約ヲナスコトヲ得
第六十六條 左ノ場合ニ於テハ鑛業人ハ何時タリトモ鑛夫ヲ解雇スルコトヲ得

一 輕罪以上ノ刑ニ處セラレタルカ又ハ不行狀ノ行為アルカ者若ハ命令ヲ遵守セサルトキ

一 鑛業人又ハ其ノ使用スル役員ニ對シ粗暴ノ所爲アリタルトキ

一 身體虛弱ニシテ業務ニ堪ヘサルトキ

第六十七條 左ノ場合ニ於テハ鑛夫ハ何時タリトモ其ノ雇役ヲ罷ムルコトヲ得

一 鑛業ヲ禁止セラレ又ハ廢業シタルトキ

一 鑛業人又ハ其ノ使用スル役員ニ於テ虐待シタルトキ

第六十八條 鑛業人又ハ其ノ代理人ハ解雇スル鑛夫ノ請求ニ依リ從來ノ業務年限、本人ノ技能、賃錢

及解雇ノ事由ヲ記載シタル證明書ヲ與フヘシ

鑛業人證明書ヲ與フルコトヲ拒ムカ又ハ鑛夫ニ於テ證明書中不當ト認ムル事項アルトキハ所轄鑛

山監督署員若ハ警察官ニ申告スルコトヲ得

第六十九條 鑛業人ハ鑛夫ノ賃錢ヲ通貨ニテ仕拂フヘシ鑛夫ノ請求アルニアラサレハ物品ヲ以テ仕

拂フ爲メスコトヲ得ス

第七十條 鑛業人ハ鑛夫名簿ヲ備ヘ置キ氏名、年齢、本籍、職業、雇入及解雇ノ年月日ヲ記入スヘシ

第七十一條 農商務大臣ハ左ニ記載スル制限内ニ於テ省令ヲ以テ鑛夫工役規則ヲ定ムルコトヲ得

一 一日十二時間以上ノ就業時間ヲ制限スルコト

一 女工ノ工役ノ種類ヲ制限スルコト

一 十四年以下ノ男女職工ノ就業時間及工役ノ種類ヲ制限スルコト

第七十二條 鑛業人ハ左ノ場合ニ於テ其雇入鑛夫ヲ救恤スルニ其ノ救恤規則ハ所轄鑛山監督署ノ認

可ヲ受クヘシ

一 鑛夫自己ノ過失ニ非スシテ就業中負傷シタル場合ニ於テ診察費及療養費ヲ補助スルコト

一 前項ノ場合ニ於テ鑛夫ニ療養休業中相當ノ日常ヲ支給スルコト

一 前項ノ負傷ニ由リ鑛夫ノ死亡シタルトキ埋葬料ヲ補助シ及遺族ニ手當ヲ支給スルコト

一 前項ノ負傷ニ由リ痼疾トナリタル鑛夫ニ期限ヲ定メ補助金ヲ支給スルコト

第七章 鑛業税及鑛區税

第七十三條 鑛業人ハ鑛業税トシテ鑛業製産物ノ價格百分ノ一鑛區税トシテ鑛區一千坪毎ニ一箇年

金三十錢ヲ納ムヘシ但一千坪未滿ノ端數ニ對スル鑛區税ハ之ヲ免除ス

鑛鑛ヲ採掘スル者ニハ鑛業税ヲ課セス

第七十四條 前條鑛業製産物ノ價格ハ主要ナル市場ノ平均相場ヲ標準トシ農商務大臣ノ告示スル處

ニ依ル但市場ノ相場ナキモ其ノ販賣代價ニ依ル

第七十五條 鑛業税ハ前年分ヲ毎年三月三十一日限ニ又廢業ノ年ニ係ルモノハ廢業ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ
 鑛區税ハ一箇年分ヲ其ノ前年十二月十五日限ニ又初年ニ係ルモノハ月割ヲ以テ採掘出願特許ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ其ノ廢業ノ年ニ係ルモノハ之ヲ返付セス
 第七十六條 鑛業人納税期限内ニ鑛業税及鑛區税ヲ納メサルトキハ農商務大臣ハ採掘ノ特許ヲ取消スコトヲ得其ノ取消ニ不服アルトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行以裁判所ニ出訴ヘルコトヲ得

第八章 罰則

第七十七條 第二十四條第二十五條ヲ犯シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第七十八條 特許ヲ得スシテ試掘ヲ爲シタル者又ハ詐僞ニ由リテ特許ヲ得タル者ハ十五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第七十九條 認可ヲ得スシテ試掘ヲ爲シタル者又ハ詐僞ニ由リテ認可ヲ得タル者又ハ認可ノ期限ヲ過キ尙ホ試掘ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第八十條 第二十七條ヲ犯シタル者及第五十九條ノ豫防ニ著手セタル者又ハ第六十二條但書ノ規定ヲ犯シタル者ハ十五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第三十一條第一項及第二項ヲ犯シタル者ハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第八十一條 第十條ヲ犯シタル者ハ其ノ得金ノ半額ニ相當ナル罰金ニ處ス

第八十二條 第十一條ノ販賣代價ヲ隱匿シタル者ハ其ノ隱匿シタル金額ノ半額ニ相當スル罰金ニ處ス

第八十三條 第三十九條ニ依リ届出シタル事項ヲ詐テ述稅シタル者ハ其ノ述稅金額ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處シ其ノ述稅ニ關セザル事項ニ係ルモノハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十四條 第四十條ノ帳簿ヲ調製セス若ハ記載ヲ忘リ若ハ詐テ記載シタル者ハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十五條 第六十四條第二項第六十九條及第七十二條ヲ犯シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十六條 第六條第三十七條第六十八條及第七十條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第八十七條 第八十一條第八十二條及第八十三條ニ於テ自首シタル者ハ其ノ納付スル金額ノ半額ヲ追徴シ其罪ヲ問ハス

第八十八條 此ノ條例ヲ再犯シタル者ハ刑法ノ減輕再犯加重及數罪併發ノ例ヲ用ヒス

鑛業人未成年瘋癲白痴又ハ瘖啞ニシテ此ノ罰則ヲ犯シタル者ハ其以後見人ヲ處罰ス

第九章 附則

第八十九條 此ノ條例實施以前ニ許可ヲ得タル試掘人又ハ借區人ハ其ノ許可ヲ得タル年限中試掘又ハ鑛業ヲ爲スコトヲ得

第九十條 此ノ條例實施以前ニ借區人ノ許可ヲ得借區年限滿期後尚ホ引續キ鑛業ヲ爲サントハル者ハ借區滿期以前ニ此ノ條例ニ依リ出願スヘシ

第九十一條 此ノ條例ノ施行ニ關スル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第九十二條 此ノ條例ハ明治三十五年六月一日ヨリ施行ス明治六年太政官第二百五十九號布告日本

第九十三條 明治三十二年十一月三十日以前ヨリ引續キ若鉛鑛、格魯模鐵鑛、燐鑛、亞炭又ハ土瘴膏

ヲ採取スル者ニシテ明治三十三年六月三十日迄ニ其ノ鑛物採掘ノ特許ヲ出願スルトキハ其ノ採取

區域ニ限リ第十六條及鐵區ノ面積ニ關スル第四十一條ノ規定ニ拘ラス特許ヲ與フヘシ(三十二年法律

以下本條以下追加)

前項ノ採取者ハ明治三十三年六月三十日迄、其ノ特許ヲ出願シタル者ハ其ノ指令ノ日迄本法ノ規

定ニ拘ラス其ノ採取ヲ繼續スルコトヲ得

第九十四條 前條ノ規定ニ依リ採掘ノ特許ヲ出願スル者ハ第二十二條又ハ第二十三條ノ承諾ヲ得ル

第九十五條 第九十三條ノ規定ニ依リ特許ヲ得タル鑛區ノ面積ニ千坪未滿ナル場合ニ於テハ其ノ特

許ハ五箇年ヲ經過シタルトキ以テ消滅ス

第九十六條 第十一條ノ規定ニ依リ、其ノ特許ヲ得タル鑛區ノ面積ニ千坪未滿ナル場合ニ於テハ其ノ特

許ハ五箇年ヲ經過シタルトキ以テ消滅ス

三十二年農務省令第四號
砂鑛採取法施行細則

○砂鑛採取法明治二十六年三月法律第十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル砂鑛採取法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一章 砂鑛採取法

第一條 此ノ法律ニ於テ砂鑛トハ砂金、砂錫及砂鐵ヲ謂フ

第二條 砂鑛ヲ採取セムト欲スル者ハ所轄鑛山監督署長ヲ經由シ農務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第三條 採取ノ事業ヲ讓渡サムトスルトキハ所轄鑛山監督署長ヲ經由シ農務大臣ノ許可ヲ受クヘシ(二十八法律第三十號ヲ以テ第三條ヲ本條并ニ次項トモ追加)

共同採取人中ニ於テ除名スルトキハ其ノ人名ヲ所轄鑛山監督署長ニ届出ヘシ

第四條 帝國臣民ニ非サルハ採取人トナリ又ハ採取業ニ關スル組合員又ハ會社員トナルコトヲ得ズ(二十八法律第三十號ヲ以テ第三條條ヲ第四條ニ改メ以下項次條下ク)

採取人未成年、瘋癲、白痴又ハ瘡癩ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ

農商務省鑛山局及鑛山監督署ノ官吏ハ左職中採取人トナリ又ハ採取業ニ關スル組合員又ハ會社員トナルコトヲ得ズ

第五條 採取區域内ノ土地他人ノ所有ニ係ルトキハ所有者又ハ關係人ノ承諾ヲ受クヘシ

土地所有者又ハ關係人ハ自ら採取ヲ出願スルトキノ外前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス但シ承諾ヲ與スルトキハ相當ノ砂鑛採取料ヲ要求スルコトヲ得

第六條 採取ノ事業公益ヲ害スト認ムルトキハ農商務大臣ハ其ノ出願ヲ許可セズ

第七條 採取ノ事業公益ニ害アルトキハ農商務大臣既ニ與ヘタル許可ヲ取消スコトヲ得

第八條 採取業上ニ危險ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スルコトキハ所轄鑛山監督署長ハ採取人ニ其ノ豫防ヲ命シ又ハ採取業ヲ停止スヘシ
所轄鑛山監督署長ニ於テ採取業ヲ停止セムトスル事キハ其ノ猶豫シ難キ場合ヲ除ク外ハ農商務大臣ノ認可ヲ經ヘシ

採取業ヲ停止シタル後其ノ事故止ミタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ停止ヲ解クヘシ
第九條 採取人前條ニ依リ命セラルル豫防ヲ怠ルトキハ農商務大臣ハ既ニ與ヘタル許可ヲ取消スコトヲ得

第十條 採取人正當ノ理由ナクシテ一箇年以上休業シ又ハ採取ノ許可ヲ受ケタル日より一箇年以内ニ採取ニ著手セザルトキハ農商務大臣ハ其ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第十一條 詐偽又ハ錯誤ニ由リ採取ノ許可ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ許可ヲ取消スヘシ若シ其ノ許可ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ許可ノ日より三十日以内ニ其ノ許可ヲ取消スル農商務大臣ニ請求スルコトヲ得

第十二條 第七條第九條第十條及第十一條ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ違ヲ受ケタル日より三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十三條 採取許可取消ノ處分ヲ受ケル採取人同ニ區域ヲ付一箇年間採取ノ出願ヲ爲スコトヲ得
ス

第十四條 左ノ場合ニ於テ採取人他人ノ土地ヲ使用スルコトヲ必要トシ其ノ貸渡ヲ請求シタルトキハ其ノ土地所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得
一 洗鑛ノ爲
二 洗鑛所建設ノ爲
三 洗鑛用水路及溜池開設ノ爲

第十五條 採取人ハ使用スル土地ニ對シ其ノ土地所有者ニ相當ノ借地料ヲ仕拂フヘシ
其ノ賃入額ナリタル土地ニ對スル借地料ハ賃取主ニ於テ之ヲ受領スルモノトス

土地使用ニ依リ賃渡人又ハ關係人ニ損害ヲ加フルトキハ採取人ハ之ニ對シ相當ノ賠償ヲ爲スヘシ
第十六條 採取人借地料ノ仕拂ヲ延滞シタル事キハ土地所有者ハ其ノ土地ヲ取戻ス可ク得

第十七條 第十四條ノ場合ニ於テ採取人五箇年以上土地ヲ使用スルトキハ其ノ土地所有者ハ土地ノ買取ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テ採取人ハ其ノ買取ヲ拒ムコトヲ得

第十八條 採取人ハ請求ニ依リ土地ヲ分割シテ賃渡シ又ハ賃渡シタルカ爲殘地ノ利用ヲ害スル事キハ土地所有者ハ採取人ニ對シ其ノ土地全部ノ買取若ハ借受ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ採取人ハ之ヲ拒ムコトヲ得

第十九條 土地所有者又ハ關係人ハ採取人トノ間ニ於テ土地賃渡ノ採取料、借地料、損害賠償金又ハ土地賃買代金ニ付協議調ハサルトキハ所轄鑛山監督署長ニ其ノ判定ヲ請求スルコトヲ得
所轄鑛山監督署長ハ判定ニ不服アルトキハ其ノ判定ヲ受ケタル日より三十日以内ニ土地賃渡ニ就

ヲハ農商務大臣ニ其ノ裁定ヲ請求シ採取料、借地料、損害賠償金若ハ土地買代金ニ就テハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得ス

第三十條 所轄鑛山監督署長ノ判定又ハ農商務大臣ノ裁定請求ノ爲ニ要スル費用ハ民事訴訟費用ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第二十一條 採取人ハ土地所有者又ハ關係人ニ於テ所轄鑛山監督署長ノ判定シタル採取料、借地料、損害賠償金又ハ土地買代金ニ不服アルモ其ノ金額ヲ土地所有者又ハ關係人ニ渡シ若之ヲ受ケザルトキハ其ノ金額ヲ供託所ニ預置キ土地ヲ使用スルコトヲ得

第二十二條 許可ヲ得スシテ採取ヲ爲シタル者又ハ詐偽ニ由リテ許可ヲ得タル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第二十三條 此ノ法律施行以前ニ許可ヲ得タル採取人ハ此ノ法律ニ依リ引續キ其ノ業ヲ爲スコトヲ得

第二十四條 砂鑛採取ノ營業其ノ他國土保安ニ關シ必要ナル規定及此ノ法律ノ施行細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十五條 此ノ法律ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス

○鑛業及砂鑛採取業ニ關スル手數料 明治三十三年四月勅令第百五十號

沿革略記 明治二十五年三月勅令第百二十六號ヲ以テ鑛業ニ關スル手數料ヲ定ム●二十七年七月勅令第百號ヲ以テ前令ヲ廢止シ鑛業及砂鑛採取業ニ關スル手數料ヲ定ム●三十二年一月勅令第百四號ヲ以テ前令ヲ廢止シ更ニ鑛業及砂鑛採取業ニ關スル手數料ヲ定ム●三十三年四月勅令第百五十號ヲ以テ前令ヲ改正ス

朕鑛業及砂鑛採取業ニ關スル手數料改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 一 採掘特許出願人變更願 金十圓
- 二 坑内實測圖證明請求 金十圓
- 三 測量認可願 金五圓
- 四 鑛業特許證再下付願 金五圓
- 五 鑛業條例第九十條ニ依ル採掘特許願 金十圓
- 六 鑛區圖又ハ試掘地許可圖再下付願 金五圓
- 七 鑛區圖又ハ試掘地許可圖修正願 金五圓
- 八 砂鑛採取願 金十圓
- 九 砂鑛採取許可地合併又ハ分割願 金五圓
- 十 砂鑛採取許可地增區訂正願 金十圓

- 十一 砂鑛採取出願中増區訂正願 金十圓
 - 十二 砂鑛採取業讓渡願 金十圓
 - 十三 砂鑛採取人加名願 金十圓
 - 十四 砂鑛採取出願人變更願 金十圓
 - 十五 砂鑛採取地許可圖再下付願 金五圓
 - 十六 砂鑛採取地許可圖修正願 金十圓
 - 十七 鑛山監督署長ノ判定請求 金十圓
 - 十八 農商務大臣ノ裁定請求 金十圓
- 前項第八號、第十號及第十一號ノ出願ニ就キテハ河床ニ在リテハ延長二里迄毎ニ其ノ他ニ在リテハ十萬坪迄毎ニ一件分ノ手数料ヲ納ムヘシ

附則

本令ハ明治三十三年五月一日ヨリ之ヲ施行ス
 明治三十三年勅令第四號ハ之ヲ廢止ス

○地質調査所分析試驗手数料徵收方明治二十五年七月勅令第六十三號
 朕農商務省地質調査所ニ於テ爲ス分析試驗ニ關スル手数料徵收ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ

二十五年農商務省告示第十號
 三號ヲ以テ分析試驗手数料徵收ノ件ニ依リテ示ス

- 第一條 農商務省地質調査所ニ分拆試驗ノ依頼ヲ爲ス者ハ左ノ區別ニ從ヒ手数料ヲ納ムヘシ
- 一 性分ノ定性分析ハ金一圓トス一定性ヲ増ス毎ニ金五十錢ヲ加フ
 - 二 鑛物、工業用原料、製造品等中一性分ノ定量分析ハ金二圓トス一定量ヲ増ス毎ニ金一圓ヲ加フ
 - 三 一金屬ノ乾式定量分析ハ金二圓トス一定量ヲ増ス毎ニ金一圓ヲ加フ
 - 四 鑛物類ノ比重、硬度等ノ檢定ハ一廉毎ニ金五十錢トス
 - 五 耐火材料用ノ粘土、燧化石等ノ火熱ニ於ケル實驗、陶磁器、燧化石、「セメント」原料用粘土類ノ器械分析及ヒ應用試驗ハ金二圓以上二十圓以下トシ試驗ノ難易ニ從ヒ農商務省地質調査所長ノ定ムル所ニ依ル
 - 六 器械油等ノ比重、粘力、引火點、凝結點、沸騰點、熔融點、乾燥質ノ試驗ハ一廉毎ニ金五十錢トス
 金屬ニ於ケル作用、酸類及ヒ「アルカリ」ノ作用、酸類ノ定量、分節、沃度化合數、鹼化數等ノ試驗ハ第二號ニ準ス
 - 七 建築材料等ノ吸水力、耐壓力、耐延力、凍寒ニ於ケル作用、石灰ノ「モルタル」製出力等ノ試驗ハ一廉毎ニ金一圓トス
 - 八 「セメント」ノ比重、一定容量ノ重量、硬化ノ時間、粉末ノ細粗、硬化ノ際膨脹ノ程度、龜裂ノ現象等ノ試驗ハ一廉毎ニ金五十錢硬力即チ耐壓力並ニ耐延力等ノ檢定ハ一廉毎ニ金一圓以上金十圓以下トシ試驗ノ難易ニ從ヒ農商務省地質調査所長ノ定ムル所ニ依ル

地質調査所分析試驗手数料徵收方

九 右各號外ニシテ化學工業ニ屬スルモノト認ムル試驗手数料ハ前示割合ニ準シ時々農商務省地質調査所長ノ定ムル所ニ依ル

十 時日ヲ限リ分析試驗ヲ依頼スルトキハ前示手数料ノ二倍トシ同人ニシテ同種類ノモノ五箇以上ノ試験ヲ同時ニ依頼スルトキハ前示手数料ノ二割ヲ減ス

第二條 前條ノ手数料ハ「登記印紙」ヲ以テ納ムヘシ

第三條 本令ハ明治二十五年八月一日ヨリ施行ス

○ 農會法明治三十二年六月
法律第百三號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル農會法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

農會法

第一條 農會ハ農事ノ改良發達ヲ計ル爲メニ設立スルモノトス

第二條 農會ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 農商務大臣ハ其ノ定ムル所ノ條件ヲ具備スル農會ニ補助金ヲ交付スルコトヲ得

第四條 農會ニ補助スル金額ハ北海道又ハ一府縣ヲ通シテ一箇年四千圓ヲ超ユルコトヲ得ス

第五條 農會補助ノ爲メ國庫ヨリ支出スル金額ハ一箇年十五萬圓ヲ超ユルコトヲ得ス

附則

第六條 本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

○ 農會令明治三十三年二月
勅令第三十號

朕農會令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

農會令

第一條 農會ハ市町村農會、郡農會、北海道農會及府縣農會トス

本令ニ依リテ設立シタル農會ニ非サレハ前項ニ掲ケタル名稱ヲ附スルコトヲ得ス

第二條 市町村農會ノ區域ハ市町村又ハ町村組合ノ區域ニ依リ郡農會ノ區域ハ郡ノ區域ニ依リ

北海道農會又ハ府縣農會ノ區域ハ北海道又ハ府縣ノ區域ニ依ル

町村農會ニ在リテハ特別ノ事由アルトキハ前項ノ區域ニ依ラサルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ

郡長ノ認可ヲ經テ其ノ區域ヲ定ムヘシ

北海道ニ於テハ數郡ヲ以テ一郡農會ノ區域ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ北海道廳長官ノ

認可ヲ經テ其ノ區域ヲ定ムヘシ

第三條 市町村農會ハ其ノ區域内ニ於テ耕地又ハ牧場ヲ所有スル者及農業ヲ營ム者ヲ以テ之ヲ

組織シ郡農會ハ其ノ區域内ノ町村農會ヲ以テ之ヲ組織シ北海道農會又ハ府縣農會ハ其ノ區域

内ノ郡農會及市農會ヲ以テ之ヲ組織ス

第四條 市町村農會ヲ設立スルニハ左ノ條件ヲ具備スルコトヲ要ス

一 會員ノ數第三條ノ資格ヲ有スル者ノ二分ノ一以上ナルコト

二 其ノ區域内ニ於テ會員ノ占有又ハ所有スル耕地及牧場ノ面積カ私用ニ供スル耕地及牧場ノ總面積ノ二分ノ一以上ナルコト

北海道、沖繩縣、小笠原島及伊豆七島ニ於テハ前項第二號ノ條件ヲ要セス

第五條 郡農會ヲ設立スルニハ之ヲ組織スル農會ノ數其ノ區域内ノ町村及町村組合總數ノ二分

ノ一以上タルコトヲ要ス

府縣農會ヲ設立スルニハ之ヲ組織スル農會ノ數其ノ區域内ノ郡市總數ノ二分ノ一以上タルコトヲ要ス

北海道ニ於ケル郡農會及北海道農會ヲ組織スヘキ農會ノ數ハ農商務大臣之ヲ定ム

第六條 北海道農會及府縣農會ニ在リテハ農商務大臣、其ノ他ノ農會ニ在リテハ地方長官ニ於

テ必要ト認ムルトキハ農會ニ加入セサルモノニ對シ之カ加入ヲ命スルコトヲ得但シ第四條又

ハ第五條ニ定メタル要件ヲ闕キタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第七條 農會ノ設立者ハ會則ヲ定メ市町村農會ニ在リテハ五名以上ノ委員、其ノ他ノ農會ニ在

リテハ之ヲ組織スル農會ノ會長ヨリ之ヲ行政廳ニ差出シ農會設立ノ認可ヲ受クヘシ

第八條 會則ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 名稱

二 事業

三 事務所

四 役員ノ職務權限、選任及任期ニ關スル規定

五 會議ニ關スル規定

六 會費ノ分賦收入ニ關スル規定

七 財産ニ關スル規定

八 處務及會計ニ關スル規定

九 入會及退會ニ關スル規定

十 會則ノ變更ニ關スル規定

十一 解散ニ關スル規定

會則ノ變更ハ行政廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其ノ效力ヲ生セス

第九條 郡農會北海道農會又ハ府縣農會ヲ設立シタルトキハ之カ會議ニ參列セシムル爲其ノ農

會ヲ組織スル農會ニ於テ三名以内ノ代表者ヲ選舉スヘシ

第十條 農會ハ農事ニ功勞アル者又ハ農事ニ關シ學識經驗アル者ヲ名譽會員ト爲スコトヲ得

名譽會員ハ議決權ヲ有セス

第十一條 農會ハ會長及副會長各一名ヲ置クヘシ

會長ハ會務ヲ總理シ會ヲ代表ス

副會長ハ會長ノ事務ヲ補助シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス

第十二條 會長及副會長ハ市町村農會ニ在リテハ其ノ會員中ヨリ其ノ他ノ農會ニ在リテハ第九條ノ代表者中ヨリ之ヲ互選ス但シ名譽會員中ヨリ之ヲ選舉スルコトヲ妨ケス
第十三條 農會ノ經費ハ市町村農會ニ在リテハ其ノ會員ノ負擔トシ其ノ他ノ農會ニ在リテハ之ヲ組織スル農會ノ負擔トス

第十四條 農會ノ事業年度ハ四月一日ヨリ翌年三月三十一日迄トス

第十五條 農會ノ經費ノ豫算及分賦收入ノ方法ハ毎年之ヲ議決シ二月末日迄ニ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第十六條 農會ハ毎年六月三十日迄ニ前年度ノ經費ノ決算及會務ノ狀況ヲ會員又ハ農會ニ公示シ且之ヲ行政廳ニ報告スヘシ

第十七條 農會ハ命令ノ定ムル所ニ依リ農事ニ關スル報告書ヲ作り之ヲ地方長官ニ差出スヘシ
第十八條 農會ハ農事ノ改良發達ニ關スル事項ニ付行政廳ニ建議スルコトヲ得

第十九條 行政廳ニ於テ必要ニ認ムルトキハ農會ノ會務ノ狀況若ハ帳簿ヲ検査シ又ハ農會ノ監督上必要ナル命令ヲ發シ若ハ處分ヲ行フコトヲ得

第二十條 農會ノ決議又ハ其ノ役員ノ行為カ法令若ハ會則ニ違背スルトキ又ハ公益ヲ害スルノ虞アリト認ムルトキハ北海道農會及府縣農會ニ在リテハ農商務大臣、其ノ他ノ農會ニ在リテハ地方長官ニ於テ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得
一 決議ノ取消
二 役員ノ解職

三 事業ノ停止

四 解散

解職セラレタル役員ハ二箇年間役員タルコトヲ得ス

第二十一條 農會ニ於テ解散ヲ議決シタルトキハ其ノ事由ヲ具シ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第二十二條 農會ニシテ第四條又ハ第五條ニ定メタル要件ヲ闕キタル場合ニ於テ六箇月以内ニ再ヒ之ヲ具備スルニ至ラサルトキハ解散ス

第二十三條 第七條、第八條第二項、第十五條、第十六條、第二十一條及第二十六條ノ行政廳ハ町村農會ニ在リテハ郡長トシ市農會及郡農會ニ在リテハ地方長官トシ北海道農會及府縣農會ニ在リテハ農商大臣トス

附則

第二十四條 本令ハ農會法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二十五條 本令中郡トアルハ伊豆七島及島司ヲ置キタル島嶼、市トアルハ北海道沖繩縣ノ區、町村トアルハ町村制ヲ施行セサル地方ニ於ケル町村ニ準スヘキ地ヲ包含ス
本令ノ規定ニ依リ郡長ノ行フヘキ職務ハ伊豆七島ニ於テハ東京府知事、北海道ニ於テハ支廳長、島司ヲ置キタル島嶼ニ於テハ島司之ヲ行フ

第二十六條 本令施行前ニ設立シタル農會ニシテ第四條又ハ第五條ニ定メタル要件ヲ具ヘ其ノ他本令ノ規定ニ抵触セサルモノハ本令施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ行政廳ノ認可ヲ受ケ本令ニ依リテ設立シタル農會ト看做スコトヲ得
前項ノ認可ヲ申請シタル農會ニシテ第一條ニ掲ケタル名稱ヲ有スルモノハ其ノ認可アル迄仍

従前ノ名稱ヲ繼續スルコトヲ得

○府縣農事試驗場國庫補助法明治三十二年六月法律第百二號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル府縣農事試驗場國庫補助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣農事試驗場國庫補助法

- 第一條 府縣農事試驗場ノ事業ヲ獎勵確實ナラシムル爲國庫ニ毎年度金十五萬圓以内ヲ支出シテ其ノ費用ヲ補助スヘシ
- 第二條 農商務大臣ノ定ムル府縣農事試驗場規程ニ依リ農商務大臣ノ認可ヲ經タル府縣農事試驗場ニ付農商務大臣店アリト認メタルトキハ之ニ補助金ヲ交付スヘシ但シ一府縣一箇所ニ限ル
- 第三條 各試驗場ニ交付スル補助金ハ其ノ設立者ノ負擔額ト同額以内ニ限ル
- 第四條 此ノ法律ニ依リ補助金ヲ受タル試驗場ノ設立者ハ補助年期間其ノ試驗場經費ヲ繼續支出スル義務アルモノトス
- 第五條 試驗場ニ補助金ヲ交付スルハ五箇年ヲ以テ一期トス滿期ノ後尙必要アルトキハ之ヲ繼續スルコトヲ得但シ農商務大臣ニ於テ試驗場ノ管理不適當ナリト認メタルトキ又ハ府縣農事試驗場規程ニ違背シタルトキ又ハ第四條ノ義務ヲ盡スコト能ハサルトキハ補助年期間ト雖モ其ノ補助ヲ廢シ若ハ停止スルコトヲ得
- 第六條 此ノ法律施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

三十二年農務省令第十九號
施行規則ヲ定ム

第七條 此ノ法律ハ農商務大臣ノ定ムル府縣農事講習所規程、府縣水産試驗場規程、府縣水産講習所規程ニ依リ農商務大臣ノ認可ヲ經タル府縣農事講習所、府縣水産試驗場、府縣水産講習所ニ適用ス

但シ其ノ補助金ハ第一條ニ定ムル金額内ニ於テ支出スルモノトス

第八條 此ノ法律ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

○農事試驗場分析手数料納付方明治二十六年十二月勅令第三百三十號

朕農事試驗場分析手数料ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 農事試驗場ニ分析ノ依頼ヲ爲ス者ハ左ノ區別ニ從ヒ手数料ヲ納ムヘシ

- 一、土壤及肥料ノ定性分析ハ一成分毎ニ金三十錢トス
- 二、土壤ノ定量分析ハ一成分金一圓トス二成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金五十錢ヲ加フ
- 三、土壤ノ普通含有セツル成分ノ定性ハ一成分毎ニ金二圓トシ其ノ定量ハ一成分毎ニ金五圓トス
- 四、肥料ノ定量分析ハ一成分金五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金二十五錢ヲ加フ
- 五、農産物及飼料ノ有機質成分ノ定量ハ一成分金五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金三十錢ヲ加フ
- 六、農産物及飼料ノ灰分ノ定量ハ一成分金五十錢トス二成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金三十錢ヲ

第十八號 農事試驗場分析手数料納付方

加フ

但灰分全量ノ定量ハ金十錢トス

七、農産製造品ノ定性分拆ハ一成分毎ニ金五十錢トス

八、農産製造品ノ定量分拆ハ一成分金一圓五十錢トスニ成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金一圓ヲ加フ

九、水ノ定性分拆ハ一成分金二圓トスニ成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金五十錢ヲ加フ

十、水ノ定量分拆ハ一成分金三圓トスニ成分以上ハ一成分ヲ増ス毎ニ金一圓ヲ加フ

十一、以上列記シタルモノ、外農業上ニ關係アル物料ノ分拆手数料ハ前示ノ割合ニ準シ時々農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

○

○害蟲驅除豫防法明治二十九年三月法律第十七號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル害蟲驅除豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

害蟲驅除豫防法

第一條 此ノ法律ニ於テ害蟲ト稱スルハ農作物ヲ害スル各種ノ蟲類ヲ謂フ

第二條 驅除豫防スヘキ害蟲ノ種類及驅除豫防ノ方法ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ府縣知事之ヲ定ム。認可ヲ經タル種類以外ノ害蟲發生シ急速ノ處分ヲ要スルトキハ府縣知事ハ臨時驅除豫防ノ方法ヲ

定メ之ヲ施行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ

第三條 害蟲田畑ニ發生シタルトキ又ハ發生ノ虞アルトキハ府縣知事ハ豫メ期限ヲ定メ該田畑ノ作人ヲシテ驅除豫防ヲ行ハシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ作人驅除豫防ヲ行ハサルトキハ府縣知事ハ市町村費ヲ以テ之ヲ行ヒ市町村ヲシテ該作人ヨリ其ノ費用ヲ徵收セシムルコトヲ得其ノ費用ノ徵收ニ關シテハ市制第百二條及町村制第百二條ヲ適用ス

第四條 害蟲蔓延シタルトキ又ハ蔓延ノ兆アルトキ若ハ害蟲田畑以外ノ地ニ發生シタルトキ又ハ發生ノ虞アルトキハ府縣知事ハ市町村費ヲ以テ驅除豫防ヲ行フコトヲ得

第五條 府縣知事ハ前條ノ驅除豫防ノ爲ニ市町村ニ命シテ夫役ヲ市町村全部又ハ一部ノ田畑ノ作人及所有者ニ賦課セシムルコトヲ得

夫役ハ害蟲ノ種類ニ依リテ田又ハ畑ニ區別シテ賦課スルコトヲ得
夫役ノ賦課ハ段別又ハ地價ヲ以テ標準ト爲スヘシ

夫役ハ各別ノ率ニ據リ小作人、自作人及地主ニ賦課スルコトヲ得
本條ノ場合ニ於テハ市制第百二十三條及町村制第百二十七條ヲ適用セス

第六條 府縣知事ハ驅除豫防ノ爲必要アルトキハ市町村費ヲ以テ溝渠ヲ設ケ又ハ農作物、蔬菜、刈株、雜草ヲ拔棄若ハ燒棄スルコトヲ得
本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ規定ヲ適用ス

第七條 驅除豫防ノ必要ヨリ生シタル損害ニ對シ被害者ハ賠償ヲ要求スルコトヲ得ス
第八條 土地所有者、管理者又ハ使用者ハ官吏及其ノ指揮ヲ承クル者ノ其ノ地ニ入り驅除豫防ニ從事スルヲ拒ムコトヲ得ス

第九條 府縣知事又ハ郡長ハ必要ナル場合ニ於テハ府縣稅(地方稅)又ハ郡費ヲ以テ第三條、第四條、第六條ノ費用ヲ補助シ若ハ驅除豫防ニ必要ナル器具ヲ給與シ又ハ代與スルコトヲ得

第十條 蟲類以外ノ動物ト雖農作物ヲ害スルトキ又ハ害スルノ虞アルトキハ府縣知事ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ此ノ法律ヲ適用スルコトヲ得

第十一條 第三條ノ場合ニ於テ府縣知事ノ命令ニ從ハサル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料又ハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

第十二條 第六條及第八條ニ依レル官吏若ハ其ノ指揮ヲ受クル者ノ行爲ヲ妨害スル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金又ハ十一日以上二十日以下ノ重禁錮ニ處ス

第十三條 此ノ法律ハ北海道、沖繩縣其ノ他市制、町村制ヲ施行セサル島嶼ニ之ヲ施行セス別ニ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

三十年農商務省令第十號

○遼洋漁業獎勵法(明治三十年四月法律第四十五號)

以テ本法施行細則ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル遼洋漁業獎勵法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遼洋漁業獎勵法

第一條 遼洋漁業ヲ獎勵スル爲國庫ハ毎年十五萬圓以内ヲ支出スヘシ

第二條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員若ハ株主トスル商事會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船籍ニ登錄シタル船舶ヲ以テ勸令ニ於テ指定スル漁場又ハ漁場ノ漁業ニ從事スル者ニ限リ遼洋漁業獎勵金ノ下付ヲ出願スルコトヲ得

第三條 前條ニ依リ獎勵金ヲ受クルコトヲ得ヘキ船舶ハ木製ト鐵製トヲ問ハス總噸數汽船五十噸以上帆船三十噸以上ニシテ農商務大臣ノ定ムル船舶噸裝規程ニ合格シ其ノ乘組員ハ總員ノ五分ノ四以上帝國臣民ヲ以テ組織シタルモノニ限ル(三十二年法律第四十五號ヲ以テ條中改正)

第四條 遼洋漁業獎勵金ヲ受ケムトスル者ハ其ノ船舶ニ對シ豫メ農商務大臣ノ認許ヲ受タヘシ

第五條 農商務大臣ハ第二條ノ出願者ニシテ漁業ノ組織確實ナリト認ムル者ニハ漁獵ノ種類又ハ漁獵ノ場所ニ依リ定率ヲ設ケ五箇年以内獎勵金ノ下付ヲ許可スルコトヲ得但シ左ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス(三十二年法律第四十五號ヲ以テ別號中改正)

- 一 汽船總噸數 每一噸 一箇年十五圓
- 但シ總噸數三百五十噸以上ハ噸數ニ應シ增加セス
- 一 帆船總噸數 每一噸 一箇年十圓
- 但シ總噸數二百噸以上ハ噸數ニ應シ增加セス

第十八號 遼洋漁業獎勵法

千五百三

一乘組總員

每一人

一箇年十圓

但シ勅令ニ定ムル乘組定員以外及年齢十六歳未滿ノ者ヲ除ク

第六條 遠洋漁業獎勵金下付ノ許可期間ト雖一箇年中遠洋漁業ニ從事スルコト五箇月ト滿タサルトキハ其ノ年ニ對シテハ獎勵金ヲ下付セス

第七條 左ニ記載スル船舶ヲ以テ遠洋漁業ニ從事スル者ニハ遠洋漁業獎勵金ヲ下付セス

第一 此ノ法律施行以後帝國船籍ニ登録ノ際製造後五箇年ヲ經過シタル外國製造ノ船舶

第二 製造後十五箇年ヲ經過シタル船舶

第八條 農商務大臣ハ第五條ノ許可ヲ受ケタル者ヲシテ遠洋漁業ニ關スル調査ヲ爲サシメ又ハ遠洋漁業練習生ヲ該船舶ニ乘組マシムルコトヲ得

第九條 第五條ノ許可ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ハ遠洋漁業獎勵金ヲ受ケ漁業ニ從事スル期間並ニ其ノ漁業ヲ終リタル日ヨリ三箇年間其ノ船舶ヲ外國人ニ賣渡、交換、贈與、質入、書入スルコトヲ得ス但シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル遠洋漁業獎勵金ヲ償還シタルトキ又ハ天災其ノ他拒抗スヘカラサル強制ニ因リ航行ニ堪ヘサルトキ若ハ農商務大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニアラス

第十條 遠洋漁業ノ監督及遠洋漁業練習生ヲ養成スルノ必要アルトキハ農商務大臣ハ第一條ニ掲クル金額ヨリ十分ノ一以内ヲ支出シ其ノ費用ニ充ツルコトヲ得

第十一條 詐偽ノ所爲ヲ以テ遠洋漁業獎勵金ヲ受ケタル者又ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ六月

以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其ノ因テ得タル遠洋漁業獎勵金ハ之ヲ償還セシム

前項ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケタル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リ處斷ス

第十二條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪併發ノ例ヲ用非ス

第十三條 第五條ノ許可ヲ受ケタル者此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ違背シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ遠洋漁業獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得

第十四條 前數條ノ罰則ハ商會社ニ在テハ其ノ各條ニ掲クル所爲ヲ爲シタル業務擔當ノ任アル社員若ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第十五條 此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ十五箇年間之ヲ施行ス

第十六條 此ノ法律ノ施行ニ必要ナル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

漁業

○遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類及場所並船舶乘組定員明治三十年六月勅令第百七十六號

朕遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類及場所並船舶乘組定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ハ左ノ種類トス

鯨獵業

獵虎獵業

第十八條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁獵ノ種類及場所並船舶乘組定員

千五百五

臘肉獸獵業

鱈漁業

鮭漁業

鯉漁業

鱒漁業

鯽漁業

鰱漁業

柔魚漁業

大鯨漁業

第二條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ漁獲ノ場所ハ左ノ洋海トス

支那海

臺灣海峡

東海

黃海

朝鮮海峡

日本海

阿留申海

太平洋

第三條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ船舶乗組定員ハ左ノ如シ(三十二年勅令第百二十六號)

改正)

漁船

總噸數	五十噸以上	乘組定員二十八名以下
同	七十五噸以上	同 三十名以下
同	百噸以上	同 三十二名以下
同	百五十噸以上	同 三十五名以下
同	二百噸以上	同 三十八以下
同	二百五十噸以上	同 四十一名以下
同	三百噸以上	同 四十四名以下
同	三百五十噸以上	同 四十七名以下
帆船		
總噸數	三十噸以上	乘組定員二十名以下
同	四十噸以上	同 二十二名以下
同	六十噸以上	同 二十六名以下
同	八十噸以上	同 二十八名以下

第十八條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁獲ノ種類及場所並船舶乗組定員

二十八年農商務省令第四號施行細則ヲ定メ

○狩獵法 明治二十八年三月 法律第二十號

沿革略記 明治元年四月及九月邊ヲ以テ獲リニ獲ル鳥打等ヲナシ農事ヲ妨クル者ノ取締ヲ爲ス○二年四月邊ヲ以テ獲ル鳥打等ヲ禁メ其器具ヲ沒收ス○三年五月邊ヲ以テ郊内外諸郡邑中ニ於テ獲ル鳥打等ヲ禁メ○五年正月邊第二十八號布告銃砲取締規則第六則ヲ以テ銃器ノ取締ヲ爲ス○六年一月第二十五號布告ヲ以テ鳥獸獵見許規則ヲ制定ス○同年三月第十號布告ヲ以テ前令ヲ改正シ更ニ鳥獸獵規則トナス○七年十一月第二十二號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十年十一月第十一號布告ヲ以テ前令ノ之ヲ改正ス○二十五年十月勅令第八十四號ヲ以テ前令ヲ廢シ狩獵規則ヲ定ム○二十八年法律第二十號ヲ以テ前令ヲ廢シ更ニ狩獵法ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル狩獵法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
狩獵法

第一章 獵具獵法

第一條 此ノ法律ニ於テ狩獵ト稱スルハ銃器、各種ノ網、放鷹、綱繩又ハ挾ヲ以テ鳥獸ヲ捕獲スルヲ

同	百	噸以上	同	二十九名以下
同	百二十	噸以上	同	三十名以下
同	百四十	噸以上	同	三十一名以下
同	百六十	噸以上	同	三十二名以下
同	百八十	噸以上	同	三十四名以下
同	二百	噸以上	同	三十七名以下

謂フ
前項各獵具ノ種類及制限ハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第二條 爆發物、銃銃若ハ危險ナル畏及陷穽ヲ以テ鳥獸ヲ捕獲スルコトヲ得ス
前項ノ外ノ獵具獵法ニシテ第一條ニ掲ケサルモノニ就テハ地方長官東京府下ハ府視 總監以下依之ハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ便宜取締規則ヲ設クルコトヲ得

第三條 日出前、日没後又ハ市街、人家稠密ノ場所、衆人群集ノ場所ニ於テ若ハ銃丸ノ達スヘキ處アル建物、船舶、汽車ニ向テ銃獵ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 左ニ掲グル場所ニ於テハ狩獵ヲ爲スコトヲ得ス

- 一 御獵場
 - 二 禁獵制札アル場所
 - 三 公道
 - 四 公園
 - 五 社寺境内
 - 六 墓地
 - 七 柵、柵、圍障又ハ作物植付アル他人ノ所有地及免許ヲ受ケタル他人ノ共同狩獵地但シ所有者又ハ管理人ノ承諾ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス
- 第五條 地方長官ハ土地所有者ノ出願又ハ其ノ他ノ理由ニ因リ必要ト認ムル場合ニ於テハ禁獵制札

ヲ建ツルコトヲ得

第二章 狩獵免許

第六條 狩獵ヲ爲サムト欲スル者ハ地方長官ニ願出テ免狀ヲ受クヘシ但シ欄、柵、圍障アル所有地内ニ於テ銃器ヲ使用セスシテ狩獵ヲ爲ス者ハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條ノ處罰ヲ受ケタル者ハ滿一箇年ヲ經過セサレハ再ヒ免狀ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 從來地方ノ慣行ニ依リ一定ノ區域内ニ於テ共同狩獵ヲ爲ス者ハ地方長官ヲ經由シテ農商務大臣ニ願出テ免許ヲ受クルコトヲ得但シ其ノ出願ニ關スル規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第八條 免狀ヲ分テテ甲乙ノ二種トス

甲種免狀ハ銃器ヲ使用セスシテ狩獵ヲ爲ス者ニ下付シ乙種免狀ハ銃器ヲ使用シテ狩獵ヲ爲ス者ニ下付スルモノトス

第九條 免狀ヲ受クル者ハ左ノ區別ニ從ヒ免許稅ヲ納ムヘシ

- 一等 甲種金 五十圓
乙種金 十圓
- 二等 甲種金 四十圓
乙種金 十圓
- 三等 甲種金 三十圓
乙種金 十圓

第十條 甲種免狀ノ有効期限ハ十月十五日ヨリ滿一箇年トシ乙種免狀ノ有効期限ハ十月十五日ヨリ翌年四月十五日マヲトス

地方長官ハ土地ノ狀況ニ因リ農商務大臣ノ認可ヲ經テ前項ノ期限ヲ三十日以内伸縮スルコトヲ得

三十年法律第...
七...
六...
五...
四...
三...
二...
一...

第十一條 免狀ノ使用ハ本人ニ限ルモノトス但シ助手ヲ要スル獵法ニアリテハ免狀ヲ有セサル者ヲ同伴スルコトヲ得

第十二條 獵者ハ出獵ノ際免狀ヲ携帯スヘシ

警察官、憲兵、森林官及市町村長ハ獵者ノ免狀ヲ検査スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ獵者ハ免狀ノ検査ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 免狀ヲ亡失シタルトキハ其ノ地ノ所轄警察官署及當初之ヲ下付シタル官廳ニ届出ヘシ

免狀ヲ亡失シ若ハ毀損シタルトキハ其ノ再渡又ハ書換ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ手数料金二十五圓ヲ納ムヘシ

第十四條 十六歳未満ノ者ハ乙種免狀ヲ受クルコトヲ得ス

第十五條 免狀ハ其ノ效力ヲ失ヒタル日ヨリ三十日以内ニ當初之ヲ下付シタル官廳ニ返納スヘシ

第十六條 遊歩規程ノ制限アル外國人ニシテ狩獵免狀ヲ受クル者ハ甲種金五圓乙種金十圓ノ免許稅ヲ納メ其ノ規程内ニ限リ狩獵スルコトヲ得若シ其ノ規程外ニ於テ狩獵シタルトキハ該免狀ハ爾後無効ノモノトス

第三章 鳥獸保護

第十七條 保護ヲ必要トスル鳥獸ヲ捕獲シ又ハ之ヲ販賣スルコトヲ禁ス但シ捕獲ノ禁止又ハ停止以前ニ於テ捕獲シタル鳥獸ハ其ノ禁止又ハ停止ノ日ヨリ二週間以内ニ於テ販賣スルハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 狩獵法

千五百十一

二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ何人ノ所有ヲ問ハズ獵船、船具、獵具及獵獲物ヲ沒收ス

第五條 獵船、獵具、獵法ノ制限及牝牡、年齢ニ依レル獵獲ノ禁止ニ違背シ又ハ獵船、獵具及獵獲物ノ検査ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮又ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條 第一條ノ免許ヲ受ケスシテ獵虎、獵熊、獵獸ヲ獵獲シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ獵獲物ヲ沒收ス

第七條 第四條、第六條ニ依リ沒收セラルヘキ獵獲物ヲ既ニ販賣シタルトキハ其ノ價代ヲ追徴ス

第八條 此ノ法律ハ明治二十九年一月一日ヨリ施行ス

明治十七年第十六號布告及明治十九年勅令第八十號ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

○蠶種検査法 明治三十三年三月 法律第四十五號

沿革略記 明治十九年八月農商務省令第九號ヲ以テ蠶種検査規則ヲ定ム●三十年三月法律第十號ヲ以テ前則チ廢シ蠶種検査法ヲ制定ス●三十三年三月法律第四十五號ヲ以テ前法ヲ改正ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル蠶種検査法改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

蠶種検査法

第一條 本法ニ於テ蠶種ト稱スルハ原種及製絲用種ヲ謂フ

第二條 原種ハ楯製ニスヘシ

第三條 蠶種ハ検査ニ合格シタル原種ヨリ產生シタル繭ヲ用ウルニ非サレハ之ヲ製造スルコトヲ得

第四條 蠶種ハ左ニ掲ケル繭ヲ以テ之ヲ製造スルコトヲ得ス

一 二繭以上合同シテ作りタル繭

二 繭片薄ナル繭若ハ形狀ヲ失スルコト著シキ繭

三 繭層ノ量繭ノ全量百ニ對シ一化性ニ在リテハ十、二化性ニ在リテハ七、多化性ニ在リテハ六ニ

達セサルモノ

四 蠶兒ノ發育不良ニシテ收繭ノ量著シク減少シタルモノ

五 蠶種製造者ニ非サル者ノ飼育シタル蠶兒ヨリ產生シタル繭

第五條 蠶種製造者ハ検査ニ合格シタル原種ヨリ產生シタル蠶兒ニ非サレハ飼育スルコトヲ得ス

第六條 蠶種製造者ハ收繭後及産卵後ノ二期ニ於テ蠶種ニ在リテハ繭、蛾及卵、越年スル製絲用種ニ在リテハ繭及卵、越年セサル製絲用種ニ在リテハ繭ノ検査ヲ受クヘシ

第七條 原種ノ播敷及第四條第一號乃至第三號ニ掲ケタル繭ハ收繭後ノ検査ヲ經ル迄之ヲ保存スヘシ

蠶種ノ製造ニ供用シタル繭及原種ノ製造ニ供用シタル母蛾ハ産卵後ノ検査ヲ經ル迄之ヲ保存スヘシ

第八條 検査ニ合格セサル蠶種ハ蠶種検査所ニ於テ直ニ之ヲ燒棄スヘシ

第九條 検査合格ノ證印ナキ蠶種ハ之ヲ讓渡スルコトヲ得ス

第十條 地方長官ハ蠶種検査員ヲシテ蠶種製造者ニ就キ發賣、收購及産卵ノ狀況ヲ視察セシムヘシ

第十一條 蠶種検査員ハ自己若シ家族ノ製造スル蠶種ノ検査ヲ爲スコトヲ得ス

第十二條 蠶種検査ニ關スル費用ハ府縣ノ負擔トス但シ國庫ハ其ノ半額以内ヲ補充スルコトヲ得

北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ負擔トス

第十三條 自家用又ハ學術研究ノ爲蠶種ヲ製造スル者ニハ本法ヲ適用セス

第十四條 學術研究ノ爲製造シタル原種ハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ノ検査ニ合格シタルモノトシテ看

做スコトヲ得

第十五條 自家用又ハ學術研究ノ爲製造シタル蠶種ハ之ヲ讓渡スルコトヲ得ス但シ前條ニ該當スル

モノハ此ノ限ニ在ラス

第十六條 第三條乃至第六條第九條又ハ第十五條ニ違背シタル者又ハ蠶種検査員ノ職務執行ヲ拒ミ

若ハ之ヲ妨ケタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 第七條ニ違背シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十八條 本法ハ命令ヲ以テ指定スル地ニ之ヲ施行セス

第十九條 本法ハ明治三十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

蠶種検査手数料

第一條 蠶種検査ハ手数料ニ關スル事件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二條 前條ニ依リ徵收シタル手数料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收

入トス

第三條 蠶種検査ノ手續料ヲ徵收スルモノトシテ

一 原種 一 蠶區ニ付 一 厘

二 製絲用種 一 枚ニ付 一 錢五厘

第四條 蠶種検査ノ手續料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收

入トス

第五條 蠶種検査ノ手續料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收

入トス

第六條 蠶種検査ノ手續料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收

入トス

第七條 蠶種検査ノ手續料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收

入トス

第八條 蠶種検査ノ手續料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳及沖繩縣ニ於テハ國庫ノ收

入トス

三十九年農商務省令第三號
蠶種検査細則

第十八條 蠶種検査手数料

此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○種牡馬検査法明治三十三年三月
法律第十二號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル種牡馬検査法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

種牡馬検査法

- 第一條 牡馬ハ此ノ法律ニ依リ毎年検査ヲ受ケ合格シタルモノニアラサレハ種付ケニ使用スルコトヲ得ス(三十二年法律第九十二號)
(大以テ毎年ノ二字ヲ加フ)
- 第二條 検査ニ合格シタル種牡馬ニハ軀肢ノ一部ニ烙印シ其ノ所有者ニ證明書ヲ下付スヘシ
- 第三條 證明書ノ效力ハ滿一箇年トス但地方ノ狀況ニ依リ此年限ニ依ラサルコトヲ得(三十二年法律第九十二號ヲ以テ追加)
- 前項期限内ト雖疾病其ノ他ノ事故ニ因リ種牡馬ニ不適當ナリト認メタルトキハ證明ノ效力ヲ停止シ若ハ之ヲ取消スコトアルヘシ
- 第四條 検査ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス
- 第五條 此ノ法律ハ官廳所有ノ種牡馬ニ適用セス
- 第六條 學術研究ノ爲牡馬ヲ種付ケニ使用セントスル者アルトキハ地方長官ハ農商務大臣ノ認可ヲ經特ニ其ノ種付ケヲ許可スルコトアルヘシ

三十二年農商務省第四號
種牡馬検査法施行細則
ヲ定ム

第七條 検査ニ合格セザル牡馬又ハ證明ノ效力ヲ失ヒ若ハ停止セラレタル種牡馬ヲ種付ケニ使用シタル者ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 種牡馬検査ノ標準及方法検査委員ノ組織其ノ他此ノ法律施行ノ爲必要ノ規程ハ農商務大臣之ヲ定ム

第九條 北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ因リ農務大臣ハ當分ノ内島嶼ニ限リ此ノ法律ヲ施行セザルコトヲ得(三十二年法律第九十二號ヲ以テ本條ヲ追加シ次條ヲ廢下ク)

附則

第十條 此ノ法律施行以前ニ與ヘタル種牡馬ハ免許其免許期限間效力ヲ有スルモノトス

第十一條 此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

○ 産牛馬組合法明治三十三年二月
法律第二十號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル産牛馬組合法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

産牛馬組合法

- 第一條 牛又ハ馬ノ生産ニ從事スル者ハ本法ニ依リ組合ヲ設置スルコトヲ得
- 第二條 組合ハ牛馬ノ改良及組合員ノ共同ノ利益ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第三條 組合ハ郡市以上ノ區域ニ依リ其ノ地區ヲ定ムヘシ但シ特別ノ事由アルトキハ此ノ限ニ在ラ

責任ヲ負擔シ、保證責任組合ニ在リテハ組合財産ヲ以テ其ノ債務ヲ完済スル出資能力ガ場合ニ於テ組合員ノ全員カ其人出資額ノ外一定ノ金額ヲ限度トシテ責任ヲ負擔ス

第三條 産業組合ノ住所ハ其ノ主要ナル事務所ノ所在地ニ在ルモノトス

第四條 産業組合ノ名稱中ニ其ノ組織及目的ヲ示スヘキ文字ヲ用ウヘシ

第五條 産業組合ニ非スシテ其ノ名稱中ニ産業組合タルコトヲ示スヘキ文字ヲ用ウルコトヲ得ス

第六條 産業組合ニハ所得税及營業税ヲ課スルニ依リテ其ノ納税ノ義務ヲ負フ

第七條 産業組合ヲ七人以上ニ非サレハ之ヲ設立スルコトヲ得ス

第八條 組合ノ設立者ハ定款ヲ作り之ヲ主タル事務所所在地ノ地方長官ニ差出シ設立ノ許可ヲ請フ

第九條 定款ハ本法ニ規定アルモノヲ除クノ外左ノ事項ヲ記載シ設立者之ニ署名捺印スヘシ

一 目的
二 名稱

第三條 組織 第四條 住所 第五條 名稱 第六條 納税 第七條 設立 第八條 定款 第九條 記載事項

第十條 第一回拂込ノ金額 第十一條 組合員ノ加入及脱退ニ關スル規定

第十二條 存立時期又ハ解散ノ事由 第十三條 信用組合ノ區域ハ市町村ノ區域以內ニ於テ之ヲ定メ定款中ニ記載スヘシ

第十四條 地方長官ノ認可ヲ得テ此ノ區域ニ依ラサルコトヲ得

第十五條 産業組合ハ其ノ組合員ノ數ヲ限定スルコトヲ得

第十六條 出資一口ノ金額ハ均一ニ之ヲ定ムヘシ

第十七條 組合カ其ノ設立ノ許可ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク各組合員ヲシテ第一回ノ拂込ヲ爲サシ

第十八條 前條ノ拂込ナシタル時キハ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ設立ノ登記ヲ爲スヘシ

理事及監事ハ總會ニ於テ組合員中ヨリ之ヲ選任ス但シ組合設立ノ當時ノ理事及監事ハ定款ヲ以テ之ヲ定メルコトヲ得

第二十六條 理事ノ任期ハ三箇年トシ監事ノ任期ハ一箇年トス但シ定款ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十七條 理事又ハ監事ハ何時ニテモ總會ノ決議ヲ以テ之ヲ解任スルコトヲ得

第二十八條 理事及監事ノ選任及解任ハ總組合員ノ半数以上出席シ其ノ議決權ハ四分ノ三以上ヲ以テ之ヲ決ス但シ定款ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條 理事ハ定款及總會ノ決議録ヲ各事務所ニ備ヘ置キ且組合員名簿ヲ主タル事務所ニ備ヘ置クヘシ

組合員及組合ノ債權者ハ前項ニ掲ケタル書類ノ閲覧ヲ求ムルコトヲ得

第三十條 理事ハ通常總會ハ會日ヨリ一週間前ニ財産目録、貸借對照表、事業報告書及剩餘金處分案ヲ監事ニ提出シ且之ヲ主タル事務所ニ備フヘシ

第三十一條 理事ハ前條第一項ニ掲ケタル書類及監事ノ意見書ヲ通常總會ニ提出シテ其ノ承認ヲ求メ得

第三十二條 民法第四十四條第三項、第五十二條第二項、第五十三條乃至第五十五條、第六十條及第六十一條第一項ノ規定ハ産業組合ノ理事ニ之ヲ準用ス

第三十三條 監事ハ理事其ノ他組合ノ事務員ト相兼スルコトヲ得

第三十四條 民法第五十九條ノ規定ハ産業組合ノ監事ニ之ヲ準用ス

第三十五條 組合ハ理事ト契約ヲ爲ス場合ニ於テハ監事組合ヲ代表ス組合ト理事トノ間ノ訴訟ニ付裁判モ亦同シ

第三十六條 總會ハ決議ハ本法又ハ定款ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外出席シタル組合員ノ議決權ノ過半数ヲ以テ之ヲ爲ス

第三十七條 組合員ハ代理人ヲ以テ議決權ヲ行フコトヲ得此ノ場合ニ於テハ之ヲ出席ト看做ス但シ組合員ニ非ラバ代理人タルコトヲ得ズ

第三十八條 民法第六十二條、第六十四條、第六十五條第一項及第六十六條ノ規定ハ産業組合ニ之ヲ準用ス

第三十九條 定款ノ變更ハ總會ノ決議ニ依ルヘシ

第四十條 組合カ出資一口ノ金額ノ減少ノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ノ日ヨリ二週間内ニ財産目録及貸借對照表ヲ作ルヘシ

組合ハ前項ノ期間内ニ其ノ債權者ニ對シ異議アラバ一定ノ期間内ニ之ヲ述フヘキ旨ヲ催告スヘシ

但し其ノ期間ハ三箇月ヲ下ルコトヲ得ス

第四十一條 債權者ハ前條第三項ノ期間内ニ出資ノ減少ニ對シテ異議ヲ述ヘサリシトキハ之ヲ承認シタルモノト看做ス

債權者ハ異議ヲ述ヘタル時キハ組合ハ之ニ辨濟ヲ爲シ又ハ相當ノ擔保ヲ供スルニ非サレハ出資ヲ減少スルコトヲ得ス

第四十二條 前二條ノ規定ハ保證責任組合ガ組合員ノ保證金額ヲ減少スル場合ニ之ヲ準用ス

第四十三條 組合員カ其ノ出資ノ拂込ヲ終ル迄ハ之ニ配當スヘキ剩餘金ハ其ノ拂込ニ充ツヘシ

第四十四條 組合ハ損失ヲ填補シタル後ニ非サレハ剩餘金ノ分配ヲ爲スコトヲ得ス

組合員ノ持分ニ對スル剩餘金分配ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十五條 組合ハ第五十三條ノ場合ヲ除クノ外持分ノ拂戻ヲ爲スコトヲ得ス

第四十六條 組合ハ定款ヲ以テ定ムタル準備金ノ額ニ達スル迄毎事業年度ノ剩餘金ハ四分一以上ヲ積立ルヘシ

第四十七條 組合ノ事業年度ハ一箇年ト爲ス

第四十八條 組合ハ組合員ノ持分ヲ取得シ又ハ質權ノ目的トシテ之ヲ受クルコトヲ得ス

第五章 加入及脱退

第四十九條 無限責任組合ニ加入セム者ハ總組合員ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第五十條 定款ヲ以テ組合ノ存立時期ヲ定メ其ノ時限ヲ否トスルコトヲ得ルコトヲ要ス

退スルコトヲ得但シ六箇月前ニ其ノ豫告ヲ爲スヘシ

前項ノ豫告期間ハ定款ヲ以テ之ヲ延長スルコトヲ得但シ一箇年ヲ超スルコトヲ得ス

第五十一條 組合員ハ左ノ事由ニ因リテ脱退スルコトヲ得

第六十組合員ハ資格ヲ喪失

死亡

破産

禁治産

除名

第五十二條 除名ノ事由ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

除名ハ總會ノ決議ニ依ル但シ除名シタル組合員ニ其ノ旨ヲ通知スルニ非サレハ之ヲ以テ其ノ組合員ニ對抗スルコトヲ得ス

第五十三條 規定ハ前項ノ決議ニ之ヲ準用ス

第五十四條 脱退シタル組合員ハ定款ノ定ムル所ニ依リ其ノ持分ノ全部又ハ一部ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得

第五十五條 脱退シタル組合員ノ持分ハ其ノ脱退ヲ組合員名簿ニ記載シタル事業年度ノ終ニ於ケル

組合員名簿ニ依リ之ヲ定ム

第五十六條 持分ノ拂戻ハ事業年度ノ終ヨリ三箇月内ニ之ヲ爲スヘシ

持分拂戻ノ請求權ハ前項ノ期間經過ノ後二箇年間にテ行ハサルニ因リテ消滅ス

第五十六條 持分ノ計算ヲ爲スニ當リ組合財産ヲ以テ組合ノ債務ヲ完済スルニ足ラサルトキハ脱退シタル組合員ハ其ノ負擔ニ歸スベキ損失額ヲ拂込メベシ

第五十七條 脱退シタル組合員ハ組合ニ對スル債務ヲ完済スル迄ハ組合ハ其ノ持分ノ拂戻ヲ停止スルコトヲ得

第五十八條 無限責任組合及保證責任組合ニ在リテハ脱退シタル組合員ハ脱退前ノ組合債權者ニ對シ其ノ脱退ヲ組合員名簿ニ記載シタル後二箇年間に責任ヲ負擔ス

前項ノ規定ハ特別ノ契約ヲ以テ其ノ期間ヲ延長スルコトヲ妨ケス

前三項ノ規定ハ持分ヲ讓渡シタル組合員ニ之ヲ準用ス

第六章 監督

第五十九條 産業組合ハ主務大臣、地方長官及郡長之ヲ監督ス

第六十條 監督官廳ハ何時ニテモ理事ヲシテ組合ノ事業ニ關スル報告ヲ爲サシメ又ハ組合ノ事業及財産ノ狀況ヲ検査シ其ノ他必要ナル命令ヲ發シ及處分ヲ行フ

第六十一條 組合ノ事業又ハ組合財産ノ狀況ニ依リ其ノ事業ノ繼續ヲ困難ナリト認ムルトキ又ハ組合ノ行為カ定款若ハ法令ニ違背シ其ノ他公益ヲ害スルノ虞アルトキハ主務大臣又ハ地方長官ハ總會ノ決議ヲ取消シ、理事、監事若ハ清算人ハ改選天命シ、組合ノ事業ヲ停止シ又ハ組合ヲ解散スルコトヲ得

第七章 解散

第六十二條 組合ハ左ノ事由ニ因リテ解散ス

一 定款ニ定メタル事由ノ發生

二 總會ノ決議

三 組合ノ合併

四 組合員カ七人未満ニ減シタルトキ

五 組合ノ破産

第六十三條 組合カ解散シタルトキハ合併及破産ノ場合ヲ除クノ外二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ其ノ登記ヲ爲スベシ

第六十四條 第四十條及第四十一條ノ規定ハ合併ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六十五條 合併ハ地方長官ノ認可ヲ受クルニ非サルベキ其ノ効力ヲ生セス

第六十六條 組合カ合併ヲ爲シタルトキハ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ合併後存続スル組合ニ付テハ變更ノ登記ヲ爲シ、合併ニ因リテ消滅シタル組合ニ付テハ解散ノ登記ヲ爲シ、合併ニ因リテ設立シタル組合ニ付テハ設立ノ登記ヲ爲スベシ

第六十七條 合併後存続スル組合又ハ合併ニ因リテ設立シタル組合ハ合併ニ因リテ消滅シタル組合

八 權利義務ヲ承継ス

第六十八條 組合ハ總組合員ノ同意ヲ以テ其ノ組織ヲ變更スルコトヲ得

組合ガ組織變更ニ因リ組合員ノ責任ヲ減少スルトキハ第四十條及第四十一條ニ定メタル手續ヲ爲

第六十九條 民法第七十條ノ規定ハ産業組合ノ解散ニ之ヲ準用ス

第八章 清算

第七十條 清算人ハ其ノ職務ノ範圍内ニ於テ理事ト同一ノ權利義務ヲ有ス

第七十一條 清算人ハ就職後遅滞ナク組合財産ノ現況ヲ調査シ財産目録及貸借對照表ヲ作り之ヲ總會ニ提出シテ其承認ヲ求ムヘシ

第七十二條 清算人ハ組合ノ債務ヲ辨濟シ又ハ辨濟ニ必要ナル金額ヲ供託スルニ非サレバ組合財産ヲ分配スルコトヲ得ス

第七十三條 清算事務ガ終ラザルトキハ清算人ハ遲滞ナク決算報告書ヲ作り之ヲ總會ニ提出シテ其承認ヲ求ムヘシ

第七十四條 清算人ノ解任アリタルトキハ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ其ノ登記ヲ爲シ且之ヲ地方長官ニ届出シテ之ヲ公告ス

第七十五條 民法第七十三條乃至第八十三條ノ規定ハ産業組合ノ清算ニ之ヲ準用ス但シ同規定中一週間ハ二週間トス

第九章 罰則

第七十六條 組合ノ理事、監事又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上三百圓以下ノ過料ニ處セラ

ル
一 本法ニ定メタル登記ヲ爲スルコトヲ怠リ又ハ不正ノ登記ヲ爲シタルトキ
二 官廳又ハ總會ニ對シ不實ノ申立ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ

三 第二十九條第一項及第三十條第一項ノ規定ニ違背シ又ハ第二十九條第一項及第三十條第一項ノ規定ニ掲ケタル書類ニ記載スルべき事項ヲ記載セス又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ若シ正當ノ理由ナクシテ其ノ閲覧ヲ拒ミタルトキ

四 第四十條、第四十一條、第四十三條乃至第四十六條、第四十八條又ハ第七十二條ノ規定ニ違背シタルトキ

五 第六十條ノ報告ヲ爲サス又ハ検査ヲ拒ミ其ノ他監督官廳ノ命令又ハ處分ニ從ハサルトキ

六 民法第七十九條ノ期間内ニ借權者ニ辨償ヲ爲シタルトキ

七 民法第七十九條又ハ第八十一條ニ定メタル公告ヲ爲シタルトキ又ハ不正ノ公告ヲ爲シタルトキ

八 民法第七十條又ハ第八十一條ノ規定ニ違背シタルトキ

第七十七條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前條ノ過料ニ之ヲ準用ス

第七十八條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七十九條 産業組合ノ登記ニ付テハ其ノ事務所所在地ノ區裁判所又ハ其ノ出張所ヲ以テ管轄登記

所トス

第八十條 各登記所ニ産業組ニ登記簿ヲ備フ

第八十一條 組合設立ノ登記ハ理事及監事ノ全員ノ申請ニ因リテ之ヲ爲ス

申請書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一 定款

二 地方長官ノ許可書又ハ其ノ認證アル原本

三 第十五條第二號及第五號ニ掲ケタル事項ヲ證スル書面

第八十二條 事務所ノ新設移轉其ノ他登記事項ノ變更ノ登記ハ理事ノ申請ニ因リテ之ヲ爲ス

申請書ニハ登記事項ノ變更ヲ證スル書面ヲ添附シ且地方長官ノ認可ヲ要スルモノニ付テハ其ノ認

可書又ハ其ノ認證アル原本ヲ添附スヘシ

前二項ノ規定ハ組合員名簿ノ記載ノ申請ニ之ヲ準用ス

第八十三條 出資一口ノ金額又ハ組合員ノ責任ノ減少ノ登記ノ申請書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一 地方長官ノ認可書又ハ其ノ認證アル原本

二 第四十條第二項ニ依ル催告ヲ爲シタルコト、若シ異議ヲ述ベタル債權者アルトキハ之ニ對シ

辨濟ヲ爲シ又ハ擔保ヲ供シタルコトヲ證スル書面

第八十四條 組合ノ解散ハ登記ノ申請書ニハ解散ノ事由ヲ記載シ且組合カ總會ノ決議ニ因リテ解散
シタルトキハ總會ノ決議録ヲ添附スヘシ

第八十五條 合併ニ因リ解散ノ登記ノ申請書ニハ第八十三條ニ掲ケタル書面ヲ添附スヘシ

組合カ命令ニ因リテ解散シタルトキハ登記所ハ監督官廳ノ囑託ニ因リテ其ノ登記ヲ爲スヘシ

第八十六條 第八十二條第三項ノ規定ハ出資一口ノ金額又ハ組合員ノ責任ノ減少、組合ノ解散及組

合ノ合併ニ因リ變更、設立又ハ解散ノ登記ノ申請ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第八十七條 本法ノ規定ニ依リ登記シタル事項ハ裁判所遲滞ナク之ヲ公告スヘシ但シ組合員名簿ニ

記載シタル事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第八十八條 非訟事件手續法第三百二十六條乃至第三百三十八條、第四百十一條乃至第五百十一條、第百

五十四條乃至第五百五十八條、第六十三條乃至第六十五條及第七十五條乃至第七十七條ノ

規定ハ産業組合ノ登記ニ之ヲ準用ス

第八十九條 本法ノ規定ニ依リ郡長ノ行フヘキ職務ハ伊豆七島ニ於テハ東京府知事、北海道ニ於テ

ハ支庁長、沖繩縣ノ區ニ於テハ區長、島司ヲ置キタル島嶼ニ於テハ島司之ヲ行フ

第九十條 北海道ニ於ケル産業組合ニ付テハ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

○重要物産同業組合法明治三十三年三月
法律第三十五號

第十八條 農業同業組合

三五三十五

三五三十四

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル重要物産同業組合法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

重要物産同業組合法

第一條 重要物産ノ生産、製造又ハ販賣ニ關スル營業ヲ爲ス者ハ同業者又ハ密接ノ關係ヲ有スル營

業者相集リテ本法ニ依リ同業組合ヲ設置スルコトヲ得

重要物産及密接ノ關係ヲ有スル營業ノ種類ハ農商務大臣ノ認定ニ依リテ

第二條 同業組合ハ組合員協同一致シテ營業上ノ弊害ヲ矯正シ其ノ利益ヲ増進スルヲ以テ目的ト爲

第三條 同業組合ヲ設置セシムルハ其ノ地區ヲ定メ其ノ地區内ノ同業者三分ノ二以上ノ同意

ヲ得テ創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クベシ但シ二種以上ノ營業者相集ル組
合ヲ設置セシムルハ其ノ各經營業毎ニ三分ノ二以上ノ同意ヲ要ス

第四條 同業組合設置ノ地區内ニ於テ組合員同業ヲ營ム者ハ其ノ組合ニ加入スルヲ得但シ營業

上特別ノ情況ニ依リ農商務大臣ニ於テ加入ノ必要ナシト認ムル者ハ此ノ限ニ在ラス

第五條 同業組合ハ組合相互ノ氣脈ヲ通シ其ノ目的ヲ達スル爲同業組合聯合會ヲ設置スルコトヲ

得合意命合ニ依リ設置スルコトヲ得

同業組合聯合會ヲ設置セシムルハ其ノ創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受

クベシ

第六條 同業組合及同業組合聯合會ハ法人トシテ

同業組合及同業組合聯合會ハ營利事業ヲ爲スコレヲ得ス

第七條 同業組合及同業組合聯合會ノ定款ノ變更ハ各其ノ定款ノ規定ニ從ヒ之ヲ議定シ農商務大臣

ノ認可ヲ受クベシ

第八條 同業組合及同業組合聯合會ハ左ノ役員ヲ置クベシ

一 組長 一名

一 副組長 若干名

一 評議員 若干名

前項ノ役員ノ外定款ノ規定ニ依リ他ノ役員ヲ置クコトヲ得

役員ハ同業組合ニ於テハ組合員中ヨリ同業組合聯合會ニ於テハ聯合會ヲ組織スル同業組合ノ組合

員中ヨリ之ヲ選舉シ農商務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第九條 組長ハ其ノ同業組合又ハ同業組合聯合會ヲ統轄シ其ノ事務ヲ擔任ス

副組長ハ組長ノ事務ヲ輔佐シ組長故障アルトキ之ヲ代理ス

評議員ハ組長ノ諮詢ニ應ジ及業務施行ノ狀況ヲ監査スルモノトス

副組長及評議員ハ定款ノ規定ニ依リ組長ノ擔任スル事務ノ一部ヲ分掌スルコトヲ得

組長副組長共ニ故障アルトキハ評議員之ヲ代理ス

第十條 同業組合及同業組合聯合會ハ各其ノ定款ニ於テ検査規定ヲ設ケ組合員ノ營業品ヲ検査スル

コトヲ得

同業組合及同業組合聯合會ハ各其ノ定款ニ於テ違約者ニ關スル規定ヲ設ケ違約者ニ對シ過怠金ヲ徵シ違約物品ヲ沒收スルコトヲ得

第十二條 同業組合及同業組合聯合會ノ經費ノ豫算並徵收法ハ各其ノ定款ノ規定ニ從ヒ之ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

經費ノ決算及業務成績ハ每年少クトモ一回組合員ニ公示シ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十三條 同業組合及同業組合聯合會ハ其ノ事務ニ關シ行政廳ニ建議スルコトヲ得又其ノ諮問アルトキハ答申スヘシ

第十四條 同業組合及同業組合聯合會ハ農商務大臣又ハ地方長官ノ命シタル官吏ノ臨檢ヲ拒ムコトヲ得又其ノ質問ニ對シ確實ニ答辯スヘキモノトス

第十五條 農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ同業組合及同業組合聯合會ヲ設ケシムルコトヲ得

農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ同業組合ノ地區ノ範圍、營業ノ種類又ハ定款ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第十六條 同業組合若ハ同業組合聯合會ノ決議又ハ其ノ役員ノ行為ニシテ法律命令ニ違背シ又ハ公益ヲ害シ又ハ其ノ目的ニ違背シ又ハ監督官廳ノ命シタル事項ヲ執行セサルトキハ農商務大臣ハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

- 一 同業組合若ハ同業組合聯合會ノ解散又ハ其ノ業務ノ停止
- 二 役員ノ解職

三 決議ノ取消

第十七條 同業組合若ハ同業組合聯合會解散ヲ爲サムトスルトキハ組合員三分ノ二以上ノ同意ニ依リ其ノ事由ヲ具シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十八條 地方長官ハ其ノ管内ニ於ケル同業組合及同業組合聯合會ヲ監督シ必要アルトキハ意見ヲ具シ農商務大臣ノ處分ヲ請フヘシ

第十九條 農商務大臣ハ同業組合及同業組合聯合會ニ關シ其ノ職權ノ一部ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第二十條 第四條第十三條ノ規定ニ違背シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ過料ニ處ス

前項ノ過料ニ付テハ非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第二十一條 同業組合又ハ同業組合聯合會ノ證票若ハ検査證ヲ營業品ニ偽リテ附シタル者又ハ偽造ノ變造ノ證票若ハ検査證ヲ營業品ニ附シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第二十二條 本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

重要輸出品同業組合法ハ之ヲ廢止ス

重要輸出品同業組合法ニ依リテ設立シタル組合及聯合會ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ本法ニ依リ設立シタルモノト看做ス

第二十三條 他ノ法律中重要輸出品同業組合法ヲ準用スヘキモノト定メタル場合ニ付テハ本法施行ノ日ヨリ本法ノ規定ヲ準用シ重要輸出品同業組合法中ノ規定ニ依ルヘキモノト定メタル場合ニ付テハ之ニ相當スル本法ノ規定ヲ準用ス

○北海道ニ於テ農業者ノ設立スル産業組合 明治三十三年六月勅令第三百五十五號

朕北海道ニ於テ農業者ノ設立スル産業組合ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 本令ハ北海道ニ於テ農業者ノ設立スル産業組合ニ之ヲ適用ス

第二條 組合ノ組織ハ無限責任トス但シ設立後十箇年ヲ經タルモノハ北海道廳長官ノ許可ヲ得テ有限責任又ハ保證責任ト爲スコトヲ得

第三條 産業組合ハ二十人以上ニ非ザレハ之ヲ設立スルコトヲ得ス

第四條 主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ三箇年以内ノ期限ヲ以テ組合創業費ノ一部又ハ全部ヲ其ノ組合ニ貸與スルコトヲ得

第五條 出資ハ勞務ヲ以テ其ノ目的ト爲スコトヲ得

第六條 組合員ノ出資口數ハ一口トス但シ北海道廳長官ノ許可ヲ得タル場合ハ十口以下ニ於テ之ヲ定ムルコトヲ得

第七條 組合ノ理事ハ三名以上監事ハ二名以上トス但シ北海道廳長官ノ許可ヲ得タル場合ハ此ノ限

ニ在ラス

第八條 理事ハ總組合員ノ承諾アルニ非ザレハ組合ト同一ノ事業ヲ目的トスル他ノ組合ノ理事ト爲ルコトヲ得ス

第九條 組合ハ毎事業年度ノ終リ迄ニ總會ノ決議ヲ經テ左ノ事項ヲ北海道廳支廳長ニ報告スヘシ

- 一 次年度ニ於ケル業務施行ノ方針
 - 二 次年度ニ於ケル負債額ノ最高限度
 - 三 信用組合ニ在テハ次年度ニ於テ組合員ニ貸付シ得ヘキ金額ノ最高限度
- 前項第二號ノ負債額ノ最高限度ハ現在負債額ヲ合シテ之ヲ定メ其ノ年度内ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第十條 組合ハ組合員ノ脱退シタル場合ニ於テモ出資ノ外其ノ持分ヲ拂戻スコトヲ得ス

第十一條 存立時期ヲ定メタル組合ニ於テハ其ノ組合員ハ已ムコトヲ得サル事由アル場合ヲ除クノ外總組合員ノ同意アルニ非ザレハ脱退スルコトヲ得ス

第十二條 組合ハ組合員ノ數二十人以下ニ減シタルトキハ解散ス

第十三條 登記及届出ニ關シ産業組合法ニ於テ定メタル二週間ノ期間ハ本令ニ於テハ之ヲ三週間トス

第十四條 産業組合法ニ定メタル郡長ノ職務ハ支廳長之ヲ行フ

附 則

本令施行ノ期日ハ内務大臣之ヲ定ム

○蹄鐵工免許規則 明治二十三年四月
法律第三十一號
朕蹄鐵工免許規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

蹄鐵工免許規則

第一條 蹄鐵工ハ農商務大臣ヨリ蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ニ限ル

蹄鐵工トハ他人ノ依頼ニ應ジ蹄鐵ヲ裝シ又ハ蹄ヲ剪ルヲ以テ其ノ業ト爲ス者ヲ謂フ

第二條 蹄鐵工免狀ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

一 蹄鐵工免許試験ニ合格シ其及第證書ヲ有スル者

一 官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校又ハ陸軍部内ニ於テ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 外國ニ於テ官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校ト同等以上ノ學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 獸醫開業免狀ヲ有スル者但獸醫假開業免狀ヲ有スル者ヲ除ク

第三條 第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ蹄鐵工免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試験及第證書又ハ卒業證書若クハ獸醫開業免狀ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條 蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ蹄鐵工籍ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ

第五條 蹄鐵工廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條 (二十九年法律第二十七號ヲ以テ消滅)
蹄鐵工免狀ヲ毀損亡失シ若クハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ (二十九法律第二十七號ヲ以テ第二項消滅)

第七條 蹄鐵工ハ正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ムコトヲ得ス

第八條 免狀ヲ受ケスシテ蹄鐵工ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第九條 免狀ヲ受ケスシテ蹄鐵工ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 第八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上二圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

附則

第十一條 蹄鐵工免許規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第十二條 蹄鐵工ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ蹄鐵工假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第十三條 第十二條ニ依リ蹄鐵工假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス

第十四條 此ノ規則施行以前免許ヲ受ケタル獸醫ニシテ蹄鐵工ヲ兼テント欲スル者ハ第三條ニ依リ蹄鐵工免狀ノ下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ免狀ヲ受クル者ハ「第六條ノ手数料」ヲ要セス

第十五條 此ノ規則ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

附 録

○河川法第四十七條ニ依レル命令明治三十三年七月
勅令第三百號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ河川法第四十七條ニ依レル命令ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 河川附近ノ土地ノ形狀又ハ家屋其ノ他ノ工作物ニシテ河川ニ害ヲ及ホシ又ハ及ホス虞アルトキハ府縣知事ハ其ノ土地ノ形狀ヲ變更シ又ハ家屋其ノ他ノ工作物ヲ改築若ハ除却シ又ハ其ノ所有者ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

第二條 河川附近ノ土地ニ在ル土砂、竹木等ニシテ河川ニ害ヲ及ホシ又ハ及ホス虞アルトキハ府縣知事ハ其ノ所有者ヲシテ之ヲ除却セシムルコトヲ得

第三條 河川ニ關シ必要アルトキハ府縣知事ハ河川附近ノ土地ニ立入り又ハ之ニ標柱等ヲ設置スルコトヲ得

第四條 左ニ掲ケタル行爲ヲ爲サムトスル者ハ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

一 河川附近ノ土地ニ於ケル家屋以外ノ工作物ノ新築、改築又ハ除却

二 河川附近ノ土地ノ掘鑿其ノ他土地ノ形狀ノ變更

三 堤外地ニ於ケル家屋ノ新築、改築若ハ除却又ハ竹木ノ栽植若ハ伐採

第五條 沿岸土地ノ所有者ハ其土地ヲ曳船道ニ供スヘシ

前項制限ノ範圍ハ各曳船道ニ付府縣知事之ヲ定ム